

阪神大震災の救援活動について

救援活動の概要について

済生会阪神大震災現地対策本部

阪神大震災に際して、済生会は厚生省の要請もあり震災発生後三日目の平成七年一月十九日に済生丸を派遣して以来四十一日間にわたって、診療班延べ三百人余りを被災地に派遣して約三千人の被災者の診療等の他済生会兵庫県病院等に救援活動を行い、平成七年二月二十八日にその救援活動を全員つつがなく無事に終了した。

今回の救援活動は主として、済生丸による救援活動と被災地への診療班の派遣及び神戸市北区にある済生会兵庫県病院と特別養護老人ホームふじの里へ被災患者と被災老人を受け入れることであった。

この他に、大阪府等の近畿地方の済生会病院も被災患者を受け入れており、また、各都道府県等の要請により多数の済生会病院が独自に被災地へ診療班を派遣した。

本会の救援活動は平成七年一月十八日に岡山済生会総合病院に済生丸救援活動連絡事務所を設ける他に、一月二十一日に大阪の中津

病院に済生会現地対策本部を設けることによつて、組織的に行われるようになった。多くの済生会の職員が何らかの形で今回の災害の救援にあたることを望んでおり、現地対策本部は診療班の派遣にあたって救援活動を希望する多数の病院の調整に苦労するほどであった。

また、診療班を派遣した各病院、施設では救援活動に伴う支援活動の他、職員が手薄になったにもかかわらず、通常の診療活動を行っていた。

一、被災地の状況と救援活動開始までの経過

今回の震災は、神戸市、淡路島等の兵庫県南部の広い地域に死者五千人を越える大きな被害を生じた災害であった。しかし、被災地の通信と交通の断絶のために、震災の発生した平成七年一月十七日にはこの震災の被害の程度は明らかではなかった。その後、時間の経過とともにその災害の程度が明らかになる

につれて、救援活動の実施が強く認識され、また、職員の中にはボランティアとして被災地での援助活動を希望する者もあった。この様な状況の中で、済生会理事長は阪神大震災による大きな被害の報道や済生会各病院からの要請を総合して、大阪に現地災害対策本部を設置することを決定した。

二、済生会現地災害対策本部の設置

震災発生後、平成七年一月二十一日に翁理事長を本部長に、菊田済生会病院長を副本部長として大阪の済生会中津医療福祉センターに済生会阪神大震災現地対策本部を設置した。この対策本部は、すでに活動を始めていた済生丸連絡事務所を下部機関とするものであった。

同対策本部の活動計画は済生丸による神戸市長田区への診療班の派遣、東灘区への診療班の派遣、済生会兵庫県病院と特別養護老人ホームふじの里への支援、大阪等の済生会病院への被災患者の受け入れをその主たる目的とした。

診療班については交通、通信の断絶のために神戸市を中心として東側は近畿地方及び近畿以東の済生会病院から派遣することとし、西側は済生丸を利用して中国四国及び兵庫県以西の済生会病院から派遣することにした。

同対策本部事務局は済生会本部から派遣した理事を始め職員一、二名と、現地で採用した非常勤の職員で構成され、全国済生会の協

力の下に診療班派遣等の救援活動のための事務処理、連絡、調整、物資の補給等にあたった。

三、高松宮妃殿下のおことばと救援資金

平成七年一月二十三日、総裁高松宮宣仁親王妃紀久子殿下からお言葉を賜るとともに済生会の救援活動の推進に役立てるようにとの思召しで多額の資金を賜った。この活動資金によって、済生会兵庫県病院や特別養護老人ホームふじの里は患者等の受け入れに対応して必要となるベッドや椅子を補給することができたが、この資金はその後円滑且つ迅速に救援活動を行う上で大変役に立った。

四、済生丸の派遣と連絡事務所の設置

済生丸は震災発生の翌日、平成七年一月十八日に岡山県保健福祉部、厚生省の要請により、被災地へ診療班を派遣することを決定した。

済生丸はすでに予定されていた岡山、広島、香川、愛媛の各県における瀬戸内海巡回診療計画を変更し、通信の途絶のために船舶の航行の安全に必要な神戸港への入港許可の取得などの他に短時間に必要な救援物資を集めること等、済生丸の救援活動を始めるまでには多くの困難があった。しかし、同船の派遣のための準備は、岡山済生会総合病院の職員と関係者の努力により短期間のうちに完了した。平成七年一月十八日深夜には、紙おむつ六

千枚、粉ミルク二百キロ等の援助物資、医療材料、診療班の持参する食料、医療品の用意等を病院の医師、看護婦、全資材課職員等の協力により積み込みが終了し、済生丸は第一班の診療班を乗せて同十九日午前一時に新岡山港を出港した。

同十九日午前七時三十分には神戸新港へ入港。救援物資を神戸市災害対策本部に引き渡すと同時に、同船の診療班は神戸市長田区の避難所へ巡回診療を行った。

当時の神戸市の状況はライフラインは破壊され、通信、交通も破壊されて巡回診療は徒歩で行うなどその活動は困難を極めた。

しかしながら、済生会の診療班は夜間に済生丸に宿泊していたために、水、食料、トイレ、暖房等の生活水準は確保されていた。災害救助の原則は外部から被災地への救援活動は自給自足の体制を整えておくことであり、済生丸はこの条件を満たしていた。その後、済生丸は二月一日迄の間に三回ほど岡山港へ補給のために回航する以外は神戸港に接岸して診療班の巡回診療を支援していた。

済生丸の診療班は当初は神戸市長田区の避難所に巡回診療を行っていたが、平成七年一月二十九日からは眞野小学校に拠点を置き夢野台高校その他に巡回診療を行った。

済生丸による瀬戸内海の巡回診療は委員会によって運営されており、その連絡事務所は岡山済生会総合病院に設けられていたために、この連絡事務所が阪神大震災に対する済生丸

の救援活動の連絡事務所として活動した。

済生丸に関する診療活動については、十六の済生会病院が十三班に分かれて交代で救援活動を行い、二月二十八日に救援活動を終了した。

五、神戸市東灘区への診療班の派遣

震災発生後、大阪府の各済生会病院は被災した職員及びその家族からの情報により災害の程度が大きいことが明らかになるにつれて、大阪府の有志の済生会病院長は個別に神戸市の被災地を訪れて神戸市の保健所等と連絡をとり診療班の派遣に関する協議を神戸市と行った。

済生会現地対策本部の設立以後、平成七年一月二十四日には野江及び泉尾の各病院が灘高校に設けられた避難所を拠点として被災者の診療にあたった。

なお、ポートアイランドにも拠点を設けて診療班を派遣したが、諸般の事情もあり、三日間で診療活動を中止した。

東灘区への診療班活動については、十七の済生会病院が十七班に分かれて救援活動を行い、二月二十四日に救援活動を終了した。

六、兵庫県病院の活動

兵庫県病院は幸いにして被災も軽微であったため、県からの要請もあり巡回診療にあたるよりは第二次救急病院として時間外の当直医師四名の配置等二十四時間体制をとり、急

拠十五床のベッド整備を行うなどにより多数の負傷者、透析患者等を受け入れた。

また、隣接の特別養護老人ホームふじの里もロビー等を活用して急拠整備を行い二十八名の老人被災者を受け入れた。

当初、被災地に診療班を派遣したが、神戸市の要請により、重傷者の治療、腎透析、出産等の患者を多数引き受けて現在に至っている。

七、各済生会病院の独自の救援活動

今回の災害において、多数の病院が都道府県や大学の救援活動の一環として、診療班を派遣している。これらの病院は比較的初期の段階の悪条件の中で救援活動を行ったものが多い。

八、被災患者の受け入れ

大阪、京都など隣接地の各病院も被災地からの患者を引き受けてたり救援活動にあたっていた。これらの病院では被災した職員も多く、また交通手段・通信の断絶などの悪条件にもかかわらず、それぞれの病院に出勤し、泊まり込みで診療にあたっていた。

九、兵庫県の被災状況

今回の震災は神戸市長田区は火災による被害が多く、地震による災害は神戸市中央区より東側、すなわち神戸市灘区、同東灘区、芦屋市、西宮市において大きかった。被災地の

状況は震災発生当初から一週間から十日間くらいまではライフラインの破壊による混乱が甚だしかったが、救援活動が組織的に行われ始めると次第に落ちつきを取り戻してきたように思われる。被災地の救援活動はボランティアの他に自衛隊、各地方自治体によって行われている。

特筆すべきことは自衛隊が組織的に行った人命救助、給水支援、ごみ処理、入浴支援、倒壊家屋の解体、物資の輸送、医療支援等の援助活動は市民に高く評価されている。また、兵庫県職員及び神戸市の職員については、神戸市職員の死亡十五名、兵庫県職員の死亡四

名の他に家族を失った者も多く、自らも被災しているのにもかかわらず不眠不休の救援活動を行ってきたことは敬意を表すると共に高く評価すべきものである。

十、今後の対策

平成七年三月の常任理事会において、今回の救援活動について報告をしたところ、反省すべき点があることと、今後、済生会の危機管理の対策や救援活動のシステム化を行う必要があるとの意見があった。この意見に基づいて、済生会は災害対策について検討を行っている。

済生会対策本部の概況

済生会阪神大震災現地対策本部 副本部長

(御所病院院長) 菊田 捷二

稀有の大震災から数カ月が経ち現地では交通機関をはじめ復興の息吹きを感じられるが、今なお約三万人の人達が避難所生活をされている現況に当時の悲惨な状況を想起して心が痛むのを覚える。

災害発生当時は道路をはじめとする全ての交通機関や情報伝達網の広汎な打撃により、

一般には救援救護に参加する事は困難を極めた。一月十八日夕刻、現地を見て来た武田(泉尾)院長、救急隊を編成して待機中の藤沢(福井)院長から済生会として出動しようという督励を受けた。

翌十九日この旨を翁理事長にお願いして直ちに了承を得た。又更に厚生省社会・援護局

長の要請を受け救護出勤計画を建てることになり、二十日午后目黒理事の来訪を受け指揮系統の確立等種々検討した。

翌二十一日、大阪で予定の院長幹事会並ブロック院長会が開催されたが、急遽議題を追加してこの度の震災に対するわれわれ済生会の対応を討議することになった。各病院被災者収容診療状況や現地在住の職員の被災状況が報告され、すでに活動していることが確認されたが交通事情の最悪の有様も判った。京都府病院は病院協会として出勤しており、静岡病院を初め出勤態勢を終えている病院が多く意欲がひしひしと感じられたが、受入れ側の対応が未調整のため足踏み状態が続いている。

また済生丸は十九日から出勤し救護診療を開始していること、兵庫県病院は職員多数の被災者を抱えながら患者の収容治療、特養施設の臨時収容等の大活躍を行っている報告があった。諸々の意見を総合した結果、近畿地区の院長が二十三日に中津に集合すること、それまでに全ての病院が救護班を編成することにした。二十二日中神（富田林）院長が神戸市役所を訪れ関係保健所等との連絡並びに情報収集して済生会ナース出勤場所の調整を行った。

二十三日、中津医療福祉センター会議室で近畿ブロック院長及び目黒理事が午后三時に集合し、現地災害対策本部の設置並びに救護活動の実施に関する検討を行う。席上総裁高

松宮宣仁親王妃喜久子殿下より有難いお言葉を頂きかつ多数の資金を御下賜下さったことが伝達され一同緊張裡に議事を進めた。

中神院長初め種々の情報を基として勘案した結果、神戸市東西の交通が分断状態にあることを考慮して、西側は済生丸を據点とする長田区内の担当を西ブロックの病院にお願いしその調整を美馬（香川）院長にお願いすることにする。東側は最も災害の甚しい東灘地区にて診療することに決定し、取り敢えず二十四、二十五日は野江病院と泉尾病院が出勤することとし、その際状況により次の行動を展開することにした。両病院は救急車に薬品、機材を積み東灘地区の避難所で巡回診療を行った。

二十五日中津の対策本部で幹事会を行った際神戸市役所、東灘保健所との連絡によつて東灘地区は灘高校に定点とすることが決った。二十六日から二日間中津チームが今までの情報を基に薬品、衛生材料の他食料、暖房用機器、寝具等宿泊の用意、救急車で搬入し現地で設営しながら救護活動を行う。此の間対策本部室では中津の好意により電話、FAXの設置や専任事務員の雇用を初め着々と整備が進み情報収集、連絡等がスムーズに行われるようになった。

二十六日第二回の近畿ブロック院長会議を開催した。さらに不足機器の整備、アクセスの確保等を検討した後、二十七日以降の診療分担病院の取り決めを行い一応二月十五日

までの割当が一同の協力により決定し救護診療態勢は一応整った。

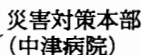
その間、西側済生丸を據点とするチームも二つの定点が決定し長田区の真野小学校、夢野台高校で診療が継続して行われるようになった。

またこの際、救護隊員の万一を考慮して傷害保険を掛けることになり本部職員によつて作業が進められた。

二十八日の対策本部の情報では東西グループとも軌道に乗り、それぞれ診療所と避難所



真野小学校の診療所を訪れた災対本部の
菊田副本部長(右)と武田代表理事(2.14)



今思えば本当に各病院が一致協力して済生会の名の下に活動出来たことに喜びと誇りを感じ、また済生会人の絆が一層堅くなったことを確信する次第である。

東灘班の活動について

済生会阪神大震災現地対策本部 代表幹事

(中津病院院長) 辻野 博之

阪神大震災は神戸の町に壊滅的な打撃を与え、直後から兵庫県病院をはじめとして近畿の済生会病院には多くの被災患者が搬送された。また、各地の済生会病院は独自に、地方自治体や大学・施設などの要請により診療班を編成し、被災地の救護活動に参加した。

総裁 高松宮宣仁親王妃喜久子殿下よりお言葉と御下賜金をいただき、済生会本部に翁理事長を本部長とする災害対策本部が設置され、さらに効率的な活動をするため、七月一月二十三日(月)中津病院内に現地対策本部がつくられて、神戸市に対する救護活動がはじまった。すでに活動をはじめていた済生丸班と東灘班の二つの医療班が拠点となった。

火災による被害がもつとも大きかった長田区の救護活動を済生丸班が、地震そのものによる死者がいちばん多かった東灘区の救護活動を東灘班が担当し、神戸市より西と東の済生会病院がそれぞれ協力するかたちになった。

現地対策本部での第一回幹事会は一月二十三日(月)に開かれた。幹事会名簿(東灘班)は表1のとおりである。目黒理事、中神富田林院長、古瀬野江院長、武田泉尾院長による被災地の情報は次のようなものであった。

一 東灘区では開業医の多くが被災し、医療活動は一時途絶えていたが回復しつつある。

二 中規模(五百人)以下の避難所では常駐の医療班を求めるものと夜間の診療のみでよいとするものがあるが、いずれも二十四時間体制の常駐診療所の設置を希望している。小規模の避難所には巡回診療が必要である。

三 早期から出動した医療班で引揚げるものが増えてきたので済生会医療班の継続的な活動を望んでいる(神戸市)。

四 交通事情は悪く、東灘区へのアクセスにはかなり時間がかかる。

五 避難所内の診療所には寒さに対する配

慮が必要である。
六 患者の主体はかぜ等の内科疾患が多いが、薬品は東灘保健所内に相当用意されている。

七 常駐診療所の予定場所は灘高校になりそうであるが、神戸市はポートアイランドの港島中学校内にも設置することを望んでいる。

その他、多くの意見が出されたが、協議の結果次のようにまとめた。

一 一月二十六日(木)午前九時、中津病院班が薬品、医療器具、暖房器具、寝具、旗等をもって、灘高校内の常駐診療所の設営にいき、そのまま二泊三日の診療をし、次の医療班に引継ぐ。

二 東灘班の医療班派遣期間は二月末日までとし、表2のスケジュールにより実施する。

三 遠隔地からの医療班の東灘区へのアクセスを円滑にするため、現地対策本部の近くに宿泊所を設ける。

四 班編成は医師二名看護婦二名とするが医師一名看護婦一名ずつに分けてもよく、薬剤師・事務員などは各班の判断にまかす。

五 一回の派遣は二泊三日とし、午前十時三十分交代する。

計画は予定どおりに実施されたが、被災地の状況の変化によってかなり変更された。港島中学校の常駐診療所も実現せず、三日間の

巡回診療のみで終わり、対策本部の近くの宿泊所も交通事情がよくなったため予約を取消した。しかし、冬の真っ只中、所謂ライフラインの破壊と通信・交通事情の極端に悪い中ではじまった東灘班の救援活動は、菊田副本部長・目黒理事のリーダーシップのもと、参加者全員の献身的な努力によって予期以上の成績をあげ、済生会の医療に対する人々の信頼をえたように思う。

その後、被災地の診療状況は徐々によくなり、神戸市と協議して東灘班の救援活動は二月二十四日（金）をもって中止とまとめた。二月二十三日（木）に予定されていた富山病院班に代わって中津病院班が二月二十四日（金）の正午まで診療し、薬品類は東灘保健所に、食品類はボランティアにそれぞれ寄贈し、本部三村次長、中津病院小林副院長が被災者や関係各方面の人々にあいさつをして、撤収を完了した。東灘班の診療活動内容は、派遣人員数延べ二百二十二人（医師八二、看護婦七五、薬剤師等六五）患者数千二百二十三人であった。

付記 当初灘高校の入口にかげられた済生会の旗は、中津病院の救援活動に際し、戦前から使用されていたものであるが、旗に限らず、済生会の存在をアピールする統一のある服装や標識をもって皆で活動すれば、人々に分かりやすく、済生会に一層の親しみをもってもらえるのではないかと思う。

表1 幹事会名簿（東灘班）

施設名	氏名
福井県済生会病院	藤澤 正清
松阪総合病院	藤森 健而
滋賀県病院	井上 四郎
中津病院	辻野 博之
吹田病院	佐々田 武
野江病院	古瀬 清次
泉尾病院	武田 惇
泉尾第二病院	中川 義隆
富田林病院	中神 一雄
茨木病院	藤江 隆夫
奈良病院	島田 健太郎
中和病院	八倉 萬之助
御所病院	菊田 捷二
和歌山病院	井関 良夫
有田病院	長崎 靖彦



灘高校正門前

表2 済生会医療スケジュール(東灘班)

一月二十四日(火)	野江	二月十一日(土)	松阪
一月二十五日(水)	泉尾	十二月十二日(日)	
一月二十六日(木)		十三日(月)	
二十七日(金)	中津	十四日(火)	中和
二十八日(土)		十五日(水)	
二十九日(日)	富田林	十六日(木)	静岡
三十日(月)		十七日(金)	
三十一日(火)	吹田	十八日(土)	福井
二月一日(水)		十九日(日)	
二日(木)	茨木	二十日(月)	新潟第二
三日(金)		二十一日(火)	
四日(土)	奈良	二十二日(水)	宇都宮
五日(日)		二十三日(木)	
六日(月)	滋賀	二十四日(金)	富山
七日(火)		二十五日(土)	
八日(水)	御所	二十六日(日)	中央
九日(木)		二十七日(月)	
十日(金)	和歌山・有田	二十八日(火)	神奈川
十一日(土)			

済生丸を拠点にした救援診療が どのようにして始まったか

済生会阪神大震災現地対策本部代表幹事

(香川県済生会病院院長) 美馬 恭一

平成七年一月十七日未明、午前五時四十六分、日本全国はこの時から衝撃的な兵庫県南部地震(後に阪神大震災)にマスコミ等総ての報道が集中されてきた。昭和二十三年の福井地震を上回り、関東大震災に次いで二番目の規模ということで、NHK神戸支局の生々しい揺れは、何回TVで見てもすさまじいものであった。

ビル、家屋の崩壊、電気、水道、ガス等のライフラインのマヒは、多数の死者と共に負傷者、避難民を出した。

当院では昭和四十九年と昭和五十一年の八号、十七号台風による県内小豆島台風被害にも、済生丸の救援医療活動を行った経験があり、救援態勢をと考慮中に、翌日の十八日瀬戸内海巡回診療船済生丸連絡事務所若本氏から電話で、兵庫県から済生丸を災害救援診療に出して欲しいとの要請があったとの報告が飛び込んできた。

当時、済生丸は愛媛県下で巡回診療中であ

ったので、これを中止して兵庫へ回航し、救援診療をするのを認めて欲しいとのことであった。

勿論当然のことであり、病院自体もこのことを考えていたので承知の返事をした。そして、電話で済生丸救援活動についての対応を協議、以下のように決定した。

取り敢えずは、診療班員を現在運用している四県、岡山、広島、愛媛、香川の病院で編成することとし、第一班岡山病院、第二班岡山病院、第三班愛媛・岡山病院の混成チーム、第四班広島・香川の混成チームとすること及び被災地神戸が家屋の倒壊によって、診療班の宿泊に不便なこともあって、冷暖房、水道、食事の提供可能な済生丸を拠点とすること、また派遣期間は取り敢えず、一班二泊三日で交替し、一月三十日までとすること等を決定した。期間中の班員の移動はJRの被災、交通の渋滞等も考慮して済生丸によることとした。

日が経つにつれて被害状況も正確に把握され、死者は五四〇〇人余りにのぼり、公民館、学校体育館等に避難した人々は二十一万余人と集計され、死者の中で九割は圧死ということ、負傷者にいたっては統計が出ない程であった。

一月二十五日には神戸市地震対策本部から、済生会本部理事長宛に、済生丸の救援診療に対する御礼と共に重ねて「つきましては離島に於ける僻地巡回診療の事情は、理解しているつもりでございますが、事情ご賢察頂き巡回診療船済生丸での診療を継続できるよう格別のお取り計らい」を要請する文書が届けられた。

そこで済生丸を運営する四県の病院長は一月二十八日(土)岡山病院に集合して協議を行うことを決めた。

済生会本部からは、中津病院に対策本部が設けられ本部長に翁理事長が就任したことが、ファックスで送られてきた。私が済生丸診療班の代表幹事となり四県の病院長が幹事に任命された。

済生会の診療態勢は神戸市の被害が甚だしく、市内の東西交通が遮断されたこともあって、東部灘区を中心とした救援を中・東プロックの病院で、西部長田区を中心とする診療は主として、西プロックの済生会病院が分担して行うこととなった。

長田区を中心とした診療班は既に一月中の診療態勢を決めていたので、今回は二月以降

をどうするか相談することとなり、岡山病院に集合した。

当日、先ず第一次・第二次診療班の出勤に至る経過と各班からのレポートの検討、また丁度現地から帰っていた第三班から神戸の被災状況の報告を受け、現地の状況を把握した後で、岩本診療船連絡事務所長も同席して二月の診療について協議した。

協議課題一、現地の被害状況、また兵庫県知事からの要請もあるので、二月末までの診療態勢を組むことが必要であること。

二、現地の診療班は、一次から二次に至る診療班からのレポートやヒアリングで外科系を中心とした初期医療の段階は終了した感があるので、二月からは避難民の健康維持のための救援医療、すなわち内科・小児科を中心とした診療班の編成をする。

でき得れば内科医師二名、小児科医師一名、ナース三名で、一つの診療班を編成し、同じ病院の医師一名、ナース一名のペアでもって一チームをつくり、三チームの班員で出勤すること。また、連絡事務のために調整員一名をつけること。

三、現地での診療は一月中の経験と長田保健所の要請もあり、長田区内の眞野小学校と夢野台高校を拠点とし、現地の状況に応じて巡回診療をする。

四、現地では各診療班員は済生会の腕章をつけること、班員交替時には必ず申し送りをする。場所は長田保健所で行うことを決定した。

五、さらに診療班は、夜間一チームは避難所で当直をして二十四時間態勢をとること。他の二チームは、済生丸で宿泊すること。さらに診療班のための携行品の検討を行った。

六、医療救援活動が長期化するため、岡山、広島、愛媛、香川の四県のみでは人員の確保が困難であり、また他の済生会病院からもボランティアの申し込みがあるので、西日本各地の済生会病院にも応援をお願いすることとした。

会議の後、四県以外に応援出勤をお願いした何れの病院長からも快諾を得られた。一番の困難と思っていた人事が、直ちに応諾を得たことは、これが済生会の伝統であると今さらながら誇らしく思った。当院からも二回にわたって出勤してくれた職員に感謝をしてい

る次第である。

七、出勤期間の件では、一月中は交通事情もあり、診療班員の移動は岡山に終結して、新岡山港から神戸港までの移動航海が六時間も必要であり、前後二日間が移動のために無駄になっていたが、二月になり新幹線が姫路まで開通したので、移動を新幹線と在来山陽本線の乗り継ぎで行い、前後の空白をなくし、三泊四日の診療活動を行うことなどを決定した。

以上が、今回の西部長田地区を中心とした済生丸診療活動についての行動計画である。救援出勤詳細・現地での診療状況についての記事は、それぞれ担当の人が記録されると思うが、西地区の各病院のご協力、また済生丸船員の協力なしには、長田地区の救援医療は達成できなかったと思われる。

最後に、当地での神戸被災者の診療については、当初から無料の揭示を行い大変喜ばれたが、被災者の方から次のような有難い短歌をいただいたことを報告しておきたい。

激震地 避けて訪ねし 済生の

医療の人々 天職に生く

紫暁流 日本吟奨会総本部会長

宗 家 小 笠 原 二 郎

香川県済生会病院

美 馬 院 長 殿

済生丸を拠点とした医療救護班

第1班	〃	看護婦	(4)	岡山病院	臨床検査技師	(1)
平成7年1月19日～1月22日	〃	薬剤師	(1)	第10班		
岡山病院 医師：整形外科	(1)	〃	事務員	(3)	平成7年2月16日～2月19日	
〃 医師：外科	(1)	山口病院 医師：内科	(1)	熊本病院 医師：内科	(1)	
〃 看護婦	(2)	〃 看護婦	(1)	〃 医師：消化器科	(1)	
〃 放射線技師	(1)	第6班		〃 医師：循環器科	(1)	
〃 事務員	(1)	平成7年2月4日～2月7日		〃 看護婦	(3)	
第2班	下関病院 医師：内科	(2)	岡山病院 臨床検査技師	(1)		
平成7年1月22日～1月25日	〃 医師：外科	(1)	〃 放射線技師	(1)		
岡山病院 医師：外科	(1)	〃 看護婦	(3)	第11班		
〃 医師：内科	(1)	岡山病院 薬剤師	(1)	平成7年2月19日～2月22日		
〃 医師：小児科	(1)	〃 事務員	(1)	山口病院 医師：内科	(1)	
〃 看護婦	(3)	第7班		〃 看護婦	(1)	
〃 事務員	(1)	平成7年2月7日～2月10日		〃 事務員	(1)	
第3班	山口病院 医師：脳外科	(1)	境港病院 医師：外科	(1)		
平成7年1月25日～1月28日	〃 看護婦	(1)	〃 看護婦	(1)		
松山病院 医師：外科	(1)	〃 事務員	(1)	江津病院 医師：外科	(1)	
〃 看護婦	(1)	唐津病院 医師：内科	(1)	〃 看護婦	(1)	
西条病院 医師：内科	(1)	〃 看護婦	(1)	岡山病院 臨床検査技師	(1)	
〃 看護婦	(1)	大牟田病院 医師：内科	(1)	第12班		
岡山病院 医師：内科	(1)	〃 看護婦	(1)	平成7年2月22日～2月25日		
〃 看護婦	(1)	岡山病院 事務員	(1)	広島病院 医師：内科	(1)	
〃 事務員	(1)	第8班		〃 看護婦	(1)	
第4班	平成7年2月10日～2月13日		呉病院 医師：内科	(1)		
平成7年1月29日～2月1日	境港病院 医師：内科	(1)	〃 看護婦	(1)		
広島病院 医師：外科	(1)	〃 看護婦	(1)	香川病院 医師：小児科	(1)	
〃 看護婦	(1)	福岡病院 医師：内科	(2)	〃 看護婦	(1)	
呉病院 医師：内科	(1)	〃 看護婦	(2)	岡山病院 臨床検査技師	(1)	
〃 看護婦	(1)	岡山病院 臨床検査技師	(1)	〃 事務員	(1)	
香川病院 医師：内科	(1)	〃 事務員	(1)	第13班		
〃 看護婦	(1)	第9班		平成7年2月25日～2月28日		
岡山病院 事務員	(1)	平成7年2月13日～2月16日		岡山病院 医師：内科	(2)	
第5班	八幡病院 医師：内科	(1)	〃 医師：外科	(1)		
平成7年2月1日～2月4日	〃 医師：産婦人科	(1)	〃 看護婦	(3)		
今治病院 医師：内科	(1)	〃 看護婦	(2)	〃 臨床検査技師	(1)	
〃 医師：小児科	(1)	山口病院 医師：内科	(1)	〃 臨床工学技士	(1)	
〃 医師：整形外科	(1)	〃 看護婦	(1)			
〃 医師：精神科	(1)	〃 事務員	(1)			

済生丸派遣のいきさつ

瀬戸内海巡回診療船連絡事務所

連絡委員長 岩本 一寿

一月十八日正午頃、岡山県保健福祉部西山部長より神戸へ救援の医療班を派遣して欲しい旨の電話が入った。兵庫県衛生部よりの要請に基づくものであった。話の中で、陸路は大渋滞しているようなので、海路を済生丸を使って出動することが可能かどうか打診された。済生丸は岡山、香川、愛媛、広島四県支部の病院が年間計画に従って運行しており、神戸へ回すということは、当然のことながら目的外使用であり、本来なら運営委員会を開き、関係官庁とも協議して決定すべきことではあるが、緊急事態である。細かいことは後回しにして一刻も早く決断しなければならな

いと思った。この時、済生丸は愛媛県の配船日であり、翌日、怒和島に行くべく松山港で待機中であつた。まず、高木船長に船舶電話で連絡、船の現状と神戸へ行くことについて打診。船長より、業務命令が下れば直ちに船を出します。ただし、高松港で燃料補給、宇野港で給水する時間はみてほしいとの返事で

あつた。ついで、愛媛県支部の藤原支部業務担当理事に連絡、事情を説明し、愛媛県内での配船計画を一時中止または繰り延べし、救援活動に供していただけるかどうか相談した。暫く後、藤原業担より、第一希望は明日の怒和島の診療が終わってからにして欲しいが、それでは遅いということなら今から使用してよいとの協力的返事をいただいた。西山部長の話では派遣日数は当面二、三日程度のことであつたので、この時点で済生丸の派遣は可能との感触を得た。しかし、私は二、三日程度の派遣では済まず一月中となることを想定し、次の配船県となる香川県済生会病院の三谷事務長に連絡し、愛媛県同様の説明を行い、美馬院長と相談していただくようお願いした。やゝあつて、愛媛県同様に協力的返事をいただいた。これで一月中は船の手配がついた。済生会本部の山本整備課長に連絡、これまでのいきさつを話して、本部としての了解と厚生省の了解を依頼した。

この間に岡山病院内では片岡院長を中心に診療班の派遣を協議。前日の夕方には、AMDA隊員（本部は岡山市内にある）が、岡山病院が用意した救急用の医療材料を積み込んで急行したことを一部の職員は知っていたので、病院内に「私達も救援活動に参加したい」という気運が高まり始めていた時期でもあり、第一班は直ぐに決まった。

こうして、西山部長に正式に済生丸での診療班の派遣を回答。折り返し、西山部長から兵庫県（後藤衛生部次長）より済生丸派遣について要請があつた由。なお、電話は全く通じないので、兵庫県への連絡は行政無線を使われないと無線電話番号を教えられた。

済生丸を新岡山港に回航するよう指示したのは十三時十五分である。船は神戸へ行くべく松山港を後にしたものの、神戸のどこの港に行くのか分からないままである。ご承知の通り、船舶は勝手にどこの港にでも入港は出来ない。必ず港湾行政当局の許可が必要である。新岡山港は問題なく許可されたが、神戸港については電話が全く通じないので困ってしまった。岡山県に依頼して、行政無線を使って交渉してもらったが、兵庫県からは何の返事もない。夕方になってやっと神戸港湾局海務課と電話がつながり、交渉の結果、神戸新港第三突堤Nバースに接岸するよう指示された。地図で調べるとフラワーロードの先で、神戸市役所へは徒歩約十分ぐらいのところであることが分かりホッとした。

一方、今回の済生丸派遣を本部に報告して間もなく、本部の久木田総務課長より、兵庫県が厚生省を通じて本部へ、済生丸に積み込めるだけの紙おむつ、粉ミルク、女性生理用品を援助物資として購入、輸送の依頼があったのでお願いすること。即座に了承したものの、後が大変であった。病院の資材課員を総動員して、全取引業者に可能な限りの数量を発注。総務課員は資材課長と相談して第一班の持参する食料、衣料品のほか諸雑品の用意、医療班に決まった医師、看護婦は医薬品、治療材料の用意と不足する品の購入指示等、それぞれが分担して走り回った。当初、現地の詳しい状況は分からず、骨折が多く、副木が足りないといった断片的な話しか聞かえてこなかったため、医薬品などの準備も相当の重症者までを想定したものとなってしまう。

緊急援助物資は、大人用紙おむつ約六千枚、子供用紙おむつ約一万枚、粉ミルク約千二百kg、ロングライフ牛乳六百ℓ、生理用品約七千三百個がこの日確保出来た最大量であった。十八時三十分、病院長以下が出席して簡単な出発式とミーティングを行い、暫く休憩の後、深夜二十三時三十分医療班を乗せた車並びに援助物資を積んだ業者のトラック、バン七台を連ねて岡山病院を出発。新岡山港に向かった。済生丸は二十三時四十五分に新岡山港に入港して、医療班の到着を待っていた。一行の車は午前零時頃に到着。取引業者の応

援を含めた約三十名で援助物資や医薬品などを船積み。午前一時に関係者、報道陣の見送る中を汽笛一声、闇の海を神戸新港へと向かった。

十九日朝七時三十五分、神戸新港入港。神戸市災害対策本部に援助物資を引き渡す。積み込む時は応援が大勢いたが、下ろす時は、少人数で大変だったと思う。次いで、第一班は、神戸市衛生局より指示された長田保健所管内の避難所への巡回に赴いた。当日は巡回には車がなく、徒歩で行われたが、これには疲れ切ったらしい。翌日からはボランティアの人が、車で応援してくれるようになり、助かったという。

岡山県では、済生会の第一班とほぼ時を同じくして他病院チームが編成され、十八日十六時に岡山県庁で出発式を行い、陸路を車で出発。有馬温泉に泊まり十九日より東灘区、中央区、兵庫区の三地区での診療に従事した。しかし、交通と宿泊に難渋したらしい。この点、済生丸は、船を使つての診療そのものが出来なかったという口惜しさはあるが、宿泊と交通の手段としての働きについては、寄与するところが大きかった。

以上のような経過で第一班は、岡山県の要請に基づき、岡山病院が出動した。第二班以降の派遣の要否について県当局と相談したが、県も兵庫県より引き続き派遣要請がないので、岡山県として正式な要請はできない。これで止めていただいてもよいし、済生会創立の精

神に基づいて引き続き行っていたとしてもよいと、いわば下駄をこちらに預けられた恰好となった。行くなら「手弁当で」ということである。取り敢えず、一月中は船を使えないことはない。第一班に現地の状況を聞くと、このまま一回限りで打ち切つてよい状況ではない。長期の援助が必要と思うという守都主任医長の意見や、長田保健所からは医療班に対し、長期に継続して欲しいと言われていることなどを重視して、片岡岡山病院長、広瀬副院長、江木総婦長と協議、済生会本部に報告して「済生会の事業」として継続するよう具申するが、ハッキリとしたことが決まるまでは、岡山で支援していこうということになった。従つて、第二班も岡山でチームを編成することに全員一致で決まった。第二班も複数の医師、看護婦等からの参加申し出があったが、広瀬副院長自ら行かれることを強く希望され、団長となつて赴かれることになった。

目黒理事よりは、済生会本部においても緊急課題として検討中で一月二十一日（土）に大阪で開かれる院長幹事会で相談して災害対策本部を設置したい。ご苦労だが長田地区へは岡山だけでなく済生丸関係の四県で協力して行つてほしいと言われた。そこで、第三班、第四班は、松山、西条、今治、香川、広島、呉の各病院に協力をお願いしないといけないと思つた。各病院長に医師、看護婦各一名の派遣をお願いした。愛媛県支部へは、直接病院長に依頼することの了承を得た。この時、

私はどういう立場で各病院長にお願いしたかというところ、本部より委嘱された済生丸事業運営の連絡委員長として、本部の意志を体してお願ひしたつもりであった。各病院長は直ぐ事情を理解され、承諾をいただいた。ただ今治病院は梅田院長がお休みで、後日連絡したところ、今治病院だけで単独チームを編成して行きたいとの申し出があった。二月以降も支援を継続するようならば、第五班としてお願いすることにし、第三班に急遽岡山病院より医師、看護婦各一名を派遣することに變更した。なお、連絡調整員は全班とも岡山病院の事務員または薬剤師、医療技術員の派遣を決定。三泊四日で交通は済生丸を使って新岡山港と神戸新港を往復（片道約六時間）。医療班の引き継ぎは岡山病院ですることにした。目黒理事より二十一日院長会の後、相談の結果、二十三日付で中津病院内に災害対策本部が設置され、翁理事長を本部長、菊田病院長を会長を副本部長、済生丸関係の病院長並びに近畿ブロックを中心とした病院長を幹事として、以降は本部事業として強力に推進することに決まった旨の連絡をいただいた。

これまでの経緯と申し送り事項を簡単に書いて本部に送り、やれやれこれで私の役割は終わったと思っていたら、「あなたも幹事になっているので、今後は災害対策本部の済生丸担当として働いて欲しい」と目黒理事より要請され、引き続き、新たな任務を帯びて、コーディネーター役を務めることとなった。

一月二十八日、災害対策本部済生丸担当幹事が岡山病院に集合、美馬香川県病院長（代表幹事）を議長に今後の運営、特に医療班の編成について話し合われた。この会議では次の事項が議題となった。

（一）二月一日以降の支援について

- ・二月末まで継続する（長田地区）。
- ・拠点となる診療所を決める（真野小学校が決まり、さらに二月五日よりは夢野台高校が加わり、二か所となった）。
- ・一チームの編成は、医師三名、看護婦三名、調整員一〜二名とする。
- 調整員は全チーム岡山病院が担当する（その後、山口病院が加わった）。
- 診療体制は、二十四時間対応とし、空白時間を作らない（真野小学校に医師一名が当直することになった）。
- ・一チームは三泊四日とし、当直者以外は済生丸に宿泊。チームの引き継ぎは十二時より拠点診療所（真野小学校）で行う。
- ・済生丸は神戸新港に停泊。医療班はJRを利用して交替する。済生丸と診療所、長田

区役所、兵庫駅等現地での交通は神戸市の用意するタクシーを利用。

（二）診療班の編成について

中四国、九州ブロックの病院にお願いする。災害対策本部案に北陸ブロックが入っているの、福井、高岡、富山病院を加える。（その後、北陸より長田地区までは交通に難があるので、主として九州チームに変更）

（三）その他

移動用の専用車、自転車等の必要性なども話し合われたが、道路事情が悪いこと、地理に詳しくないと無理だろう。市の用意するタクシーの方がよいと思うので、しばらく現在の方法を継続することとした。

こうした会議結果やその後の対策、活動状況、診療班の行動計画、診療日報などは逐一、東京の済生会本部と中津病院内の災害対策本部に報告し、済生丸連絡事務所は第二本部の役割を果たしてきた。ただ「本部」とだけいうとき、職員より、それは東京の本部ですか、大阪の本部ですかと確認されるときがあり、指示はハッキリしなければと反省している。

二月九日（木）、片岡岡山病院長、白神済生丸連絡事務所担当事務職員、高市秘書・広報担当事務職員（いずれも女性）、それに私の四名が、長田地区に赴いた。長田地区での診療班の活動状況、現場の被災状況と今後の見通しをこの目で確かめるのが、目的であった。

百聞は一見に如かずという諺があるが、ま

さにその通りで、レポートは両本部に送っているの、ここでは多くを語る必要はないであろう。ただ、この時、今後の救援見通しについては、予定通り二月末が引き時だなと感じた。事実、その後、神戸市当局からも二月末でこれまでの支援体制を一旦終わりとした旨の公式通知が私のところにもあった。しかしながら、被災地での医療問題がこれで解決した訳ではない。むしろ、抜本策はこれからである。済生会としても、阪神地区の医療問題にこれからの関わっていくことが出来るかどうか、今回の経験を基に、社会福祉法

人としての存立の意義を新たな角度で見直す天の時と捉えて、海外支援にも応用出来る緊急医療支援対策を作る必要はないか。済生会の連帯というときの本音と建前問題、病院の危機管理の限界等々、裏方を担当して、私は多くの勉強をさせていただいた。

今回の医療活動に協力された方々も恐らく同じ思いではないだろうか。こうした熱い思いをこれからの済生会の施策の中に生かすシステムの確立を望むと共に、長期間に亘り献身的にご支援いただいた関係者の方々に感謝申し上げ、レポートを終える。

済生丸による救援活動について

済生丸船長 高木 勇

○済生丸が大震災救援活動のため松山を出港するまでの経緯

一月十七日朝のテレビニュースで近畿地方に直下型大地震発生を知る。当初は、余り大きい被害が発生しているニュースではなかった。愛媛県松山港では震度三程度であり、船上でのゆれは感じなかった。津波の心配もないとのことである。当日、松山市沖に浮かぶ

怒和島を巡回診療のため八時四十五分出港。同島に九時五十分入港する。早速テレビニュースを見ると、神戸市周辺及び淡路島北淡町の震災状況が次々と放映されている。黒煙が空高く舞い上がり、次々と延焼する火災、阪神高速が根元部分から倒れ波状になっている。ビル倒壊等々、まるで外国の戦災状況を放映しているかのような錯覚を覚える。十時三十

分頃、もしかして済生丸による救援活動の要請が入っているかと思ひ、香川県の三谷船舶所長に電話連絡する。

現在のところ、本部・各県からも要請は入っていないが船員は待機するようにと指示があった。松山港に帰港後も震災ニュースに釘付けとなる。

一月十八日、前日に引き続き震災ニュースを見ながら船内に待機していた。

十一時三十分頃岡山の済生丸連絡事務所白神氏より第一報が入る。震災救援活動に済生丸が出動する旨の一報である。決定次第直ちに帰港出来るようにとのこと。船員全員予想はしていたが一瞬緊張する。

十三時十五分、愛媛県の巡回診療を急遽中止して神戸港に向かうことが決定したと連絡が入る。但し、現在のところ行動予定は未定、追って連絡すること。五分後には松山を出港して岡山に向け航行する。途中、取り敢えず長期の活動に備え、機関の燃料・飲料水・食料など航海に必要な海図等の手配をする。

二十時三十分、高松港入港直ちに給油、玉野で給水して岡山港には二十三時四十五分入港した。深夜にもかかわらず、岡山済生会病院より院長・局長他多くの担当者の皆さんが出迎えてくれた。直ちに、救援物資車七台分が大勢の人達の手送り作業で積込まれた。その間打ち合わせ、テレビ取材を一時十五分終了、診療班六名も乗船された。

○岡山と神戸間の航路選定

航路は最短コースを避け大型船の航路に決定する。

理由一、長期間神戸港に入港していない

(三十数年間)。

二、夜間航行である。

三、明石海峡通行方法が海上交通安全法が施行されて大きく変わっている。

四、冬期は各島付近にのり養殖用網が広範囲に設置している。

一月十九日午前一時、岡山出港一路神戸へ向け航行する。

五時三十分頃、順調に航行して神戸港和田岬沖に到着する。同付近には数十隻の船舶が仮泊している。港内が異状に暗く、ところどころで火災と思われる火が見える。上空は取材ヘリ数機が赤い点滅灯をつけて旋回している。何か不気味である。夜明けを待って入港することにした。六時四十五分、大阪方面の空が少し明るくなり、減速しながら新港第三突堤Nバースに七時三十五分に無事着岸した。

○神戸港での活動

緊急車両のサイレンが絶え間なく鳴り響き、済生丸の上空はヘリが低空で飛ぶ、付近のバースには他船が一隻も居ない。岸壁は地割れ、陥没して震災の恐ろしさを物語っている。八時十五分頃より救援物資の陸揚作業始める。この頃より港内の波が異状に高くなる。それまで元気で作業を手伝ってくれていた看護婦

さんが船酔いした様子である。船員と先生方ほか九名の男性で、二時間余りで作業を終了した。

診療班は休憩することなく、神戸市役所、長田保健所を経由して三カ所の巡回診療を全て徒歩で回ったそうである。昼食も取って居ないのではと思われる。二十時を過ぎて全員疲れて帰船された。一方済生丸では、九時頃より付近の人達が小さな鍋や薬缶(ケットル)を持って、気の毒そうに「水を頂きますか」といつて来た。「好きなだけ持つて帰って下さい」と申し上げたが、入れ物がなくて困っていますとのことである。僅かな水を大切そうに持ち帰って行った。

昭和四十九年と五十一年の香川県小豆島の集中豪雨による救援活動で、一〇日入りのポリタンクに水を入れて、住民に配ったことを思い出したが後の祭りである。女性・子供でも運べる大きさが島民に大変喜ばれた実績がある。

一月二十三日頃より、自衛隊の補給艦が入港して二十四時間態勢で住民に給水を始め、済生丸も二月に入り二回程補給艦に給水をお願いした。

この頃より、救援物資を積込んだ船が多くなり、殆ど毎日済生丸を、昼間はどこかに移動してくれるようにと港湾局の指示があった。港内中ノ島に移動した。この場所は波が入ってこなくてとても静かだったので、二月より長期に碇泊の予定のため、港湾局に交渉した

が無理とのことであった。一月は三航海半する。診療班の交替と給水、食料の購入等のためである。

二月一日より二月末までの完全碇泊のため、再度港湾局に交渉して第二突堤Jバースに碇泊した。移動はしなくてもよいが、相変わらずこのバースも電車、バス等の代替として小型高速船が全速でたえず航行するため、八時三十分頃より約十二時間波が高く、済生丸が前後左右に揺れ、診療班が帰船されても船酔いで食事が出来ない人が何人もいた。これ以外は暖房、風呂、食事と狭くても何とか睡眠もとれ、宿泊基地としての役目を果たせたのではないかと思っている。

○反省と今後の対策

- 一、今後も救援活動をする場合出来るだけ早く現地に到着。
- 二、現地ではどのような救援物資を望んでいるか把握する。
- 三、被災地の陸上交通が麻痺した場合海上輸送が有効な手段である。
- 四、済生丸船内で診療する場合は特に波静かな場所を確保する。
- 五、診療班より軽四自動車を積載出来ないか申し出があった。

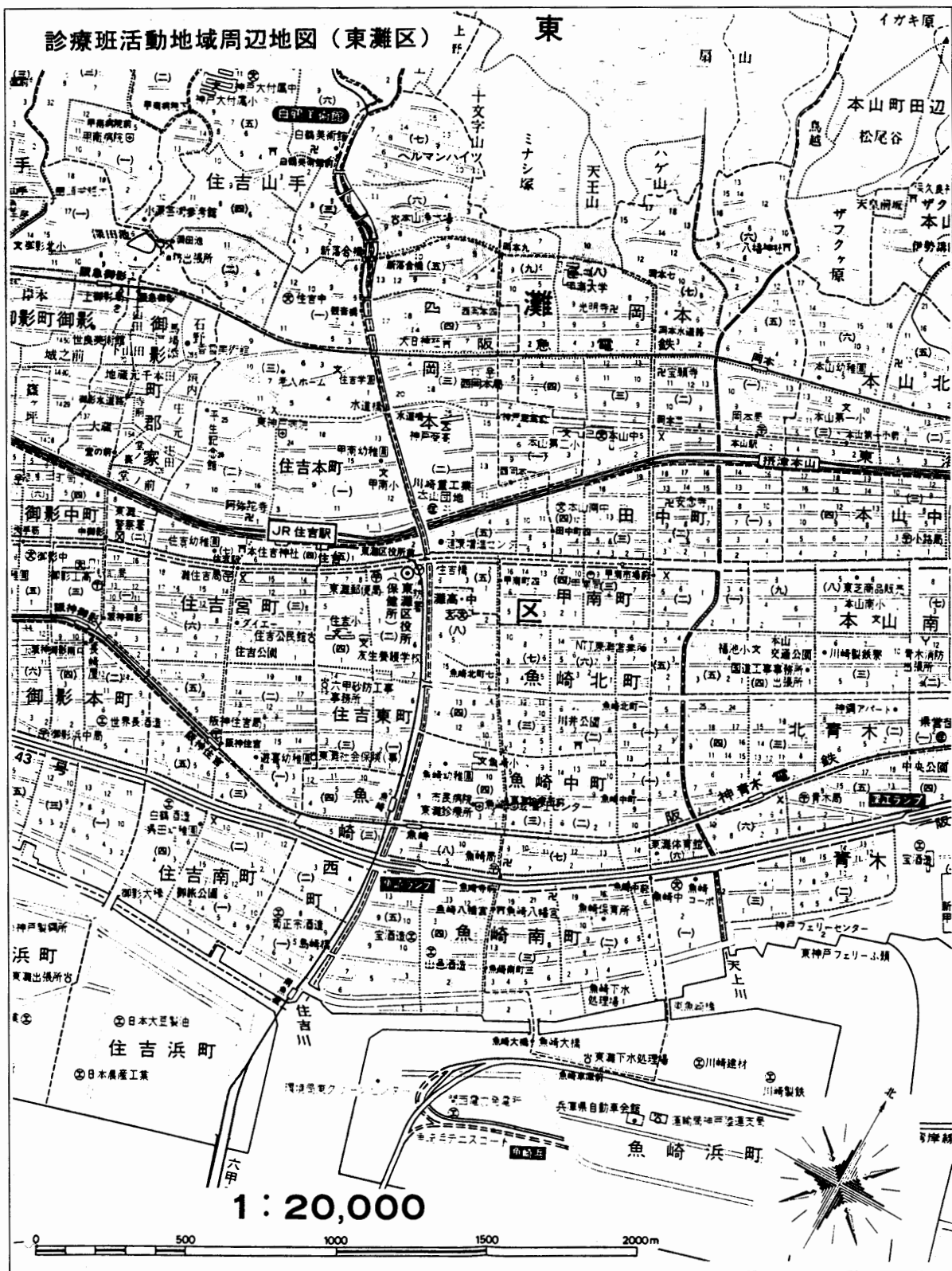
○最後に

今回の阪神大震災では、済生会職員が一丸となって献身的な救援活動が実施された。私達船員も少しはお手伝いが出来たのではないかと思います。

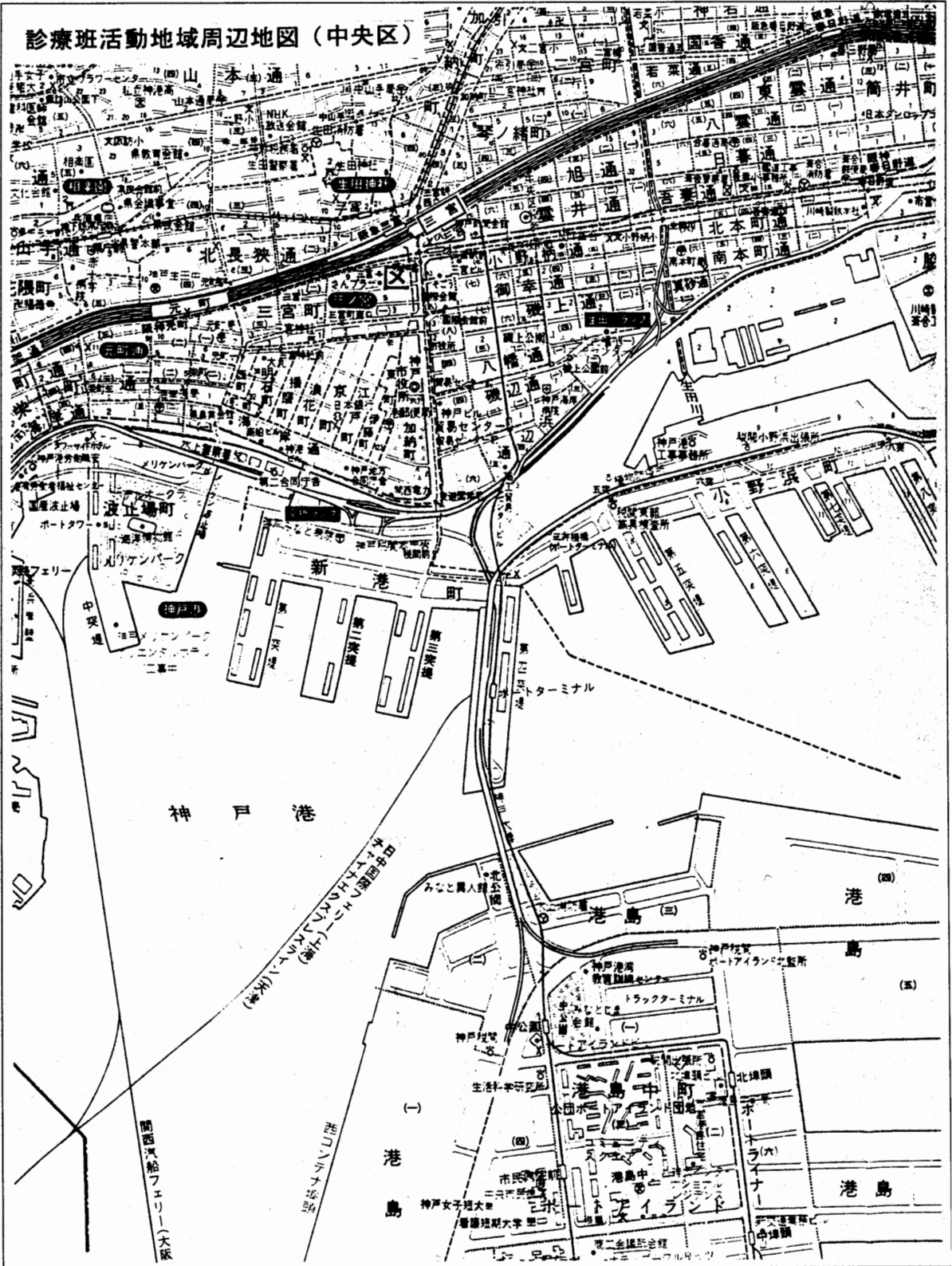
診 療 班 報 告

診療班活動地域周辺地図（東灘区）

東



診療班活動地域周辺地図（中央区）



[illegible]

●診療班報告

済生丸班

済生丸班は長田区の市立真野小学校、県立夢野台高校を中心に一月十九日～二月二十八日の間、十三班にわたり、延べ千九百七十二名の患者を診療した。

第一班

一、平成七年一月十九日十四時十五分

～一月二十一日十七時三十分

二、診療班合計 六人

施設名	職名	氏名
岡山	医師	守都 義明
		岡本 康久
		大塚あけみ
		江原 優子
		服部 豊
		秋山 敏夫

看護婦

放射線技師

事務員

三、取扱い患者数合計 二三八人

内 訳

巡回診療 二三八人

四、巡回場所 合計八カ所

長田旧庁舎跡
長田工業高校
県立文化体育館
神戸常盤女子短大
神戸常盤女子高校
長田小学校
梅ヶ香公園

五、活動概要

梅ヶ香公会堂

岡山・外科医長

岡本 康久

済生丸が神戸に入港したのは、地震発生から丸二日経った一月十九日の早朝であった。

前日厚生省と県からの要請を受け、急遽救療医療チームの派遣が決まったのだ。寒さで吐く息も凍りそうな深夜零時、少々高揚した気持ちで胸に、救援物資と医薬品と共に済生丸に乗り込んだ。しかし現地との連絡は全くとれておらず、どこへ行けばよいのか、何が必要なのか、とりあえず現地に到着してからという、まさに暗中模索の状態での出発であった。

右手にポートアイランドが見え始めると、テレビ、新聞などによる報道を超えた現地の衝撃が伝わってきた。自衛隊の輸送船が沖合

いに停泊し、空にはヘリコプターが数機爆音を轟かせている。岸壁の分厚いコンクリートが波打つように凹み、幾条にもすさまじい亀裂が走っている。神戸新港第三突堤から茶色の煉瓦造りの重厚な神戸税関、その向こうにひととき高い青いガラス張りの神戸市役所が朝日を浴びて輝いているのが見えた。その西側から黒い煙が上がり、消防車のサイレンと警鐘が鳴り響く。三宮で新たに火災が起きたらしい。

いよいよ活動開始。この大震災で交通網、通信網が混乱していることはわかっていても、対策本部のある神戸市役所に電話がなかなか通じないのには頭を抱えた。本部と連絡がとれないため、しびれをきらして、船に積んでいた自転車で、市役所に向かった。神戸の中心であるフラワーロードは、荷物を抱えて移動する市民、消防車、警察、自衛隊、工事用車両でごったがえしていた。市役所は本館は何とか無事で、対策本部がおかれているが、北館は六階が押しつぶされ、本館との渡り廊下が壊れて垂れ下がっている。市役所のロビーや通路は避難してきた人が大勢、毛布にくるまってじっと動かない。老人も若者も俯いたまま、行き交う人に全く興味を示さない。彼らの肉体的、精神的ショックを考えると心が痛む。その人混みをかき分けるようにして、ようやく六階の衛生局にたどりついた。業務に最低限必要な場所だけ確保して、倒れた本棚や散乱した書類はそのままの混乱した状態

で、対策活動は始まっていた。各地から医療チームが徐々に到着して派遣先が振り分けられ、われわれは、地震後の火災で被害が甚大であった長田区に行くことになった。

われわれは一刻も早くと焦るが、車の手配が思うように行かない。長田保健所に着いたのは午後一時を回っていた。

長田区の状況は予想以上に悲惨であった。街の大半は火事で焼け、焼け残った建物もほとんど全壊ないし半壊している。道路には自衛隊のトラック、消防車、救急車が溢れ、まさに戦場さながらである。

鉄筋の新しい建物だけがかろうじて倒壊を免れ、学校、体育館、倉庫などが市民の避難所になっている。長田区内でこうした避難所が七〇カ所あり、避難している人は四万四千、これは区民の三分の一に相当するという。

医療機関の被害も甚大で、西市民病院の被害は報道された通りであるが、他の病院、診療所も、入院患者の世話だけで精一杯で、とうてい新たに患者を受け入れる余裕がない。焼けて跡形もなくなった医院も多い。こうした状況の中で、保健所は保健婦を中心に懸命の組織作りを進めていた。われわれの到着した十九日の午後には、約五〇名の医療ボランティアが集まり、全く手探りの状態ながらも、まず避難所の巡回診療を開始した。

保健婦さんと共に、医薬品を買い物かごに詰め込み、信号機の作動しない凸凹になった道路を救急車や救援物資運搬車が行き交う

中、人混みをかき分け、倒れた家屋の瓦礫を踏み越えて、避難所に向かった。

長田工業高校の体育館には、約五百人が避難生活をしているという。食堂をかり、応急の診療所をこしらえる。テーブルに薬を取り出し、椅子を適当に並べただけで、診察台と待合いを隔てるものは何もない。約二〇人ほど集まったであろうか。頭や手に傷をした人が多いが、一度はどこかで消毒などの応急手当は受けているようだ。肋骨骨折の人もあるが、湿布を貼り、安静にしているように言うしかない。風邪ひきも多い。食堂での診察が終わると、寝たままで動けない人がいるというので、体育館の中へ入った。通路もないぐらいいぎつしりと布団が敷かれ、横たわっている人が多い。八十歳くらいのおばあちゃんが腰を打って動けないという。湿布と座薬を渡し、「落ちついたら病院でレントゲンを撮ってみようね」と言うしかできなかった。

四十歳の女性が足背を切って縫合してもらったというが、見ると足首まで赤く腫れている。抗生剤もなく、洗浄や消毒も不十分なまま縫合しなければならなかったのだろう。痛みが出てどうすることもできなく、じっと我慢していたという。抜糸すると多量の膿が排出され、二日後、巡回に行くと、腫れも痛みもひいていて安心した。

体育館の中を回っていると、血圧を計ってほしいとか、薬はないですかと、声がかかる。高血圧、糖尿病、精神疾患など慢性疾患を抱

えた人も、毎日服用している薬を持ち出すことさえできなかったようだ。

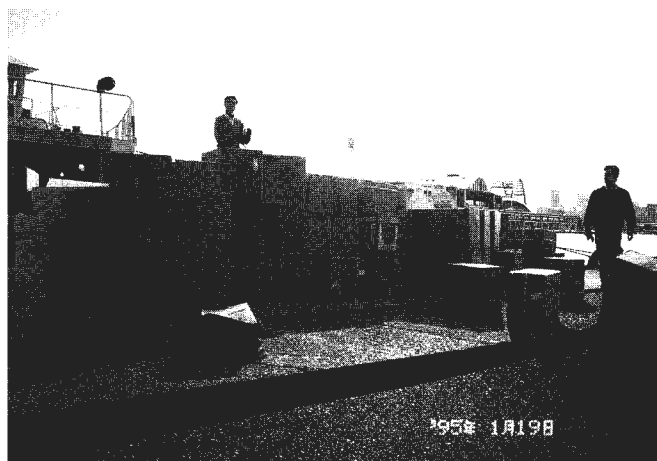
次の避難所は、山の手の中学校。急な坂道を三十分程登ってようやく到着すると、すでに他のチームが診療しているという。電話が通じないのだから仕方がないが、一同しやがみ込んでしばらく立ち上がれなかった。上陸前、船で朝食をとってから、ほとんど飲まず食わずで、トイレにも行っていない。

薄暗くなる中、重い腰を上げ、移動。三番目に訪れたのは、長田保健所から数百メートルしか離れていない倉庫であった。懐中電灯で照らしながら、傷を消毒する。入り口には戸がなく冷たい風が吹き込む。コンクリートの上に毛布を敷いただけでは、夜はさぞかし冷え込むだろう。すぐ近くの、保健所で診療していることさえ誰も知らない。被災地の住民にはなかなか情報が伝わらない。

保健所に戻ったときは、既に日が暮れていた。疲れた顔を懐中電灯と蠟燭の火が照らし出す。地震から二日半が過ぎ、自分達も被災者であるのに、地域の復興のために働いている保健婦さん達の疲労はピークにさしかかっている。

済生会から後続のチームの派遣が決まるまで、われわれ六人、早々に引き上げる訳には行かないと、心を引き締めた。

長い一日が終わり、済生丸まで帰ろうとすると、車の手配が難しいという。この寒さの中、電気も水もない保健所内に泊まらなければ



救援物資を済生丸からおろす

ばならない。寝袋の用意もない。食べ物は冷えた握り飯とペットボトルのお茶だけである。トイレは排泄物が流れず悪臭がこもっている。住民はそれ以上に苦しい生活を強いられているのだが、体を壊したのでは明日からの診療に差し支える。保健所の人もその点を心配して、忙しい中何とかやりくりして車を調達してくれた。救援に来てはいるはずが、余分な仕事を増やしてしまったが、ありがたかった。

診療二日目。今日は車が使え。七人乗りの車が九人がすし詰めで巡回に出かけた。風邪ひきが多くなり、中には三十九度を超える高熱、関節痛を訴える人もあり、インフルエ

ンザの流行が心配される。便秘で下剤を希望する人もいる。トイレが不潔なため我慢していたら、便秘して、おなかが張って困っているという。

午後から公園で青空診療所を開設する。外の寒さは肌身にこたえるが、それでも大勢の人が集まってくる。震えながらの診療である。

診療三日目。今日から保健所内に精神科医が常駐することになった。プライバシーのない集団生活によるストレスや将来に対する不安など、これからは精神的ケアが必要になる時期である。巡回診療の方は、必要な薬剤の準備、仮設診療所の開設などもスムーズに運ぶようになった。二度目の巡回になると顔見知りもでき、笑顔で迎えてくれる。

援助物資も徐々に増えてきて、避難している人の表情も幾分なごんできたようだ。ただお年寄りは、不自由な生活のため体調を崩し、救急車で遠方の病院に搬送される人が増えてきている。かくして済生会救援医療チーム第一班の任務を終了した。

われわれが岡山で考えていたのと現地での状況とは大きく違っていた。建物が倒れたり火事のためにけが人が多いだろうと、整形外科医と一般外科医が派遣されたのであるが、外科的処置を必要とする時期は過ぎていた。

二日過ぎても、骨折が放置されていたり、傷が化膿したりと、外科医も必要ではあるが、風邪など感染症対策や、慢性疾患の治療など、内科、小児科、公衆衛生の重要性が増してく

る。その次は精神的ストレスや不安に対するケアであろう。

また今回の救援参加は、私のボランティアに対する認識を新たにさせた。医療チームということで奢りはなかっただろうか。慣れないことで甘さがあつたといわざるを得ない。混乱した現地に行くだけでも大変なことではあるが、少なくとも自分達の食住、交通、連絡手段を持ち合わせていないと、現地の人に余分な仕事をおわせてしまうことを痛感した。済生丸は確かに、神戸までの運送手段、宿泊施設としては申し分ないが、現地での交通手段は全く考えていなかった。寝袋も持つて行かなかったわれわれは、済生丸でしか泊まることができなかった。

「天災は忘れた頃にやってくる」と言われるが、最近では、雲仙普賢岳の噴火、奥尻島を襲った地震、津波など、大きな自然災害が相次いでいる。先日地下鉄サリン事件が起き、病院の廊下が、救急患者で溢れるような状況がテレビに映し出されている。いつこのような惨事に遭遇するか予測できない。その時に医療従事者として何をすべきか、平素から心の準備も含めて、緊急時の対策を立てておく必要があると思われる。

最後に、今回救援チームに参加できたことは、私にとって貴重な経験であったが、留守を見てくれた同僚の協力がなければできなかったことで、心より感謝の意を表します。

岡山・総務課員

秋山 敏夫

①派遣直前の動き

一月十八日午後、被災地・神戸へ診療救護班と救護物資を送ることを決定。スタッフは医師二名、看護婦二名、放射線技師一名、事務一名の計六名。すぐに人員の決定と薬品、治療材料、救護物資（紙オムツ、粉ミルク、生理用品、牛乳）、必要物品（安全靴、ヘルメット、雨合羽、ミネラルウォーター等）の手配を行った。

十八時三十分

打合わせ開始

二十三時三十分

病院を出発

一時

新岡山港を出港

②到着までの交通事情

陸路が遮断されているため海路を選択。瀬戸内海巡回診療船・済生丸の離島診療の予定を変更して、新岡山港へ回航。一月十九日午前一時新岡山港を出港。

午前七時三十五分 神戸新港第三突堤Nバースに接岸。

救護物資等を神戸市衛生局に手渡し神戸市役所で説明を受け、車を手配していただき、十三時に配属先の長田保健所へ到着した。

③周辺被災地の状況

一月十九日に神戸新港へ入港する時点で異

様な雰囲気を感じた。岸壁は地割れ・陥没をおこし、コンテナは傾き、そう遠くない距離で黒煙が上がっていて、その光景が済生丸にあるTV画面で流れていた。

上空には取材ヘリの他、自衛隊のヘリコプターが旋回していた。また、消防、救急車やパトカー、緊急車輛のけたたましいサイレンの音が鳴り響いていた。

市役所・保健所への途中や巡回の際に目にした光景は、ビル、民家の崩壊現場や緊急車輛を含む車の大渋滞だった。自転車、バイクが際立って数多く見受けられた。高速道路の高架橋は崩れ、落下した横断歩道、崩壊家屋から煙がくすぶっていた。

神戸市役所の旧館では階と階の間がベシヤンコに潰れていた。また、新館との連絡通路が斜めに崩れ落ちていた。

長田保健所の一、二、七階には避難住民の方が押し寄せて狭いスペースを分け合っていた。

済生会第一班が到着した当初は保健所内は大地震の衝撃で室内の物品が乱雑に散らばっていた。

屋内消火栓ホースは扉から投げ出され、周辺に放り出されていた。

保健所前では物品配給所が設けられ、被災者の方でごった返していた。同所前の橋上、周辺には全国から応援に駆けつけた消防車が数十台と待機していた。

④現地での診療班の衣食住事情

済生丸が当診療班の宿泊拠点となり、食事の面では温かい朝・夕食をとることができた。昼食は巡回診療時は保健所で救護物資の一部を配給され、常設診療となつてからは常設場所のボランティアの方が差し入れをして下さった。

海上停留ということで少しの揺れはあったが、暖房も使用できたので、体を休めるのに十分過ぎるほどであった。

保健所は当初、電気の復旧はなく、トイレの水は流れてなく、衛生面が非常に悪かった。消毒液にペットボトルの水を少しかけて手洗いをした。



第1班新岡山港で物資積み込み

季節柄、寒くてカイロの使用、重ね着等をして寒さをしのいだ。他診療班の一部は保健所に宿泊したが、体を十分に休められなかったと思う。

⑤巡回診療場所、保健所のミーティング状況

朝のミーティングで当日の巡回診療場所の説明等が行われ、薬品、治療材料を集積場所より選別して買い物カゴに入れ、保健婦の方に案内されて巡回診療を行った。避難所に着くと臨時診療場所の設置を行い、呼びかけをして診療を行った。

調子が悪く来れない人がいるので、布団と布団の間を歩きながら訪ねて診療を行った。重度の外傷や骨折、縫合の必要のある人は既に少なくなっており、呼吸器疾患、慢性疾患、精神的ケアの必要な人の割合が非常に多くを占めた。

入院が必要な患者さんについては帯同の保健婦もしくは保健所に病院への搬送をお願いした。

処方の必要、要望が多かったのは、点眼薬、含嗽剤、血圧降下剤、湿布薬等であった。薬は量、種類が限られていたため、多くても二、三日分の処方しか出せなかった。含嗽剤はカップに原液を入れ薄めて使用するようお願いした。

避難所によっては電気が全然来なくて創傷処置、消毒の際、懐中電灯を患部に当てながら医師が処置したこともあった。

常設診療に移ってからは、真野小学校では一班が小学校で診察、もう一班が周辺の避難所を巡回した。十七時から当直を置き、二十四時間診療を行った。また、医務室の中には救援物資のミルクや紙オムツ等を搬入しており、取りに来られる方に手渡した。

夢野台高校では時間をみて、協力に来てくださっていた神戸市立市民病院の看護婦さんと一緒に周辺を巡回して調子の悪い方の発見や対話をして、被災者の方の気分が少しでも和むように心がけた。また、保健所を通して依頼のあった高校周辺の患者さんの家を訪問して診療を行った。

常設診療になってからはボランティアのタクシース会社が一泊ずつ計二台配車して下さり、関係官庁への移動や訪問看護に大変役立った。

ミーティングは当初、朝夕の二回開催（途中より月水金曜の夕方四時からのみ）され、巡回場所の分担指示、巡回報告（受診者人数、気になる患者さんの報告等）、医療施設の診療再開状況等の報告等が話し合われた。

⑥引き継ぎのエピソード、問題点

一月二十九日より常設診療となった真野小学校は、兵庫県医療チーム、巡回班を経て引き継ぎとなった。当直があり二十四時間診療をしてきたので、着いたその日に医師に当直に入ってもらった。

真野小における中四国・九州済生会病院チームの診療は二月二十八日をもって終了。三月一日より京都市立市民病院が午後二時から

午後三時三十分までの巡回診療へと移行した。二月五日より常設診療となった夢野台高校は、第一生命保険相互会社医務部より引き継ぎを受けた。前班は、一月二十二日から二月五日の間、二十四時間体制で診療を行っていた。

患者数は減少に向かっていること、呼吸器疾患が大多数を占めているとの報告や診療状況等の説明があった。夢野台高校は少し高台にあるということもあり、かなり寒かった。

夢野台高における中四国・九州済生会病院チームの診療は二月二十八日をもって終了。三月一日より京都市立市民病院が午前十時から午前十一時三十分までの巡回診療へと移行した。

二月中旬になると周辺の医療施設や開業医が再開したので、無料診療と有料診療の問題が取り上げられ保健所等が対応に苦慮していた。

再開が始まって入院がなかなかできないことや夜間に対応できない所も多く、軽い症状にせよ二十四時間対応できる医療救護班の結果たす役割は大きかったと思われる。

⑦反省事項、教訓

突然のしかもスケールの大きな大震災で情報連絡網・交通網が大打撃を受けた。正確な情報を待つて動くのでは既に意味がなく、当院では迅速に対応できたと思われる。

骨折等重度な外傷者を予測して、外科・整形外科医師に放射線技師をスタッフに加えた。

詳細なことを掴めていなかったため、患者さんを済生丸に搬送して診療（済生丸にX線等の医療設備あり）しようとも考えていた。

待っている駄目、取り敢えず行動。早く正確に情報収集を行い、状況を把握して後続班への道筋を確立すること。

医師は内科系・外科系各一人が同班にいるのが理想で、重傷者以外は科に関係なく診療する（せざるを得ない）。

被害規模にもよるが、短期ではなく長期滞在が望ましい。また、一班の滞在期間は業務の都合はあるが、診療日数が四、五日が望ましいと思う。

関係官庁の窓口、担当者を早めに特定し、正確な情報交換を行い、混乱を極力防ぐようにする。

⑧ 持参してよかったもの、必要なもの、感想等

携帯電話、懐中電灯、カイロ（季節柄）、自動血圧計、薬袋、診療予定表（別添資料参照）、カメラ（必要最低限の診療記録を残すため）等。

トイレは衛生面で酷かったので、済生丸で排泄をすませ、水分の摂取、食事を抑えるよう注意した。

常設診療に移ってからボランティアのタクシー配車があり、大変助かった。

診療記録を残すためのビデオ撮影（阪神大震災・済生会救援活動の記録）は製作会社の人と被災者とのトラブルがないか気をもんだ

が何とかスムーズに行えた。

現場へ行ってみてギャップの大きさを知った。保健所や市役所等の人達は自分も被災者なのに何日も泊り込みで働いていた（保健婦さんも）。

梅ヶ香公会堂で巡回診療中に余震が起り、少し恐怖を感じた。

確かに配分は難しいとは思うが、救援物資の偏りがかなり目についた。

後記

第二班

一、平成七年一月二十三日九時〇〇分

～一月二十四日十七時〇〇分

二、診療班合計 七人

施設名	職名	氏名
岡山	医師	広瀬 周平
		高田 眞治
		井上 英雄
		谷口知恵子
		市原 悦子
		小川 洋美
	事務員	高中 和明

看護婦

三、取扱い患者数合計 一八〇人

内訳

巡回診療 一八〇人

四、巡回場所 合計五カ所
総合文化体育館

四月二十五日、長田区の全ての救護所診療が終了（避難所は五二カ所）。

長田区内の医療機関の約八割が開業。医療体制も復旧の兆しを見せ始めている。

ボランティアの尊さ、重要性を再確認した。被災された方の今後の生活が非常に気がかりである。

今後は精神的ケアの必要度が増してくるであろう。

最後になりましたが、亡くなられた方のご冥福を心からお祈りします。

長田小学校
宮川小学校
長田神社
長田高校

五、活動概要

岡山・専任教員

市原 悦子

一月十七日（火）、あの阪神大震災が起り、当病院から医療班が直ちに発足され、一班が一月十八日（水）に出発した。私は二班として参加することになり、そこでまず、学生達に義援金や救援物資を呼びかけ、被災地



長田区内 (1.19)

に電池や使い捨てカイロ、女性生理用品等が不足していることをニュースで聞いていたので、それらを募った。するとどうでしょう、学生達が自分のなけなしのこづかいの中から義援金箱へお金を入れたり、スパーで物資を買ってきて用意していた箱ではあつという間に入らなくなる程、次から次へと持ってきてくれた。二十二箱にもなった。「あー、この子達は、人の痛みの分かるいい看護婦になる」と確信した。

このようにして集めた救援物資を済生丸に積み、第二班として、外科の広瀬副院長、小

児科の井上先生、内科の高田先生、事務の高中さん、谷口婦長、小川看護婦との七人のメンバーで一月二十二日（日）新岡山港から神戸に向かって出発した。

神戸新港第三突堤に着いたのは、夜七時半頃だった。翌朝のために皆で懐中電灯を持って下見に出かけた。港の岸壁は、至る所「溝かな」と思うような亀裂が走り、一メートルぐらいの陥没も見られた。道路には「なんでこんなところに砂場が」と思う程、液状化現象のために砂があふれていた。高速道路の橋桁は中身の鉄骨が見え、ぐにやりと曲がっていた。

翌日、リュックに非常食やカイロを詰め、トイレに困ると聞いていたので、大好きなコーヒーも飲まず、中央区の神戸市役所に行った。高い立派なビルで、一階には床に新聞や段ボールを敷き、その上に布団を敷いてたくさん避難者が所狭しと寝ていた。その中の一人のおじさんに、「あんたらあも、避難してきたんか」と言われ、『あれっ、私達ってそんな風にみえるのかな』と思わず自分の姿を見直した。「いえ、救援に来ました」と言う、「そこを真っ直ぐ行って階段上がって、二階からエレベーター乗って!」と、教えてくれた。

ここでは簡単な打ち合わせだけで、車で長田保健所へ向かった。途中、テレビで見ていた以上に悲惨な光景を目の当たりにした。どの建物もボロボロで立つてはいても傾いてい

たり、ひび割れていたり、窓ガラスが全部なかったり、木造はベシャンコで焼けて黒こげになっていた。広い道路の中央がボコッと陥没していて、大きな川があるのかと見間違え程だった。このような状況の中で、一つだけ不思議な現象は、街路樹だけは一本も倒れていなかったことだ。災害の中で自然の力強さを垣間見たような気がした。

長田保健所で指示を受け、一千〜二千人が避難している県立体育館、長田小学校、長田神社、長田高校等で、診療活動をした。体育館の隅や廊下、保健室などに臨時の診療をする場所をつくり、そこで内科、外科、小児科に医師達は分かれ、私達ナースは外科の介助に付いたり、血圧や体温測定、薬の服用の説明・指導等を行った。生き埋めになり、がれきの中からひっぱり出されたために全身打撲と擦過傷のおばあさんがおられ、涙が出そうになった。被災直後で汚い状態でのナートのためにほとんどの傷が化膿して腫れ上がっていたり、風邪のため発熱している人、咳嗽が止まらない人、きよ痰困難の人、冷たいおにぎりを食べ続けて、久しぶりに温かい豚汁を食べて下痢をしたおじいさん、トイレが気兼ねで便秘している人、夜眠っている時にまた地震が起こるのではと心配して不眠の人、慢性疾患で今まで治療を続けてきた病院の倒壊により診療が受けられず薬を求めて来た人等、とても気の毒な状態だった。臨時診療所へ歩いて来れない人には、ひと教室ずつ具合の悪

い人はいないか尋ねて回り、そこで診察をした。神戸では岡山のレスキュー隊や自衛隊、消防隊が数多く出勤し、活動されていた。県南から県北まで数多くの岡山の車を見つけ、とても頼もしく思った。

私達を車で送り迎えして下さった姫路のボランティアの方々の話によると、「大きな道路沿いの高いビルの傾斜が日に日に角度を増

第三班

一、平成七年一月二十六日九時〇〇分

〜一月二十七日十七時〇〇分

二、診療班合計 七人

施設名 職名 氏名

松山 医師 黒田 宗明

看護婦 新藤比登美

西条 医師 山中 俊作

看護婦 丸尾 史恵

岡山 医師 中田 憲一

看護婦 伊庭 優子

事務員 池田 憲一

三、取扱い患者数合計 八八人

内 訳

巡回診療 八八人

四、巡回場所 合計四カ所

大橋中学校

長楽老人いこいの家

ゆうゆうランド

長田神社

している、倒れるのも時間の問題だ」と言われており、そんな危険な地域でのボランティア活動に対して頭の下がる思いがした。

今回の医療救援活動に参加して、テレビでは伝わりにくい生の姿を見て、本当に一日でも早く避難している皆さんの住む所が決まり、安心して生活ができるよう、神戸の街が一刻でも早く復興しますようお願いして止みません。

五、活動概要

岡山・システム計画室副係長

池田 憲一

私が救援医療班として参加したのは、一月二十五日から四日間だった。その時はまだ、

陸上の交通機関では神戸に入ることのできない状態でしたので、済生丸で海から上陸した。神戸の港に到着したのは夜遅く、真暗な神戸の街の被害状況がどれぐらいなのか想像が付きません。そこで、一緒に行った人達と、次の朝行く予定の神戸市役所まで行って

みようということになり、夜の港に降り立った。港の回りはそれほどでもなかったが、街中へ歩みを進めるにつれ、道路はひび割れ、歩道に敷き詰められた石畳は波うっていて、と

ても歩ける状態ではない。やっとの思いで神戸市役所までたどり着いたものの、そこで目にした物は、五階部分が押しつぶされて、今にも崩れ落ちそうな市役所の旧舎だった。言葉にならない程のショックを受け、闇の中のその姿は、今でも思い出すと背筋に寒けが走るほどだ。そのショックは、次の朝になるとより一層大きなものとなり私を襲った。昨夜、暗がりの中では目にするのでできなかった情景が、日の光によってその姿を現したとき、「これがあの神戸か」と悲惨な町並みに茫然となった。

神戸市役所で車の用意をしてもらい、一番被害の大きかった長田区の保健所へと向かった。その車中から目にするものといったら、倒壊した家屋やビルに、サイレンを鳴らして走る消防車や救急車、救援物資を乗せて走る大型トラックといったもので、以前観光で訪れたときの面影は何処にもなかった。

長田区保健所のフロアーは、避難した人達で身の置場がないような状態だった。その中をぬうように五階にある集会所に上がって行くと、そこにはAMDAの診療班が診療を行っており、順番を待つ人達であふれかえっていた。八時よりミーティングが始まり、保健所の責任者から、診療場所の割り振り等の報告がされた。私たちより前に行った班には、応援の診療班も少ないため常駐して診療をしてほしいという希望があったそうだが、私たちが行く前に、各県単位の医療チームが二

十八団体到着し、大きな避難所に常駐したという事で、われわれ医療チームは小規模な避難所を巡回することになった。

初日、私たちが巡回した場所は、大橋中学校・長楽老人憩いの家・ゆうゆうランドの三カ所だった。

大橋中学校では体育館が避難所となっており、収容人数は約三百人で暖房設備はなく、避難している人達にとつては大変寒い所ではないかと思つた。また、避難している人達の多くは老人で、避難する際に何も持ち出せずに避難してきた人が多く、疲労と不安から衰弱した人が多く見られたように思えた。

ここでは九時〜十一時三十分まで診療を行い、午後から常駐する長崎県の医療チームに、問題点や継続して治療を行う患者の引き継ぎを行った。

その後、一度長田保健所にもどり、午後からの巡回に必要な薬品の調達、避難所で不足している物の報告を行った。保健所内の昼食をとるための休憩室には、各県からの巡回医療チームが集まつており、耳にする話と云えば避難所の悲惨な状態と、その周辺の住宅の崩壊状況だった。

午後からの巡回場所は、二カ所共三十人程度の小規模な避難所で、あまり重症の患者もなく特に診療を行うことはなかった。しかし、精神状態はとも不安定で、避難生活での苦しいこと、困っていることなどを聞いてあげること、精神状態を少しでも安定させるこ

とができるよう努めた。

午後の巡回診療も終え、長田保健所での夜のミーティングが始まるとすぐ、巡回医療チームの中から「常駐の医療チームが増え巡回チームはもう必要なのではないか」という意見が飛び出した。保健所の方も困惑した顔で、「避難所の大小にかかわらず、まだ常駐の医療チームのない避難所がある限りは、巡回を行つてほしい」と回答する一幕があつた。私も、保健所が巡回チームは必要ないなんて言えるはずがないと思ひ、憤りを感じ、応援に來ているはずなのに、医療の押し売りの行為に對し恥ずかしい気がした。

地震発生からそう幾日も経っていない状況にあつては、保健所の対応の不備や、情報の収集・整理の混乱などは仕方のないことで、それについて私たちが批判すべきではないと思つた。次の日の朝のミーティングで再度話があり、本日の巡回終了後改めて検討するということになった。私たちは、その日の巡回終了後、岡山への帰路についたため夜のミーティングには参加できなかったが、別件で保健所に電話した際どうなつたか確認したところ、いい解決策は出ていないということだった。

二日目の巡回は、前日のゆうゆうランドと長田神社でした。前日同様に診療というより精神的ケアに重点を置き、できるだけ多くの人に声を掛けることに力を注いだ。また若い人達は、被災した住居の整理に出ているので、避難所周辺を歩いて回るといったことも行つ

た。

この二日間で、被災地で目の当たりにしたことは、今までに体験したことのないものだった。「もし私たちが住む地域にこの阪神大震災と同じような地震が起きたならばいったいどうなるだろう。たぶん私たちが目にしてる状況と同じことが起こりうることは間違いない」「各自がきちんと準備しているか」「地域の対応は充分か」などいろいろと頭をよぎり不安な気持ちで神戸を後にした。

今、私たちの地域・町・市がこの阪神大震災を災害として終わらせてしまうのではなく、安全への契機として生かすよう努力しなければならぬのではないかと強く思つた。

松山・外科医師

黒田 宗明

平成七年一月二十五日(木)、済生会松山病院からの救援派遣メンバーとして、黒田医師、新藤看護婦は、先ず、岡山済生会総合病院へ集合した。

派遣中の診療業務は、急きよ、山本副院長高橋医長や、外来勤務の看護婦達に分担してもらふこととなり、ある意味でしわ寄せが行つた形となつたが、快く、送り出していただいた訳である。

岡山で、西条病院の山中医師(内科)、丸



長田神社における巡回診療

尾看護婦、岡山病院の中田医師（内科）、伊庭看護婦と合流し、第二班からの引き継ぎを受けた後、新岡山港から、済生丸に乗り込み、海路より神戸へと向かうこととなった。約六時間程度の船旅で、神戸新港へと接岸、上陸した。

神戸新港岸壁は、地震により大きく亀裂が入り、一部は崩壊していた。高速道路の高架は大きく歪み、救急車輛が、街灯の切れた暗い夜道を、次々に走り回っていた。また、周囲のビル群は、様々な方向へと傾いて、どこからか、ガスのにおいが漂っていた。

われわれは、済生丸をベースキャンプとして、朝・夕食と、宿泊場所を確保できた。三、四日程度の短期派遣であれば、充分に威力を発揮すると思われる。しかし、長期間にわたって滞在し、診療活動するには、停泊しているとはいえ、船独特の揺れがあつて、意外に体力を奪われると思われる。やはり、陸上に拠点を設営するべきであろう。

さて、翌日早朝よりわれわれは、長田区内での巡回診療活動を開始した。長田保健所において、当日の巡回場所の割当てを確認する。震災発生後一週間を過ぎたこの頃には、全国各地からの救援チームが到着しており、一日かけて巡回する場所が、たった二カ所だけという状態になっていた。

もう既に、医療チームは、数的には充足されていたと思われる。

ミーティングは、区の保健婦によつて立てられた巡回プランを基に行われたが、情報が錯綜している中で、正確で有効な策を立案するのは非常に困難で、度々、個々のチームとトラブルが起きているようであった（巡回場所の重複や、連絡確認の不徹底等）。悪い表現であるが、功名争いにも似た幾つかの医療チームの熱心さに、被災者でもある保健所の職員達が、困惑させられているのは、非常に気の毒であつた。

第二班からの引き継ぎ情報により、風邪薬の他、高血圧や糖尿病等の慢性疾患に対する薬品を調達した。また、消毒薬や抗生剤、湿

布や目薬も携帯することにした。これらの薬剤は、保健所内にかんりのものが供出されており、ボランティアの薬剤師が常駐して対応していた。

避難所は、規模の大きい所ほど、こちらから積極的に動きまわらなければならなかった。被災者達は、精神的ショックと疲労から、自ら進んで症状を訴えるということはなく、会話するのも億劫という雰囲気であつた。医療チーム側から話しかけ、処置を行えば、徐々に体調について相談する人が現われ始めるようだ。

また、自分の診療料にこだわらず、どんな診療することも必要と思われる。

震災直後は、外傷が大多数であつたと思われるが、一週間も経過すると、避難所にいるのは、慢性疾患を持った老人ばかりであつた。医療チームの編成は、派遣時期を考慮して行われるべきだと思われる。また、今日のように、交通も、情報も寸断されるような環境では、自前の機動力を持つ必要を痛感した。携帯電話や無線を備えた診療車等があれば、災害直後からある程度の期間にわたつて、状況の変化に柔軟に対応しつつ、もちこたえられるのではないだろうか。

想像を絶する災害から、学ぶべき教訓はまだ多いが、それを生かす努力を、これからもずっと続けて行かなければならない。

第四班

一、平成七年一月二十九日二十時四十分

～二月一日十三時〇〇分

二、診療班合計 七人

施設名	職名	氏名
広島	医師	野宗 義博
	看護婦	逢坂由紀子
呉	医師	伊藤 公訓
	看護婦	中島美佐緒
香川	医師	清谷 豊
	看護婦	石川 悦子
岡山	事務員	花房 操

三、取扱い患者数合計 一三八人

内 訳

定点での診療 真野小 一一五人
巡回診療 八八人

四、巡回場所 合計六カ所

真野東集会所
真野市住集会所
東尻池いこいの家
東尻池公園
真野保育所

五、活動概要

岡山・資材課長

花房 操

済生会病院の中四国ブロック合同チームとして、平成七年一月二十九日（日）新岡山港を十四時二十分、広島、呉、香川の各病院の医師、看護婦と調整員として、岡山より私が第四班のメンバーとして参加した。

第一～三班までの救援活動の申し送りの内容は、巡回診療（避難所を巡回）が主体である。現在被災後一～二週間を経過して、多少落ちついて来たため、地域の医師会、行政、他の救援活動チームの希望として、救援活動の流れが巡回診療から常設診療チームに期待が寄せられる状況となつて来た。出発前日、長田保健所へ拠点となる場所の依頼をしていたところ出発当日、真野小学校を常設診療チームとして引き継いでほしいと連絡がある。

第三班で参加した中田先生よりメンバー全員で申し送りを受けた。その中でやはり、常設診療チームが活動に適していると報告があった。参加メンバーは済生会という連帯はあるが初対面で、お互いに話しやすいように、コーディネーターとして船内では自己紹介や

雑談をした。船が神戸に着くころには、和気あいあいのチームができた。一方船内では、連絡をとりながら、本日（一月二十九日）より真野小学校医務室に済生会チームが常設することが決定した。

条件は前兵庫県医療チームと同じ診療時間は二十四時間体制。九時～十八時（当直十八時～九時）である。後に、九時～十七時（当直十七時～九時）となる。早速、今日の当直を決めなければ……呉の伊藤先生が申し出て決定。神戸第三突堤に着いたのは午後七時三十分、そこに京都のMKタクシーが待機、呉の伊藤医師、中島看護婦、私の三人で神戸衛生局、長田保健所に行き、あいさつをすませ、担当の安田保健婦（係長）、吉本保健婦（主査）さんより申し送り引き継ぎを受けた。

保健所の薬局より必要薬品を準備して真野小学校へ急ぐ。学校では、中島校長先生、藤井教頭先生、徳島養護教諭の先生、避難所自治会の責任者の方に大変喜んで迎えてもらう（今日、医療チームが引き上げたので避難所に医師不在となり次の医療チームがいつ来てくれるか住民が不安で心配していたからである）。明日の準備と必需品の整理をして、今日は伊藤先生一人を残して済生丸に引き上げた。

われわれの第四班が救援活動の時、長田区は電気は来ていたが水道は出ない。開業医の復旧は百五十ある内五十医院くらいが診療している状況である。診療時間は、午前十時

十三時と非常に短時間である。しかし状況からして、壊れた医院、診療所での診療は相当の努力である。

現在救援医療チームの活動は、常設は二十八チーム（巡回チーム八）である。救援活動の二日目は、真野小学校を拠点に六カ所巡回診療をした（真野保育所、三ツ星ベルト体育館、東尻池老人いこいの家、東尻池公園、真野東集会所、真野市営住宅集会所）。

真野小学校近くの避難所に、神戸協同病院の訪問看護をしている住民が避難していた。

済生会の救援活動と神戸協同病院の救援活動は救援活動の目的が違う（無料診療等に限度がでている）。この問題も保健所の指示にて解決したが、地元の医療機関がいかに大切であるか考える必要がある。

定刻の報告に保健所に行くと、常設診療所の追加依頼があり、現在常設診療をしている夢野台高校体育館内診療所（第一生命保険相互会社医務部、阪神大震災「救急医療ボランティアチーム」が二月五日をもって引き上げる予定である。ついては、済生会チームでお願いできないかという依頼内容で条件は、午前九時～午後五時までの昼間の診療でよい（現在は二十四時間当直体制）とのことだった。岡山病院へ連絡して、二カ所の診療所が救援可能か、回答を待つことにした。

第三日目、診療の方は医師、看護婦さんをお願いし、夢野台高校の下見に走る。夢野台高校と体育館内診療所とは少し離れている。

体育館は大変寒い。避難所の体育館には約百三十人、グラウンドのテントに五十人避難。また第一生命保険相互会社医務部の先生と神戸市立西市民病院の看護婦さんよりの受診数、往診等の情報を岡山病院へ連絡した。午後、中四国・九州済生会チームの医療班で救援すると承諾があり、長田保健所へ二月五日より済生会チームが引き受けるので、今後の引き

第五班

一、平成七年二月一日十三時〇〇分

～二月四日十二時〇〇分

二、診療班合計 十四人

施設名	職名	氏名
今治	医師	小川 裕道
		藤本 清一
		内田 健介
		中川 学
		萬 忠雄
		徳永かちゑ
		阿部喜代子
		高橋 早苗
		松田 佳美
		杉 文子
		八木 政義
		矢野 栄二
		日高 績
		真鍋 亨

内 訳

定点での診療（真野小学校） 一〇二人

巡回診療 一〇八人

四、巡回場所 合計十一カ所

三ツ星ベルト体育館
真野市住集会所
真野東集会所
東尻池公園
東尻池老人いこいの家
駒栄保育所
近田幼稚園
真陽地域福祉センター
丸山小学校
雲雀丘小学校
創価学会長田文化会館

五、活動概要

三、取扱い患者数合計 二二〇人

継ぎ、申し送りの計画を依頼して、拠点の真野小に帰った。

診療班も、今日で救援活動が終わる。明朝は神戸港を出航するという現実に戻った時、長かった三泊四日も何もできないまま、あっという間に過ぎてしまったと反省している。一日も早い復帰をお祈りいたします。

今治・総務課長

矢野 栄二

大震災から一週間が明けた平成七年一月二十四日、済生丸第五次医療看護班を今治病院が受け持つこととなり、スタッフの選出・準備が始まった。活動期間は二月一日から四日までの四日間である。スタッフは、内科、小児科系の患者が多いということ、精神疾患患者のコントロールが望まれていることから、内科、小児科、精神科、整形外科の四名の医師に、看護婦四名、薬剤師一名、緊急車両の関係で事務員三名の十二名が派遣されることに決まる。また、山口病院からは医師一名、看護婦一名の応援もいただくことになり、総勢十四名の診療班となった。

二月一日、第四班と現地引継ぎがあるため、班長の医師一名は早朝JR便にて先陣を切って出発した。午前九時、残りスタッフも岡山病院での引継ぎ、山口病院との合流のため、院長はじめ職員の厚い見送りを受け、マイクロボス、ワゴン車計二台の車両に乗り合わせ、身の引き締まる思いで出発した。

診療の拠点は神戸市長田区真野小学校である。先発の医師は午後一時に引継ぎを終えた後、一人で診療を開始、後続のスタッフの到着を待つ。一方後続組は、午後零時過ぎ岡山

病院で山口病院と合流、第四班からの引継ぎを受ける。救護活動は真野小学校で常駐診療を中心に、周辺六カ所の避難所の巡回診療、保健所指示の巡回診療である。被災者の状態は安定してきており、患者さんのほとんどは感冒である。地元医療機関も復活しつつあるため、摩擦が生じないよう注意すること。ボランティアでタクシーが協力してくれること等々である。

現地の様子が多少分かってきたところで、午後一時半過ぎ、陸上ルート（車両）と海上ルート（済生丸）に分かれ岡山を立つ。済生丸の神戸までの所要時間は約六時間、山口病院の二名が乗り込むことになる。陸上交通がマヒ状態にあつて確実なルートである。片や車両は通行制限、渋滞を心配しながらの出発であつた。しかし、緊急医療車の横幕、回転灯のお蔭か、神戸市内の渋滞を除けば予定走行であつた。市内に入るほど被害の程度は激しく、テレビで見た画像が目前に広がる。家屋、ビル、道路があらゆるところで倒壊、焼失、想像を絶した光景であつた。

車両組は午後五時、真野小学校に到着、先発の医師と合流、午後の診療報告を受けた後、ミーティング、各々の役割、スケジュールを確認する。

臨時診療所は真野小学校の医務室に置かれていたが、学校舎は老朽建物で、設備も十分とは言いがたく、消毒液のおいが却って非衛生的な感じを漂わし、避難者には気の毒なところであつた。感冒が蔓延しても不思議ではないところでスタッフの奮起を促した。

明日からの行動が確認できたところで、当直医を除き、残りスタッフは宿泊のため、済生丸へ向かう。停泊場所は神戸新港第二突堤Jパスで、約七キロの道のりであるが、JR神戸・三宮で交通渋滞に会い、一時間余りを要して午後八時済生丸へたどり着いた。

二日目の基本的な行動・日課は、午前八時済生丸を出発、午前八時半から真野小学校での診療並びに周辺避難所の巡回診療、これと別に午前九時の長田保健所でのミーティングで指示のあつた巡回診療、そして午後四時には保健所の合同ミーティング、午後六時過ぎには夜間診療を当直医に任せて済生丸へ帰るといった流れである。

被災から二週間余りもたてば事態も安定してくるのか、真野小学校の避難者も二千人から百五十人程度に減っており、患者さんのほとんどはお年寄りである。子供の姿を見かけるのは登下校時くらいである。また昼間の避難所は人影もまばらで、寒々とした中で静かに丸まっているお年寄りの姿が目につく。出歩くことが億劫なお年寄りには、巡回診療が有難かつたようで、民間企業の体育館、集会所、公園のテントといったところの徒歩巡回の様子を知る上でも大切なことであつた。疾病の大半は感冒であり、その他は高血圧、不眠、腰痛等々である。

前班では地元医療機関から苦情の申し出も



物資搬入を手伝うスタッフ

あったとのことであり、投薬日数、指導には注意を払った。臨時診療所にはある程度の医薬品が揃っていたが、病院薬、一般薬が混在しており、薬剤師のアドバイスは診療を助けた。また、紙オムツ、マスク、カイロといった日用品等の払い受けに訪れる方々もしばしばあった。スタッフは診療の合間、朝・昼・夕の食事の搬入、衣料品その他物質の搬入整理等にも協力をした。

こうした日々の診療の状況は、午後四時から、長田診療所の合同ミーティングで報告される。

各県からの医療班が一堂に集合して行われるのである。担当官は対応の多さに疲労がうかがえ、喉をつぶしてしまっている人もいる。ミーティングでは報告の他、保健所からの連絡・指示、情報交換、問い合わせ、医薬品の調達等が行われる。保健所は区役所の五階にあり、震災の被害も受けていたので、三日目のミーティング時の余震でぐらついた際には、一瞬肝が冷えた。

毎日の済生丸と真野小学校の往来、保健所指示の巡回診療、真野小学校と保健所の往来には、ボランティアのタクシーが手足となり動いてくれた。神戸市健康増進局が窓口になって毎日二台を手配してくれた。車両はあったものの、地理感に乏しいこともあり、タクシーが一日中利用できたことは非常に有難かった。また、済生丸で寝食ができたことも有難かった。

私達は瀬戸内海巡回診療でいつも使用しているその良さは分かっているが、避難所を思えばはるかに快適であり、スタッフの疲れを癒してくれた。それから、携帯電話は欠くことのできない必需品であり、その利便性は

第六班

一、平成七年二月四日十三時〇〇分

二月七日十三時〇〇分

二、診療班合計 八人

施設名 職名 氏名

下関	医師	看護婦
百名 英二	花園 繁美	西村 容子
	飴山 晶	

変役に立った。

二月四日、日課もスムーズに流れ、毎日にも慣れてきたところであったが、午前中の診療、巡回を終え、午後零時、第六班（下関・岡山チーム）にバトンタッチ、新たに夢野台高校の診療が加わったこと、要介護老人の調査等を申し送った。

午後一時真野小学校を後にするが、車窓に飛び込む長田区の町並みは無惨で焼け野原化したところもあり、改めて震災の大きさ、怖さを痛感した。また、一方では、解体、片付け等の復旧作業も急ピッチで進められており、ショベルカー、ダンプが忙しくしていた。途中明石で時遅れの昼食を取り、岡山病院へは午後六時到着。第五班の診療報告を済ませ、山口へ、今治へとそれぞれの帰路に着いた。

任務はいろいろな助けを受け、何とか遂行できたものの、被災者の方々がまだまだ長いトンネルの中にあり、諸問題を抱えていることを思うと、遣る瀬ない気持ちである。一日でも早い復興を目指して、元気を出していただきたい。

岡山 久子
戸嶋 涼子
岡山 薬剤師
酒井 律江
事務員 秋山 敏夫

三、取扱い患者数合計 二二三二人

内訳

定点での診療 真野小 一三六八

夢野台高 五八八

巡回診療 三三八人

四、巡回場所 合計五カ所

三ツ星ベルト会館

真野東集会所

真野市住集会所

東尻池いこいの家

東尻池公園

五、活動概要

岡山・薬剤科副薬局長

酒井 律江

第六班医療班（下関病院班）の薬剤師としてではなく、調整員として二月四日、何か一つでもお役にたてれば幸いと不安な思いで、事務の秋山さんと岡山駅を出発した。姫路までは新幹線、そこでリュックを背負った下関病院の六名と合流し、満員の快速電車に乗り換えた。明石駅回りまではまだ地震の恐ろしさは想像だけのものだったが、次第に屋根に

青いシートが目立ち始め、須磨を過ぎる辺りから想像を絶する風景と一変した。瓦は落ち、壁はくずれ、押しつぶされた家々、ビルは無残な瓦礫と化した光景が目の前に現実として迫ってきた。

地震の破壊力のすごさに、しばらくは声も出なかった。兵庫駅で下車し、車で長田区の真野小学校へと向かった。焼け野原の長田区は被害が最も激しい場所の一つだ。随分と前だが四年間の大学生活を送った懐かしい神戸の町が見るも無残に壊され、お正月に友人と楽しい時を過ごしたホテルは華やかだった雰囲気などみじんもなく、ただただ廃墟のように、悲しい思いだった。町行く人々はジーンズにジャンパー、マスクをしてリュックを背負い、埃っぽい道を黙々と歩いていて、お洒落な神戸はどこにもなかった。長田区の真野小学校内の診療室で、今治病院から引き継ぎを受けた。兵庫駅では出ていた水はここでは出なく、トイレは手洗い用と水洗用の水が寒い中、ポランティアの手で、大きなポリタンクに貯められ、水洗タンクに使用した水は自分で補給するので、床は濡れてはいたが、意外にきれいだったのでホッとした。

百五十名程の避難の人達が、授業も始まっていたが、秩序正しく共同生活を送っていることが感じられた。若いポランティアの人達や日曜日も返上の学校の先生達の力の大きいことを感じ、頭が下がる思いだった。

真野小学校には内科と外科の先生と二名の

看護婦さんと私の五名が、秋山さんは内科の先生、看護婦さんと夢野台高校を担当した。調整員としてまた薬剤師としても仕事をしようと思っていたので、まず薬品の点検、整理また巡回診療用の薬品と器具の準備から取りかかった。

市販薬が多く、戸惑い、能書を読むことから始める必要があった。薬品だけでなく衛生材料、ミルクや離乳食そして哺乳瓶まで所狭しと積み上げられて、部屋の片付けや掃除、やつときれいになり様子が分かった時には四日間が終わり交替となってしまった。

寒い建物での共同生活のため、風邪が流行し、それに加え、町はビル等の解体工事でマスクなしでは歩けない程の埃で、咳き止めやうがい薬そしてマスク等が不足していた。毎日同じような弁当で拒食症様の症状を示す子や遊びたくても友達や遊び場をなくし、巡回診療に行くとしやれついてくる子供達、薬では治せないはがゆさや子供と遊べる時間が必要だと思った。

また緊急入院が必要でも、対応できる病院探しや救急車の手配など一苦労で、まるで無医村といった感じだった。人々に話しかけると、皆地震の様子を興奮した状態で話してくれた。

どんなに恐ろしい目にあつたことか、一緒に涙ぐんでしまう話もあった。余震への恐怖や今後の生活への不安、プライバシーのない生活による苛立ちや不眠、そして少しずつ出

てくる我儘など精神面のケアやお年寄りや慢性疾患の人々は注意を要する時期と思われた。毎日保健所のミーティングに参加し、診療状況を聞き、不足薬品をもらい、その道中に開業医や薬局の開いている状況などチェックするのも仕事だった。

また開業の先生に電話で診療の様子をたずねたり、私たち六班としての役割の意義や、地域の先生達の開業や開局の妨げにならないか、慢性疾患や重症患者の対応について、診療班が残した薬品で開業の人達をおびやかさないためにどうすべきかなど真剣に話し合った。

十八時過ぎに診療も終わり、済生丸へ帰り、船員さんの作ってくれた暖かく美味しい食事と水が使える安心感とクレゾールの匂いを風呂で洗い流せる有り難みをつくづく味わった。地震から三週間目、先発隊の苦労のおかげや不自由のない船での寝泊まりで、苦労知らずだったのに、学校の先生や避難生活を送っている人達から労いの言葉をかけられ、戸惑いと面映ゆさを感じた。少しずつ人々が落ち着きを取り戻しているようだった。しかしまだまだ行政が立直れず、保健所では職員は疲れ果てた様子で、課により意見が異なる状態のようで不安が残った。

災害時の薬剤師の仕事は、チーム医療を陰で支える裏方の仕事で、要請がなく残念に思っていた。

今回、調整員としてであったが参加させて

いただき、下関病院の皆さんから熱意や誠意を教えていただき、そのうえ薬剤師がいてよかったと言っていたいただき、嬉しく、よかった。別れ際には、誰からとなく、思わず皆握手したものだ。

貴重な体験と勉強をさせていただき、本当に有難うございました。そして、陰で支えてくれた薬剤科の皆さんに感謝しています。

下関・内科医師

百名 英二

〈派遣前、及び派遣中の院内の診療体制の調整〉

医師三人、外来、入院患者を個人的に依頼〈交通事情〉

下関―(新幹線)―姫路―(JR在来線)

―JR兵庫駅タクシーにて真野小学校へ〈周辺被災地の状況〉

いたるところに瓦礫の山、崩れ落ちた高架傾いたビル、しかし場所によっては被害なく全く普通の街並み。

〈衣食住事情〉

不自由なし、船酔しなければ済生丸は快適

真野小学校当直は0時以降患者はほとんど来ないが、何故か寝ずらい。

〈保健所のミーティング〉

医療団二八チームの代表が三〇〜四〇人長

田区保健所に集まり、保健所の人から医療情報等を聞き二、三の質問、返答があるだけですぐに終わった。開業医がかなり診療を再開しているとの情報。また、一部に救援医療団とのトラブルも起こり始めているとのこと、しかし具体的には不明。

〈反省事項 教訓〉

われわれの頭の中には常にどれだけ、被災地の人の役に立っているのかという疑問と不安があった。

外傷、重症患者は殆どなく、医療状況は一見落ち着いてみえた。しかし周囲の基幹病院に直接聞いてみると、空床は全くなく県外に送っているとのこと。周辺の開業医にかたづけしから電話をかけてみると診療は再開されていた。

しかしよく聞いてみると午前中か遅くても午後五時までで、その後は診療不可とのことであった。

まだまだ医療機関の回復はしておらず、われわれの役割は意外に大きかったかもしれない。まだ簡単には入院できる状況ではなく、避難所をまわり点滴をしたりすることで何とか乗り切る。また夜間開いているわれわれの診療所は、どこでも同じだが暇でも価値があったように思う。

救命救急という意味ではもうあまり役に立てなかった。より早く多くの組織立った救援活動ができる体制づくりが望まれる。

第七班

一、平成七年二月七日十三時〇〇分

二月十日十三時〇〇分

二、診療班合計 八人

施設名	職名	氏名
山口	医師	湧田 幸雄
	看護婦	岡田 智子
	事務員	秋本 憲志
唐津	医師	山岡 邦宏
	看護婦	小松 公子
大牟田	医師	本多 信茂
	看護婦	三沢 幸枝
岡山	事務員	名越 良雄

三、取扱い患者数合計 一四三人

内訳

定点での診療	真野小	七三人
	夢野台高	四九人
巡回診療		二一人

四、巡回場所 合計五カ所

- 三ツ星ベルト会館
- 東尻池いこいの家
- 真野東集会所
- 東尻池公園
- 真野市住集会所

五、活動概要

岡山・管財課長補佐 名越 良雄

診療救援班第七班として、二月七日より十日まで被災地神戸へ向かいました。今回のスタッフは山口、大牟田、唐津病院よりそれぞれ、医師、看護婦一名ずつと、調整員として山口一名、岡山一名の計八名の混成チームだ。何かと気づかう三泊四日の診療救護の開始だ。

診療場所は、長田区の真野小学校避難所と夢野台高校避難所の常設二カ所への割り振りからだった。今回は、岡山病院より業務分担および診療関係の情報プリント配付（別紙資料参照）を行い、医療班の業務等の不安が解消し、好評だった。震災後一カ月近くだったが、被災地の現状は、テレビ、新聞等の知識として知っているものの、ここで五千人の方が亡くなったとは信じられなかった。復興に向け急ピッチで作業している地区とは裏腹に、済生会の診療担当地区では倒壊、半壊の民家が多く、手付かずのところが多数あり、その中で最小限の被害の町工場、商店、飲食店は稼働しており、ちよつとした買い物は可能だった。

真野小学校診療所の調整員担当は私で、医師、看護婦は山口病院、唐津病院、夢野台高校診療所は、大牟田病院の医師、看護婦として、調整員は山口病院の方が務める。前班の下関病院との申し送りも終わり、開始。診療所のある真野小学校への避難者約百三十名、夢野台高校体育館へは約百三十名とのことだった。真野小学校診療所では近辺五カ所の避難所を巡回診療した。最も大きな避難所は、三ツ星ベルトの体育館で約二百五十名の方が暮らしているが、昼間は殆どの方がいない。働きに出ている人、自宅の整理に行っているなどからだ。夜になると少し患者が増える傾向があり、また、埃、寒さのため、モムホット、ホカロン類、マスクなどが品薄になる状態もあり、診察ではなく物品渡し業務も多かったと思う。

この頃になると被災による直接の外傷疾患はなく、感冒が圧倒的に多く、それに対応する医薬品（市販薬）は豊富にあり、診療には問題なく、われわれの診療期間中の受診者は百五十八名、一日平均五十名でほとんどが中年の方からお年寄りであった。

神戸市の指導で慢性疾患および通院を必要とする患者さんは地元の開業医および病院も徐々に業務を再開しており、そちらで受診することをすすめる、徐々に平時の診療形態への移行を促していた。

周辺五カ所の巡回診療（市からは訪問看護でとの指示）と、避難所から要請があれば二

十四時間いつでも往診を行った。真野小学校診療所だけだが、医師が一名当直し、対応した。

受診患者で子供、幼児の数が少なく、診療所へは毎日、ミルク、オシメ等をもらいに来る人はいたが、乳幼児の姿をほとんど見かけないので、不思議に思った。小学校なので児童はいたが、この辺のお年寄りが公園に集まっていた。聞くところによると児童の一人もない町内の通りもあるそうだった。

診療で不便を感じることは特になかったが、水が出なかった。飲料水としての飲み水は充分確保されていたが、トイレでは皆さん苦労していた。水は流せるが、使用した紙（トイレトペーパー）は流せなかった。備付けのゴミ袋へ入れてゴミ収集へ出す。バケツで各自流すが、水量が少ないので、排水がすぐ詰まるためだ。

ボランティアおよび避難者の当番が流し、水の補充を行っていた。夢野台では診療班が一時行っていたが、ボランティアに引き継がれたようだ。真野小学校診療班は大事な日課があった。

毎日定時にくる避難者への食糧運搬だった。ボランティアの皆さんにまじって手伝った。けっこう一日の体力を消耗するが、これで、当直医師の夜の弁当をもらいに行くことができた。診療班は毎日その日の午後四時より長田区保健所で行われる診療状況および今後の方針等のミーティングがあり、全国各地のボ

ランティア医療団が集まり、情報交換を行った。不足の薬品、物品なども保健所で補充した。

夜は、済生丸で宿泊したが、一日慣れない仕事のせいでよく眠ることはできたが、最初の夜は船酔いがはげしく、まいってしまった。混成チームだったが、本当に皆さんよく親身になって被災者の方へ尽くされていた。

山口・脳外科部長

湧田 幸雄

(1)到着までの交通事情…二月七日、八時四十分、JR小郡駅発の新幹線に乗車、明石で普通列車に乗り換え兵庫駅下車、チャーターしてもらったタクシーで長田小学校に十二時半頃に到着。

(2)周辺被災地の状況…二、三割の鉄骨、コンクリート製の建物は軽い損害がみられる程度で、長田小学校もほとんど被害はみられなかったが、周辺の木造家屋はほとんど全、半壊しており、互いに寄りかかるように建っている状態で放置されており、まだ復旧の兆しはなかった。国道は、高速道路の復旧作業が開始されており、このため交通は渋滞し、付近に騒音、塵埃が発生していた。

(3)現地での診療班の生活状況…当直日以外の済生丸での食事、宿泊等は、快適で、特に

水、トイレが自由に使用できるため、日中の不自由に対するストレスを余り感じることがなかった。長田小学校の当直は石油ストーブの使用とベッド、寝具が整っており特に困ったことはなかった。食事は朝は前日のパンのみで、時には済生丸からおにぎりを持参した。昼夜は弁当でボランティアの人が人数分差し入れてくれた。その他は持参したインスタント食品を適宜食した。トイレは水が使用できないため不自由だった。

(4)巡回診療、保健所のミーティング…巡回診療は縮小しつつあり、往診依頼のあったときに診療した。保健所のミーティングでは長田保健所管内の診療状況全体が把握できて、他の医療チームとも意見交換ができた。特に徐々に現地医療機関が診察を開始して救急診療も減少してきた時期であったので、保険診療を混乱させないために、診療班の撤収時期などが問題になっていた。

(5)引き継ぎなど、問題点…われわれの班は、最初から長田小学校と夢野台高校とに分かれて定点診療を行ったので日々の引継ぎを省略できた。各々の診療場所でもかなり事情が異なっておりこのような方法のほうが適していた。

(6)反省事項教訓…出発直前の現地の情報が不足しており一、二週前の情報で所持品（薬品、処置器具、個人の携帯品）を選択したので不要な物品があった。非常事態では、日々、あるいは朝三暮四で現地の状況が変わっており、できるだけ容易に、密接に連絡できる体

制が必要であろう。チームとして携帯電話を持参したが、移動電話は何台あっても有用と思われた。将来は移動電話によるファックスあるいは携帯型パソコンによるパソコン通信がベストと考える。

今回被災地西部の診療に関しては、まず岡山病院に情報を送り、岡山病院から他の病院に連絡するか、岡山病院に問い合わせをして情報を受けるようになっていたが、現地に設置されている電話、ファックスは自由に利用できなかったり、正常に作動しなかったりするため、今後は個別に持参し設置する必要があると思われた。

(7)持参してよかったものなど…移動電話
(8)医療救援班派遣に対する意見…済生会本部には被災地近隣の医療施設、特に近くの済

第八班

一、平成七年二月十日十三時〇〇分

～二月十三日十三時〇〇分

二、診療班合計 八人

施設名	職名	氏名
境港	医師	加藤 達生
	看護師	永井 節子
福岡	医師	石川 裕章
	看護師	筒井 伸一
	看護婦	大黒能布江
		有川 直美
岡山	臨床検査技師	佐藤 誠

三、取扱い患者数合計 一四四人

事務員 中尾 豊美

内 訳

定点での診療	真野小	七〇人
	夢野台高	四八人
巡回診療		二六人

四、巡回場所 合計五カ所

三ツ星ベルト会館
真野東集会所
真野市住集会所
東尻池いこいの家

生会病院から様々な情報が次々と入ってきていたと思われるが、一般病院ではマスコミの報道程度しか知識はなく、現地で刻々と変化している医療状況は全くわからなかった。また、日赤などに比べて初期の活動に出遅れたこと、医師の派遣要請が漠然としていて各々の医師はどう対応してよいか困ったこと。どの時期に何科と何科の医師が必要だ、と言った具体的な形で派遣を募って欲しかった。これらの点が残念な点で、ぜひご検討いただき次の万一の事態に備えていただきたいと思う。ただ今回西と東からとに分かれて被災地へ入ったことは大変よい方法で全てに好都合であったと思われる。海路を利用して被災地へ赴き、済生丸を宿泊施設とされたことはすばらしいアイデアだったと思う。

五、活動概要

岡山・臨床検査主査

佐藤 誠

平成七年二月九日(木) 午前九時四十二分
岡山を新幹線で出発、岡山からは第八班医療救護班として調整員二名、私と中尾さんが派遣された。姫路より在来線で兵庫駅へ向かったが、西明石を過ぎると町の様子がどんどん変わり、テレビでよく見た被災地の光景に二人はしだいに無言で眺めるだけとなった。

出発前日、院内の打合わせで私たち調整員の仕事内容の再確認が行われ、救護班の医療活動がスムーズに行えるように現場で機敏に行動し、避難所の責任者・学校関係者との交渉を図ることが任務だった。兵庫駅が近づくにつれて責任感と不安感で一杯になった。その不安が的中し、福岡済生会の医師と看護婦さんが待ち合わせ時間に現れない。岡山や真野小学校へ電話後、数十分して医師の方々の姿が駅舎に現れて合流となった。

真野小学校に午前十一時三十分、第八班救護班が全員集合、第七班の引き継ぎを受けた。避難所での生活状況は、電気は通じているが、水道はダメ、トイレは使用後溜め置きの水を流すなど詳細な説明を受けた。また、毎日午

後四時から長田保健所における各地域救護班とのミーティング、保健所からの連絡事項、さらに、毎日の診療人数を把握し、長田保健所と岡山病院へのファックス送付、医療品と衛生用品など不足の場合の対応（保健所へ取りに行く）、巡回診療中他の病院スタッフとのトラブル等の注意事項であった。

引き継ぎ後、真野小学校の校長、避難所の責任者へのあいさつをすませ、第八班救護班の活動が開始された。

まず最初に、午後二時頃より巡回診療の場所、三ツ星ベルト会館、東尻池いこいの家、真野東集会所、東尻池公園、真野市住集会所など確認を兼ねて巡回した。自分の足で長田地区を歩いてみて、凄惨な本場に信じられない光景が目についた。しかし、被災された方々の多くは、昼間は避難所にはあまりいなく、老人と子供たちだけであった。町では少しずつ片付けが進み、がれきの山が公園に積んであった。また、公園にはテントが張られ、若い人たちが一生懸命働いていた。「兄ちゃん、かぜ薬ないか」「マスクないか」など声をかけてくる。あまりの気やすさに最初は少しびっくりした。破壊された家に、「壊れていても私の家です。ゴミを捨てないで下さい」の貼り紙には、ぐっと胸にくるものがあった。

避難所での二月の生活は、たいへん辛い時期で、床を歩くだけでも足が冷たくなるほどの寒い日々のなか床に薄い蒲団一枚だけの毎

日は、風邪に罹っても仕方がない状況といわざるをえなかった。私たちが、真野小学校に居た三日間で私の印象に残った患者さんが三人いた。その一人は犬に噛まれた人で、かなり深い傷のため縫合することになった。

内科の先生が、アポーズで縫合手術、椅子を移動し長椅子を用意し、まるで野戦病院さながらであった。翌日元気になって消毒にいられたので安心した。

もう一人は、地震当日の一月十七日家でガラスの破片を踏んで一カ月もそのまま過ごした人である。よく一カ月も思われるだろうが、それだけ地震後の生活が大変だったかを物語っている。麻酔もせず、よく手術にたえてがんばられた。

あと一人は小学生、インフルエンザがひどくなり点滴を必要とした。長田保健所に連絡し、小児科の開業医の紹介を得てタクシーで、その小児科へ向かった。長田警察署で場所の確認をした後に訪れた診療所は、なんとあのよくテレビに出ている菅原市場のアーケードの前であった。やさしい小児科の先生であった。そして、地震の後の生々しい傷跡の診療所で小学生は点滴を受け、避難所に戻った。早く学校へ行けるようになればと心から祈る思いであった。

真野小学校における活動は短期間であったが、大変充実した三日間となった。私は、臨床検査技師で検体を中心に検査を行ってきたため、医療を通してこのように人に接するこ

とが少なかった。できれば避難所のもっと多くの人たちと話し、現場における被災者の人たちの心が少しでも和むよう接することが、ボランティアとして重要なことであることを認識した。そして災害時の臨床検査とは、一カ月、二カ月経過した時期の臨床検査を包括した医療とはいかにあるべきか、真剣に考えさせられた。

また、私たちの救護班活動が被災地の人たちに本当に役に立ったのであろうか、ボランティア活動の経験の少ない私の素朴な疑問が残った。

福岡・医師

石川 裕章

当診療班は、医師三名（石川、筒井、加藤）看護婦三名（大黒、有川、永井）調整員二名（佐藤、中尾）の計八名よりなる福岡、境港および岡山の三病院からの混成であり、平成七年二月十日午後から同十三日午前までを担当した。派遣期間は、金曜から月曜までだったこともあり派遣中の院内診療体制については特に影響はなかった。

派遣地域までの交通事情は、震災発生後約一カ月経過していたため比較的容易であった。まず福岡からは、新幹線で博多駅から姫路まで行き、姫路から山陽線で兵庫駅まで行くこ

とができた。こゝでやはり新幹線できた岡山からのスタッフと合流した。そこからは、済生会診療班専用のタクシーであったか、ひどい渋滞もなく割りと順調に派遣地まで行くことができた。境港のスタッフは特急八雲にて米子より岡山まで行き、岡山より新幹線で姫路まで行った。姫路からは在来線で神戸駅まで行き神戸からは徒歩にて現地へ向かった。当初は十五分程度とのことであったが、途中は瓦礫の中で思いがけなく三十分以上の歩行を余儀なくされたとのことであった。いろいろな混乱の中、列車ダイヤの正確さに感心したのと復旧の早さ、関係者の努力には頭の下がる思いであった。

当診療班は、被災地の中でも特に被害の大きかった長田区であり、周辺の木造家屋はほとんどが全壊かそれに近い状態であった。派遣場所は、小学校内の医務室を利用していた。小学校そのものは長田地区の大きな避難所となっていたため、震災発生後約一カ月が過ぎたこともあり食料などの援助物資や医薬品もほぼ充足していた。水道やガスはまだ復旧しておらず衛生面や暖房といった環境もまだ十分ではなかった。このことは、感冒のような軽症患者の回復を難しくし、特に高齢者では肺炎など重症化の要因となっていたようであった。

この時期には重症者はすでにいずれかの医療施設に収容されており、近隣の病・医院も再開し始めてきていたため、当診療所では感

冒のような軽症者がほとんどであった。また巡回診療所でも同様に診察はほとんど軽症者であった。

当診療班の前までは毎日長田保健所での定時ミーティングによる情報交換があったが当診療班のときから医療情報や疾患が安定してきたため週一回となった。

当診療班は、夜間当直診療を医師一名にて交代で行っていたが、重症者の受診はなかった。当直者以外は済生丸での宿泊であった

第九班

一、平成七年二月十三日十三時〇〇分

二月十六日十三時〇〇分

二、診療班合計 八人

施設名	職名	氏名
八幡	医師	城 由起彦
	看護婦	岩本 治也
		青木 美保
		馬場美恵子
		安藤慎太郎
		山村 尚美
		河村 隆志
		安梅 努

山口

医師

看護婦

事務員

臨床検査技師

岡山

三、取扱い患者数合計 一三〇人

内 訳

定点での診療	真野小	六八人
	夢野台高	三九人
巡回診療		二三人

が、入浴もでき食事も暖かいものが食べられたので比較的快適なものであった。

以上のように当診療班での診療は軽症者がほとんどで、どちらかと言うと診療薬局といった感じであった。しかし、今後は避難所の長期にわたる生活による精神的な疾患も増加してくると思われる、その方面でのケアや特に高齢者での寒さといった劣悪環境下での軽症患者の重症化といった問題がでてくるものと思われる。

四、巡回場所 合計五カ所

三ツ星ベルト会館
東尻池いこいの家
真野東集会所
東尻池公園
真野市住集会所

五、活動概要

岡山・臨床検査技師

安梅 努

阪神淡路大震災医療救護班第九班の調整員として、八幡済生会病院の医師二名、看護婦二名とともに、四日間、真野小学校にて活動した。状況はかなり落ちついてきており、感



診療班メンバー

冒患者が大部分を占めていた。

姫路で新幹線を降り、在来線にて一時間程で兵庫駅へ。途中、建造中の明石大橋の雄姿を眺めながら、車窓の風景には少しずつ地震の被害が見えはじめ、兵庫駅へ着く頃には、写真で見るような終戦後の焼け野原が眼前に広がっていた。

タクシーに乗り地上を走る。焼け残った菅原市場のアーケードの骨。当時テレビでよく見た光景だ。死んだようにひっそりと立つ信号機。一角に残ったガソリンスタンド。熱でぐにやりと曲がった鉄骨、くずれ残る黒い壁。

窓より炎の跡がわかる。ほこりっぽい空気、冷たい風、雨が降ればなお冷たいだろう。

真野小学校に着き、第八班との引き継ぎ後、診療活動に移った。小学校の保健室だった。所狭しと並べられた粉ミルク、おむつ、種々の薬。

昼から巡回診療に出かける。近所の公民館や会社の体育館などが避難場所となっていた。三ツ星ベルトの体育館の入り口に立つと、地上より数メートル下の掘り下げられた広い床に、通り道がわかる程度に毛布が敷き詰められていた。窓は高く、けだるい空気が漂っていた。若い人の姿はなく、十人足らずの老人ばかりだった。会話は少なく静かだった。ストープをたかないので寒い。みな厚着をしており血圧を測るのには時間がかった。

この体験を通して一番感じたことは、子供たちの存在の大きさだった。三ツ星ベルト体育館や夢野台高校体育館と真野小学校との差は子供たちの存在の差ではないか。子供たちの元気な声は周囲を無条件に明るくさせた。授業は再開され、職員室も元気がいい。大人はどんなに深刻な所に立たされ、やる気や笑顔忘れていても、子供たちは無邪気にワイワイと遊んでいる。そうしたら自然と周囲がなごむ。

真野小学校はそれのおかげで雰囲気が比較的に明るかった。ひこばえにも似た、その素朴な秘めた力の偉大さに驚き、気付かされた経験であった。

山口・内科部長

安藤 慎太郎

地震より四週間目の二日十三日早朝。看護婦山村氏、調整員河村氏と小郡駅からの新幹線に乗り込む。姫路から山陰本線に乗り換え、車内は空席が目立つ。西明石駅を過ぎ須磨に入ると左右の家々は崩れ落ちてしまっている。そのあとは兵庫駅まで見渡す限り、言葉で表せないほどの無惨な街並であった。

十一時すぎに兵庫駅に着いた。駅構内はあまり混雑していない。出迎える岡山済生会調整員の安梅さん、八幡済生会の救護班と合流し、タクシーで長田小学校へ向かう。幹線道路は渋滞しており、頭上の高速道路の橋脚はひび割れ、捻れており、鉄骨やコンクリートで補強作業中であった。非日常的な光景であった。

夢野台高校へ向かうタクシーの車窓から崩れ落ちた建物、焼け野原となった市街地が見える。ある交差点脇のサウナ風呂は銭湯として開放されており、そこには三、四十人の人が長蛇の列を作り順番を待っていた。夢野台に近づくにつれて、建物の崩壊はひどく、高校前のアパートは、一、二階が完全につぶれてなくなっていた。神戸港近くの一帯では、立ち並んでいる高層ビルがどれもこれも傾い

ているように見えて、自分の体が傾いているような錯覚に陥った。路面のアスファルトは上下左右に盛り上がり、また陥没しており、信号機や公衆電話ボックスはひどく傾いている。埠頭に並ぶ倉庫群も上下に激しく浮き沈みしていた。

当班が滞在した時期は好天であったが、夢野台高校の救護室は寒かったため、厚い下着と防寒着、厚めの登山靴が非常に役立った。自分は船酔いで夕食は充分食べられなかったが、済生丸での食事は満足のいくものであり、非常に恵まれていたと思う。昼食の差し入れ弁当はあるだけで有り難かった。宿泊場所は済生丸であったため、睡眠は充分とれた。トイレも完備しており不自由しなかった。しかし、夢野台高校では簡易トイレで、本当に不便であった。三日目は長田小学校の保健室で当直をしたが、その際埃がひどく用意されていた防塵マスクを用いた。

夢野台高校の避難所は体育館と校庭のテントであった。体育館の中は湿気が強く寒かった。昼間は高齢者がほとんどで、多くは避難生活に疲れており、折りからの寒さで体調を崩していた。校庭にテントを張って避難している人は飯盒炊さんをしている人が多かった。救護室へ訪れる人は一日におよそ十五人程度で、外傷は皆無で風邪、腹痛、高血圧などの訴えがほとんどであった。衛生面では簡易トイレの掃除をする人がおらず、手洗いの設置も神戸西市民病院からの応援ナースと調整員

が行った。

避難所でのトイレや給水については大変難渋した。前任者からは勤務の申し送りばかりと受けたが、簡易トイレに関する申し送りは受けなかった。

初めて簡易トイレを利用した時のことだ。便器の設置してある通路が緩やかに傾斜しているのので、一番傾斜の少ない安定してそうなトイレを選んで入ったが、トイレが前後左右にがたがた揺れて、まともに立っていらなかった。救護室に帰ってさっそく応援のナースに尋ねると、それを言い忘れていた、との

第十班

一、平成七年二月十六日十三時〇〇分

二月十九日十三時〇〇分

二、診療班合計 八人

施設名	職名	氏名
熊本	医師	野村 裕常
		宮島 伸治
		平井 信孝
		田中三千代
		浪床智恵美
		米村奈穂子
岡山	臨床検査技師	市川 正之
	放射線技師	難波 知

看護婦

三、取扱い患者数合計 一〇九人

内訳

定点での診療 真野小 五五人

返事。次の救護班にはしっかり申し送りをした。

今回は衣食住のほとんどすべてが確保された環境で医療活動を行うことができたが、本当のボランティア活動をするということは、並大抵のことではないということを肌で感じた。

また、普段は何気なく使っている水やトイレがいかに大切なものであるか、その有り難さも痛感した。最後に当分続くであろう避難生活者の奮闘と被災して亡くなられた方々のご冥福をお祈りする。

巡回診療

夢野台高 三五人

十九人

四、巡回場所 合計五カ所

三ツ星ベルト会館
東尻池いこいの家
真野市住集会所
東尻池公園
真野東集会所

五、活動概要

岡山・画像診断科技師長

難波 知

阪神大震災における済生会医療救援活動第十班の調整員として震災から約一カ月後にあたる二月十六日から二月十九日までを担当した。

第十班の編成は、済生会熊本病院の内科の医師三名と同じく看護婦三名、および市川調整員と私の八名だった。なお、看護婦さんのうち米村看護婦は、岡山済生会看護専門学校卒業生だった。現地までの交通手段は、救援活動の前半の済生丸による移動でなく、復旧（神戸まで）されたJRを利用した。地震から一カ月経っていたが、姫路以東屋根には青いビニールシートがかけられている住宅や、半壊した住居、ビル等震災の爪あとが至る所で見受けられた。

鷹取駅、長田駅一帯では、火災による焼け野原の中、崩壊しなかったビルが点々と黒く焼け残り、それは、無残な光景だった。長田区内のあちこちでは崩壊家屋や崩壊ビルの片付け、また焼け跡の片付けなどの復興作業が行われていた。主要道路は、一部陥没している箇所があったが、ほとんど復旧されていた。医療救援では、救援活動班の行程が確立されていたので、保健所など行政との交渉事は前半を担当した診療班の人に比べて少なかった。

済生会が担当する避難所のうち、私は四日間夢野台高校を担当した。避難所は高校体育館で電気は復旧していたが、水道、ガスは復旧していなかった。救援物資は充分にあり、

食糧も弁当、パン、牛乳などが届いていたが、弁当など冷たく一日おくれの物もあった。水の供給も毎日同じ時間に給水車が来て、ポリタンクに、バケツに、ペットボトルにと水を蓄えていた。

この避難所の被災者の方々は若干減ったのか、今は約二百三十名が体育館フロアで生活されていたが、高齢者の人が多く見うけられた。診療所は体育館ステージ横の医務室（医務室のイメージではない）で行ったが、受診者は多い日で二十名、少ない日で十名程度だった。

受診内容は感冒が主で、ほかに外傷の人、風邪を訴えられてこられたが、実は精神的な相談受診の人もあった。夢野台高校には、神戸市立西市民病院から看護婦さんが交替で救援活動にこられていたので、地域の環境、被災状況などを詳しく知ることができ、参考になった。

今後の医療救援では、糖尿病等慢性疾患に対する検診が実施される予定になっている他、精神的な問題に対応するため保健所内に精神保健相談室が設けられるなど活動の方向が変わりつつあり、一つの転換期のように思われた。

担当期間中の二月十七日まで岡山県加茂川町の人々が交替で訪問入浴サービス用の車「ゆうゆう号」で被災地の方々に入浴サービスのボランティア活動を行っておられ、大変喜ばれていた。

二月十八日には、岡山大学歯学部による歯科の巡回診療が診療所の狭い一角を使用して行われた。子供を含め多数の被災者の方々が受診し治療や指導を受けていた。

被災者のある人は、「復興は大変なことだけど、気持ちとしては震災前の状況を零とし、震災を受けた今の状態をマイナスと考えるのではなく、今のこの状態を零として少しずつでもプラスになるよう頑張りたい、そうしたいと気持ちがめいってしまおう」と語っていた。この時期、夢野台高校では常駐のボランティアの人はいなく、避難住民が力を合わせ、救援物資（水、食糧）の運搬等を行い、避難施設やトイレ等の清掃および生活関連物資の管理等が被災者の方々の手によって行われていた。

十九日昼過ぎ被災者でありながらこの避難所のリーダーである三十代の男性が四十度前後の熱を出しダウンした。われわれが次の診療班（十一班）の人に活動の引き継ぎをしようという時であった。私も何度となく話を交わしたこのリーダーの心身の異変に気付かなかった。

被災、不安、寝不足、そして二百三十名が避難する避難所のリーダーとしての責任などによる疲労を気力だけで支えていたのだろうか……。容態が気になるもわれわれは十一班の診療班の人にお願ひして帰路につかざるをえなかった。

この救援活動に参加して、震災の現状を見、

多くの人と会い、そして、語り、よい経験をする事ができた。そして、報道されている以上に震災の爪あとは無残で、そして悲惨であった。

この震災で亡くなられた方々のご冥福と被災者の方々の一日も早い復興をお祈り致します。

熊本・内科部長

野村 裕常

今回の第一〇次医療救護班の報告を若干の感想をまじえて行います。

(1) 派遣前・派遣中の院内診療体制

医師、看護婦など公務出張のかたちでもあり、派遣決定を受け、直ちに外来では窓口を担当医師の休診期間の揭示を行った。病棟では入院患者へ、救護のため不在であることとその期間中、代行医師が担当することを説明し理解を求めた。看護婦では派遣前後の勤務に無理のないよう考慮がなされた。

いずれも、短期間であり派遣中の院内での混乱は見られなかった。

(2) 派遣までの交通事情

今回は、岡山病院（事務職）と熊本病院（医療、看護職）との合同チームで、熊本グループは博多で一泊の後、新幹線で姫路まで、その後はJRで兵庫駅に向かった。岡山グル

ープは当日、新幹線、JRを用い、兵庫駅で双方落ち合った。真野小学校へは、チャーターのタクシード向かった。震災後一カ月経過しており、新幹線、JR共混雑はなくスムーズであった。

(3) 周辺被災地の状況

西明石より、屋根にかけた青いビニールシートが時々見られる位。明石では、明石天文科学館の時計が五時四十六分で停止したまま。視野全面に青いビニール・シートが広がる。須磨区に入った途端に、家屋の倒壊が出現。木造の家を中心に、ダンボール箱を潰したように無惨な状況が続く。

長田区では、激しい空爆の後のような真っ黒なまでに焼けただれたビル、赤茶く焼け錆びた鉄と瓦礫の山、他の倒壊しただけの地区ではまだあった有機的な色彩も、ここにはなく、まるでモノクロ写真のように見える。言葉も出なかった。この地区を襲った物凄い音と振動、すさまじい火焰そして悲鳴が聞こえて来るようだった。

救護所の周りでも、将棋倒しのように斜めに傾いた家屋、膝が折れたように一階部分のみが潰れた住宅、完全に崩壊してまるで産廃物を盛りあげたようになった建物の跡が見られた。とても信じられない状況であった。

(4) 現地での診療班の衣食住事情

済生丸での心のこもった温かい食事と弁当で食事の心配もなく過ごせて有難かった。衣類も耐寒用の準備をしていたので特に問題は

なかった。済生丸での宿泊は揺れはあったが、入浴もでき、暖房も効き寒い思いもすることもない等など済生丸の乗組員の方々には本当にお世話になった。

真野小学校での当直も十分な布団を用意しており、ストーブも設置しており、衣食住全ての点において満たされていた。寒い中での被災生活をおくられている方々に対し申し訳ない感じであった。

(5) 巡回診療場所、保健所のミーティング状況

巡回診療では、震災後一月たっているためか、またわれわれ医療側の掘り下げが足りなかったためか余り治療を要する患者はいなかった。しかし、風邪、高血圧、不眠などの原因は、暖房もない冷え冷えとした体育館などの避難生活による心身共の疲れであった。身体的なケアのみならず、メンタルケアの必要性も痛感された。表の症状のみにしか対応できない医療に加え、真の解決になる「出口のない避難生活」に終止符を打つ行政の素早い救済措置が真に望まれた。

保健所のミーティングでは、救護活動の大きな動きがつかめた。常に交替する数多くのボランティアの人々に対し、対応する保健所のメンバー（自らも被災者である）は固定しているようで、殆ど不眠不休で頑張っている様子が、疲労の色濃い顔に現れていた。

この時期は無料の救護班の医療（救護）から地元医療機関に中心を移そうと行政が考え

ていた頃でもあった。従って巡回診療は中止（2/7より）し、救護所も二月末で閉鎖することであった。しかし、『移行時期のため、患者の自己申告（家屋の半壊、全壊などを口頭で申告）により、受診した医療機関での一部負担金の支払いは猶予される。』（1/20市通達）決定がなされていたにも拘らず、われわれにはその説明はなく、また避難者に対しても行政や診療機関からの積極的な周知はなされていなかった（避難所の人びとや、診療所にかかっていた人たちもこのことを知らなかった）。

このようなことが起こらないように徹底するためにも、数多くの問題の処理が要求される行政に対して、他の行政機関からの職員の派遣が更に望まれる。

(6) 引き継ぎのエピソード、問題点

事務的な事項のみでなく変化しつつある状況の伝達が必要だと思われる。伝達事項をあらかじめメモはしていたが、それでも漏れがありスタッフに随分と補足してもらった。

単なる引継ぎのためだけではなく、同じ済生会の仲間としてもっと話し合い、知り合うための時間があればよかったと思った。

(7) 持参してよかったもの

震災後一月経過しており、疾患も急性期の外傷などから亜急性ないし慢性期に差しかかっていた。重症患者は病院に収容され、避難所には一見健康そうに見える人々が多かった。しかし、ほとんどが老人で、寒冷に曝され、疲労による感冒などが目立っていた。救護所には、感冒薬はあったが、鎮痛解熱薬などの体を冷やす薬剤が主で、漢方薬等の体を温める薬のストックは殆どなかった。あっても、所謂、実証向きの葛根湯などで、避難生活に疲れた虚証の老人向きのものはなかった。

薬品は充分あるので持っていかなくていいとは聞いていたが、念のため、人参湯、人参養榮湯、補中益氣湯などの補気剤や他数種類の漢方薬を持っていたが、これがよく効きとても喜ばれた。漢方薬の効果に改めて驚いた次第だった。

(8) 反省事項、教訓

「済生会は、迅速かつ状況に応じた医療を提供できたか？」を今回の震災はわれわれに問いかけている。その答えや反省は各自の中にあると思う。済生会としても今後災害医療に対して、マニュアル作りなど今回の経験を活かして更によりよい対応が可能になっていくことだろう。

平和ボケの日本人には乏しかった災害への知識、備え、危機管理意識などにも多くの問かけを残した今回の震災だった。そして、また多くの人に人生観を見直す機会をも与えた震災だった。

被災者で患者さんだった下前まつるさんという一人の老婦人の言葉が今も心にこだましている。『私たちは、最初は、ルンペンみたいだと言って哭いてばかりいました。今は、皆さんによくしていただいて皆、ありがたい、ありがたいと言って泣いているんですよ。』この言葉には、思わず涙ぐんでしまった。

何かを与えることができればいいなあと思つて行った神戸だったが、与えるどころか、逆に有り余る程多くのものを与えられ、教えられた今回だった。

地震は建物を揺さぶり、行政を揺さぶり、人の心も揺さぶった。

(9) 最後に

最後になりましたが、阪神大震災で亡くなられた多くの方々の御冥福を心よりお祈りすると共に、被災地の一日も早い復旧を切に望

みます。
また、今回の救援活動に対し全面的に支援して下さった岡山病院や済生丸の方々、並び

第十一班

一、平成七年二月十九日十三時〇〇分

二月二十二日十三時〇〇分

二、診療班合計 八人

施設名	職名	氏名
山口	医師	大谷 達夫
	看護婦	松浦由加里
	事務員	片山 隆司
境港	医師	前田 啓之
	看護婦	徳永 喜子
江津	医師	阿部 重郎
	看護婦	笹尾 孝美
岡山	臨床検査技師	四木 和之

三、取扱い患者数合計 一一一人

内訳

定点での診療	真野小	六五人
	夢野台高	二八人
巡回診療		十八人
巡回場所 合計五カ所		

真野小学校
真野東集会所
真野市住集会所
東尻池いこいの家
東尻池公園
五、活動概要

に済生会本部に対し、改めて厚く御礼申し上げます。

岡山・臨床検査主任技師 四木 和之

平成七年一月十七日未明、夢うつつの中、突然激しい揺れに目を醒ました。

この揺れは今までより、大きく、長い。が、その揺れが納まるとまた眠りについた。しかしその揺れが大都市神戸を中心に襲った大地震で、想像を絶する被害をもたらしたとは予想だにできなかった。

昼食時間、ニュースでその状況が見えはじめた。そしてその被害は日に日に増すばかりであり、それは写真で見ると関東大震災か、太平洋戦争の空襲跡か。「叔母が神戸三宮にいる。大丈夫か」頭をかすめる。

十九日、第一班が済生丸で出勤。陸路が断たれて各救援隊はその物資の輸送、宿泊に事欠く中、海からの救援は済生丸を持つ済生会にとってもっとも活躍が期待できる。この朗報に、済生会の迅速な対応と実行に期待するとともに、是非参加したい気持ちがあふれた。

た。しかし震災当初の対象は当然医師と看護婦を主体としたチームであり、検査技師の及ぶところではなかった。ボランティアでも参加するか、と考える中時間は過ぎていく。

二週間後、調整員の要請が検査科にきた。すぐに立候補するも、家族会議では条件付の同意。やつと出発の日が。日曜日、おまけに岡山病院から一人だけ、不安のなか予定より一時間も早い新幹線に乗り込んだ。気持ちに少しでも余裕をもたせたかったからだ。姫路、加古川、明石。震災の影響は認められないが、明石大橋を過ぎる頃、瓦は落ち、屋根はくずれ、倒れた家もある。自分がこれから向かうとしている状況に、不安は更に増すばかりだった。

電車で揺られ、垂水、須磨、長田。「これがあの神戸!」テレビや新聞でみた状況が視界に飛びこんできた。心の準備はできていたはずなのに、大きなため息と悲壮感、そして絶句。背筋の寒くなる思いだった。

スタッフ（山口病院、江津病院、境港病院）八人が予定通り集合、まずは任務遂行。タクシーに乗り込み一路前任者のいる真野小学校へ。途中、車窓より見る長田区は火事の発生のため完全な焼け野原、マスコミからの部分的な情報とは、比べものにならない臨場感とその重みに身の毛もよだつほどだ。長くて短い四日間が始まった。少ないスタッフはいっしょに親近感を覚え、もともと同じ職場のスタッフであるような錯覚に陥る。周

刃の巡回診療も避難者は昼間仕事にでかけ、残る人は老人とこどもが主体。いつしか気軽に声をかけ合うようになつた。水道も二日目には出るようになり、一気に生活改善された。やはり水は命である。宿は済生丸。途中のタクシーでみる神戸の町並み。幾度となく訪れたことのある自分も、なぜか見慣れない景色に戸惑いがみられる。たしかここには

。阪神高速は跡形もなく、阪急三宮ビルはその存在さえも忘れてしまう。済生丸につく。やっと一息。夕食を囲みスタッフの会話が弾む。波による揺れは瀬戸内巡回診療で慣れてはいるものの、やはり酔い止めの薬の助けをかりてしまった。狭い仮設ベッドに休むも、ボランティアの人たち、被災者の皆さんに比べれば、それは天国と地獄以上の開きがあるう。深い眠りにつく。

巡回診療の時に思ったこと、それは避難場所のなんと寒いこと。ストーブなし、こたつなし、当然他の暖房なし。それに加え場所は体育館、公民館、集会所といった板張。配給の毛布は二、三枚程度。寒い、冷たいとスタッフみんなが口をそろえて言う。当然感冒が一番多い。火は火災が恐いので使用できないらしいし、コンセントも基を切っている。しかしそんな中、九十五歳の老人がにこにこ笑いながら地震後あそこの家に家族共々生き埋めになり、三日後やっと救助してもらったと話してくれた。その家を見る影もない。みんながんばっている。医療機関も徐々に回復。

しかし十分な診療機器の使用できる施設は少ない。糖尿病などの慢性疾患が心配である。また精神的に病んでいる人たちも多い。

本当に長いと思われる四日はあつと言う間に過ぎてしまった。同行したスタッフと再会を誓い、新幹線で分かれた。そして自分は岡山の地に一人帰る。

こんな経験には二度と遭うことはないであろう、いや二度と遭ってはならない。

再びスクリーンと紙面だけによる別の世界が世間をにぎわす。阪神大震災はまだ終わっていない。

先日、再びあの神戸を通過した。町並みの復興は目覚ましい。新しい神戸に変わりつつある。しかし、自分にはあの時の情景が走馬灯のように流れていく。胸が痛む。しかし、自分は被災者ではなく傍観者。再び胸が痛む。『被災者のみなさん頑張ってください。気持ちをしっかりと持ってください』としか言っていられない。

山口・医事係長

片山 隆司

平成七年二月十九日(日)、午前七時に山口病院発、小郡駅七時四十四分発のひかり三十二号に乘車。姫路駅九時四十六分着、山陽本線に乗り換え、午前十一時過ぎに兵庫県に到着。

兵庫駅にて江津病院、境港病院、岡山病院の各チームと合流し、神戸市チャーターのタクシーにて、真野小へ。山口病院チームは、大谷医師(内科)、松浦看護婦、片山事務員で構成した。全チームで医師三名、看護婦三名、調整員二名の構成である。

真野小にて前班(第十班)より申し送りを受けた後、真野小班と夢野台高校班の二班に分かれ、夢野台高校班(医師一各、看護婦一各、調整員一各)は、真野小からタクシーにて夢野台高校へ移動した。

以降、夢野台高校班について。

夢野台高校到着後、真野小と同様、前班(第十班)より申し送りを受けた後、引き続き診療に入った。全体としては、特に救急を要するものはなく、慢性症状の対応が多かった。

調整員としての引き継ぎ事項

○十五時頃 健康相談報告書を保健所に FAX。

○月水金、長田保健所にて十六時よりミーティングのため、夢野台高校を十五時三十分タクシーにて出発。

○十七時 診療終了。

・日報をFAX TO 保健所、岡山済生会。

・火の始末、電気等。

・診療終了のほう紙を入口にはる。

・真野小調整員へのTELし、帰る旨済生丸へ伝えてもらう(夢野台↓済

生丸連絡不能のため。

○済生丸着 タクシーより「済生会診療班」のプレートをおろす。

○朝八時前頃、済生丸発、夢野台高校へ向かうタクシーに「済生会診療班」のプレートのをせる。

○夢野台高校へ到着したら、「診療終了」のはり紙をはずす。

○一般事項

・巡回診療は不要 グランド館内は医師の判断で。

・タクシーは市より常駐なるべく利用すること。

・昼食は避難所の方が弁当等を持ってきた下さる。

・人数等変更の時は事前に連絡すること。

・ストーブの灯油は体育館入口の缶の中。

・仮設トイレの掃除、以前は調整員が行ったが今は自分たちでされている。

・仮設トイレの手洗い水の交換。

・西市民病院の看護婦さんがされる。

〔現地での衣食住事情〕

(衣) 必ず腕章をつけ、はでにならない服装に心がけた。

(食) ・朝夕食は、済生丸にて船員の方の料理を頂いた。

(住)

・昼食は夢野台高校に毎日配給される弁当を分けてもらった。

・質・量とも十分であった。

・済生丸では一日だけ船酔いになった。

・夢野台高校は山手になるためかなり冷え込み雪のちらつくこともあった。暖房器具は石油・電気ストーブの各一台で、診療室(体育館二階の放送等の調整室)が暖かくなることはなく、カイロは必須であった。

・夢野台高校は山手になるためかなり冷え込み雪のちらつくこともあった。暖房器具は石油・電気ストーブの各一台で、診療室(体育館二階の放送等の調整室)が暖かくなることはなく、カイロは必須であった。

第十二班

一、平成七年二月二十二日十三時〇〇分

～二月二十五日十三時〇〇分

二、診療班合計 八人

施設名	職名	氏名
広島	医師	高砂 利行
	看護婦	黒田 美也
呉	医師	山田 勝士
	看護婦	上本由紀子
香川	医師	真鍋 正博
	看護婦	石川 悦子
岡山	臨床検査技師	米山 学
	事務員	福見 俊雄

三、取扱い患者数合計 一五〇人

内 訳

定点での診療 真野小 一〇〇人

夢野台高 二五人

巡回診療 巡回診療 二五人

四、巡回場所 合計五カ所

三ツ星ベルト体育館

真野東集会所

真野保育所

東尻池公園

真野市営住宅集会所

五、活動概要

〔持参してよかったもの〕

・携帯電話

真野小班との連絡、近医への受診伺い等にとっても有用であった。

・カイロ

〔巡回診療場所・保健所のミーティング状況〕

・巡回はなし

・保健所のミーティング

その時点の最新の情報がわかるので

(受け入れ可の病院等)、必ず出るようにした。各地からのスタッフが

多勢参加しておられた。

岡山・医事課長

福見 俊雄

病院が募ったボランティアとして、神戸へ行ったのは二月二十二日だ。第十二班の調整員として、検査の米山さんと出発した。姫路までは新幹線、それより先は在来線だ。明石に近づくにつれ、屋根に真新しいシートが被せてある家が目につくようになった。しかし、倒壊した家は全くなく、これが地震の被害なのかなあ、という感じで見ていた。突然、崩れた家が目に入った。思わず「あっ」声が出るほどの驚きだった。テレビで見ているので知らなかったわけではないのである。それから兵庫駅に着くまで、すさまじい光景の連続だった。

兵庫駅で、広島、呉、香川済生会の医師、看護婦と合流し、出迎えのタクシードで診療所のある真野小学校へ向かった。途中の光景は、見た者でないと到底理解できない有り様だ。こういうことが起こっている現実を、目の前にしても信じられなかった。先発班との申し送りをすませ、夢野台高校へ向かう人達と分かかれ、われわれは避難所へ巡回診療に行った。受け持っている避難所は、一番大きい三ツ星ベルトの体育館を含め六カ所あった。暖房設備のない所もあった。

最初に行った三ツ星ベルトの体育館は暖房がなく、中は寒く空気が湿って重く感じられた。靴を脱いで上がり、板間なので靴下を通して冷たさが染みてきた。体育館は地下一階を含め多層階になっており、避難者は地下一階と一、二階に入っていた。

地下体育館の窓は地面付近にある小さなものだけで、日光は入っていない。その冷たさと、薄暗さが、人々の気持ちを一層暗くしており、気力を奪っているように思えた。布団も板間に直に敷いており、他人とを分ける境の壁などはなく、かろうじて手荷物や段ボール箱、それと布団の色の違いで見分ける状態だ。

このような状態だから、午後二時頃なのに上着を重ね着し、頭から布団を被っている人もいた。

私達も昼食は配給の弁当だった。室外で保管しているので凍る寸前のように、口の中に入れてもなかなかほぐれない。朝の巡回診療に行ったとき、腹の調子が悪くなった人がいた。

配給の弁当を食べたそう。それと同じも

のがわれわれの今日の昼食になった。同行の看護婦さんに食べない方がよいと言われたが、これしか食べる物がなかったのであればしかたない。

ガムテープで建物に紙がはりつけられていた。「社長さんをはじめ社員の皆様、飲み水をありがとうございました。水が出るようになりました。……町内一同」と書かれていた。救われる思いがした。多くのボランティアが活動していた。他人事には無関心な人が多いと言われる現代、これだけの多くの人達が他人のために活動している。

陰徳をつむという言葉がある。人の見ている所で善行を行うことは誰にでもできる。人の見ていない所で善行を行うことが大切であるということだ。報酬を求めず名声も望まず、人のために手を差し延べることでできる人がこれだけ大勢いることが、心を暖かくしてくれた。

いずれはボランティアも引き上げていくことだろう。これからは自分達で、全てを行わなければならないこの人達のことを考えると、思わず「頑張ってください」と言わずにはおられない気持ちで一杯である。

第十三班

一、平成七年二月二十五日十三時〇〇分

二月二十八日十三時〇〇分

二、診療班合計 八人

施設名 職名
岡山 医師

氏名
塩出 純二
戸田耕太郎

上村 雅之
片尾 容子
柿本 智子
徳森 美香
臨床検査技師 木村 泰治
臨床工学技士 千田 茂樹
三、取扱い患者数合計 九九人
内 訳

定点での診療 真野小 五〇人
夢野台高 二八人
巡回診療 二一人

四、巡回場所 合計七カ所

三ツ星ベルト体育館
真野東集会所
真野幼稚園
東尻池公園
真野市住集会所
真野集会所
東尻池老人いこいの家
五、活動概要

岡山・臨床工学技士

千田 茂樹

済生会診療班として最後の派遣となる第十三診療班は、すべて岡山済生会総合病院のスタッフ八名、戸田医師（外科）、塩出医師（内科）、上村医師（内科）、片尾看護婦、徳

森看護婦、柿本看護婦、調整員として木村臨床検査技師、臨床工学技士の千田で構成された。調整員二名は、院内にて事前に、現地状況報告や活動内容、および診療終了後の作業内容等の指示を受けた。

阪神大震災後一カ月以上経ち、JR各線は徐々に復旧してきた。われわれは、平成七年二月二十五日（土）、午前九時二十分JR岡山駅を新幹線にて出発、姫路にて山陽本線に乗り換え、午後一時ごろ兵庫駅到着。途中加古川付近からだんだんとビニールシートをかぶった住宅が出現しはじめ、私たちの口数も徐々に少なくなつてゆく。そして長田駅周辺は想像以上の被害でわれわれは絶句。ついに被災地にやつて来たんだと身をひきしめた。

現地到着後診療班は、市立真野小学校と県立夢野台高校に分かれ、申し送り後、診療活動を開始した。県立夢野台高校の診療は、医師一名、看護婦一名、調整員一名と、病院が被災し建て替えの決まっている神戸市立西市民病院の看護婦一、二名が応援に来てくれるので、計四、五名で行った。診療室は、避難場所にもなっている体育館の舞台横の元バスケットボール部の部屋である。この避難所には二百七十名程が収容されているらしいが、診療時間の九時から五時までの間には、まばらにしか人はおらず、せいぜい五十人くらい居るだけだ。皆、仕事や自宅の復旧に出ているらしい。それに診療室は体育館スチージ横にあるためか、訪れる人は一日十名前後であ

る。そこで、医師と相談し、午前中一回と午後一回の回診を行うことにした。体育館は天井が高く、日当たりも悪いので非常に寒いところである。人が住むにはあまり適していない。うがい薬を置いたり、マスクを配ったりしてカゼの予防を行っていたが、やはり診察では感冒が最も多かった。

阪神大震災発生後一カ月以上が経ち、避難所周辺の医療事情も、発生直後からは、かなり変わってきている。長田区内の医療機関は、診療を再開しはじめている。震災で倒壊した西市民病院も、長田区役所にて、一部科を除いて外来診療を再開し、不便ながら被災者のためにできる限りの処置を行っている。三月一日からは、長田区内の病院が輪番で二十四時間の診療体制をとることになった。

薬品・衛生材料は、避難所の診療室に十分の量が用意されており、在庫に困ることはほとんどなかった。そのため、長田保健所に足を運ぶ機会は、二回程であちこち走り回ることとはあまりなかった。保健所でのミーティングでは、全国から駆けつけた医療救護チームの代表が出席し、現場の状況を報告した。まだ、収容人数が千人を超える避難所もあり、そこでの診療活動は、多くの問題点があるようである。このミーティングでの話の中心は、精神科医の必要性ということだ。各救護班が精神科医による被災者の心のケアを必要としている。事実、われわれの接した被災者の中にも、突然の震災で、自分の家と家族を失い、

一人になってしまい、一日中呆然としている方がおられた。震災で全てを失ってしまった方々の心の傷は一カ月ほどで癒えるはずはなく、今後長期的な精神的ケアが必要である。

第十三診療班は、済生会医療救護チームとして最後の派遣となった。三月一日以後は、京都市民病院の診療班により、夢野台高校では午前十時から十一時三十分までの巡回診療、真野小学校では午後一時から二時三十分までの巡回診療に変更になった。このことを、避難所の責任者に伝えると、「先生に居てもらいたい。」「診療時間が短くなって十分に診てもらえるのか。」と、非常に不安そうであった。

実際には、一日の受診者は十数名程度であり、重症者はいないので、午前九時から午後五時までの診療は必要ではないと思えるのだが、大地震後、不安ばかりの中で生活している被災者の中で、医療班が身近に居ることで、医療面に関しては安心していられたのだ。しかし、今後はまた精神的ストレスが増してしまふと避難所の責任者は訴えた。

大地震後一カ月以上経つての派遣だったが、町全体が想像を絶する大地震の悲惨な光景を残していた。復興にはかなりの期間が必要だと思われるが、多くの被災者やボランティアの方々が長時間協力し合い復興作業を行っている姿を目の当たりにし、今後の人間社会のあり方を改めて考えさせられた。そして、被災者の心にあいた大きな穴を埋めてゆく心の

ケアがこれから何より大切なことであると痛感した。



神戸新港に接岸した済生丸 (1.19)



真野小学校前

えると効率的な活動が行えたものと思う。

泉尾班

一、平成七年一月二十四日十時四十分

十七時〇〇分

一月二十五日十一時〇〇分

十七時〇〇分

二、診療班合計 十三人

施設名	職名	氏名
泉尾	副院長	中島 道郎
	医員（整形）	田村 友彦
	（内科）	高折 洋
	（整形）	高橋 豊
	（小児）	蓮井 正史
	看護婦長	宮城 タケ
	看護婦	渡辺 茂美
		尾崎 章子
		西野 順子
	薬局長	上野 達也
	事務次長	高橋 克明
	事務係長	山本 忠和
	事務員	桑島 勲

三、取扱い患者数合計 八〇人

四、巡回場所 合計二カ所

神戸市東灘体育館

神戸市立瀬戸保育園

五、活動概要

泉尾・事務次長
高橋 克明

平成七年一月二十四日（火）、午前九時過ぎに病院救急車で泉尾病院出発、同十時四十分頃、神戸市東灘区役所前到着。日没まで東灘体育館と隣接する市立瀬戸保育園で診療活動を行った。チームは中島副院長（内科）、田村医師（整形外科）、宮城婦長、尾崎看護婦、上野薬局長、高橋事務次長、桑島事務員で構成した。

今回の診療活動での反省点としてはやはり初動がかなり遅れたのではないかと思う。避難所の責任者の方と話をして皆さんわれわれに対し感謝をしていただいているが「今ごろ来て」というニュアンスを感じたのはこちらの僻みだけではないと思った。

そして遅くなりついでに一日だけでも事前調査を行い設営を行う先遣班を用意すべきであったと考える。その場合、交渉を担当する事務方、現地の医療事情とニーズを聞く医師、看護婦各一名程度で情報収集を第一とし、診療活動は応急的なものに限ってもその後を考

当日は東灘保健所の亀田係長と現地で接触、どこ避難所に診療班が行っているかを確認、泉尾病院班の行き先を決定した。しかし、大震災の後の混沌とした状況では保健所といえども関係情報を完全に掌握しているわけではない。現場では誰が指揮しているのか、誰が権限を持っているのか、外部のものには全くわからない。そのことを非難しても始まらない。情報はこちらが引き出すつもりでかからねばならない。その場で行き先を即決、直ちに行動を開始する。躊躇する暇はない。

薬品・衛生材料などは保健所にかかりのもの

のがデボされている。関係者は名乗りさえすれば自由に入出りできる。担当の薬剤師が一応居るが、医薬品の選別はこちらのチームに薬剤師が居ると、選択すべき医薬品の選定のスピードが断然違う。また患者が以前の医療機関で投与されていた薬品名を判断する必要に迫られたとき、あるいは高齢者への服薬指導等、薬剤師の専門性は遺憾なく発揮された。事務職員はコーディネーターとして現場で機敏に活動しなければならぬ。避難所の責任者の許可を取り付けた後は、中に入っている、被災者の皆さんにこちらから積極的に声をかけていく。声をかけないと自分から症状を訴えてくる人はまずいない。大地震のショックで半ば茫然自失。自分でそういう自分の状態に気づいていない人が多い。

医師一名、看護婦一名、事務一名で診療

に当たるが、内科系の医師には内科担当の看護婦で、外科系の医師には外科担当の看護婦でコンビを組む。事務はカルテを筆記する。カルテは初診日、避難場所名、患者の氏名・性別・住所・主訴・前医氏名とその診断と処方、薬物アレルギーの有無、診断名・所見・処方内容・処置内容、引継事項、初診時医師の氏名（サイン）、受診月日一覧が記入できるようにになっている簡易方式のものを利用した。

当初、保健所からの連絡では外傷は少ないという説明であったが、現場では必ずしもそうではなく、火傷、切り傷、擦過傷、打撲、捻挫、骨折等の症例が相当見受けられた。そのほか、点眼薬の投与が意外に多かった。火災の煙や、建物倒壊時の塵埃による眼疾患もあるから、当然である。従って、専門医が行けばそれに応じて患者が名乗りを上げてくると思われる。

一月二十四日の診察は東灘体育館で二十名、瀬戸保育園で三十名であった。この日の教訓をまとめておきたい。

一、情報は動いて握め。待っていても誰も

中津班

一、平成七年一月二十六日午前十時三十分

～一月二十八日午前十時三十分

二、診療班合計 一〇人

他に救護班派遣者並に診療材料、物質搬

教えてくれない。

二、ドクターは専門科目に関わらず、何でも診てやろうの精神で。

三、薬剤師は必ずチームに参加せよ。

四、救護班はお客ではない。移動手段、食料、飲料水は自前で調達。

五、まず、現場に行くべし。そして、人々に声をかける。やることは足下から湧いてくる。

六、できれば避難所の人たち全員を診察すべきだ。どんな疾患を抱えているかもしれない。

この稿を終わるにあたって、被災のためにお亡くなりになった方々のご冥福をお祈りするとともに、いままも現地で不眠不休の復旧作業に携わっておられる関係者各位のご健闘をお祈り致します。

△追記▽一月二十五日にも内科医、小児科医、整形外科医各一名、看護婦二名、薬剤師一名、事務系二名の医療チームを派遣、前日と同じ場所で三十名の患者を診察した。

送のため救急車運転手延三名派遣（二十六日～二十八日）

施設名 職名 氏名
中津 医師 山尾 一磨

芥川 茂
看護婦 西谷ひろ子

薬剤師 江口美也子

事務 桑井 幸雄

医師 鈴木 辰美

看護婦 都築 大裕

橋本 英隆

看護婦 藤田 陽子

富田川佳子

三、取扱い患者数合計 四十五人
四、巡回場所 合計三カ所

柔剣道場、

講堂（灘高校内）

近隣広場のテント村

五、活動概要

中津・内科医師

芥川 茂

平成七年一月二十五日の夕刻より、神戸市特に東灘区の状態を聞くが、十分な状況把握ができておらず、混乱の中、われわれは、医師二名・看護婦二名・薬剤師一名・事務員一名にて翌朝より当院の救急車にて現地向かった。現地への道のりはどの道も渋滞し、救急車両が数珠つなぎの状態であった。被害の大きさは聞いていたが、予想以上にいたる所で家屋が倒壊し、阪神大震災の被害の大きさ

をまのあたりにした。東灘保健所経由で、二十六日正午灘高に到着。一見ひとけはなく、落ちついていてる感もあったが、緊張感は伝わってきたし、かなりの回数で余震があり危機感は常にあった。

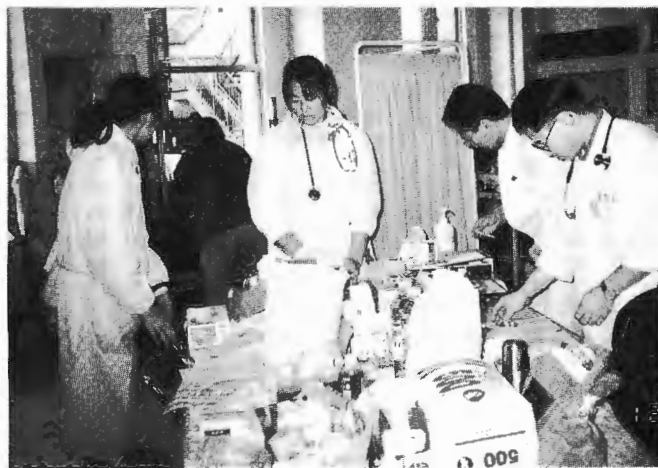
灘高の救護所に到着すると、前の医師が診療されており話を聞くと、医療上はやや落ちついてきているとのこと、やや安心した。われわれは、震災からの不安で睡眠不足の方が多く、睡眠剤を希望されとて考え、病院からも何種類か持参していたが、その医師が言われるには「ぐっすり眠りたいが、眠剤を飲むと再度地震があったときに目覚められないという不安があるから、飲みたくない。」という訴えが多いとのことであり、現地に避難されている方々の気持ち、痛々しく伝わってくるのを感じた。部屋の中では、真ん中の机の上に雑然と薬が山積みになっており、その薬をまず把握し、整理したところで体育館を回診することにした。

「済生会中津病院のものです、症状のある方はおっしゃって下さい。」といいながらそれぞれの方の話を聞いて回った。外傷のあるかたは、打ち身程度でその他の人は高次病院に移られているものを思われた。環境に問題があつてか、上気道炎が散見され、それぞれに感冒薬の処方を行い、その後は保健室で待機した。

夕刻になると外にでている人々がばらばら帰ってき、薬もそのつど処方していった。上

気道炎に対しては、ほぼ薬は足りていた。高熱を出している人もおり、保健所のベッドで経過観察もした。夜間は、特に起こされず翌朝を迎え、一日で約三十人の患者の診察をした。

神戸市全体の状況を聞くと、われわれが行った時点ではかなりの医療班が現地に入っていて、過剰状態という話も聞かれた。ただ、避難所などの施設の医療体制は一応整っていたようであるが、それ以外の倒壊した家屋などに向う医師は少なかったようである。現地で一番感じたのは、やむを得ないこととも思うが、情報の収集・分析が十分にできてお



1/26～27のメンバー

らず、医療の効率が悪いことである。灘高以外の避難所にも行ってほしいといわれ、出向いたところすでに他の医療班が診療済みであったこともあった。

他区域では、朝夕にカンファレンスを行い人員を派遣していたそうであるが、そのようなシステムは今後の教訓として確保するべきと考える。また、医師を派遣する病院、患者を受け入れる病院はある程度区別しておく必要性を感じた。

今回の被災のためにお亡くなりになられた方々の冥福をお祈りするとともに、復旧作業に携わっておられる関係者の方々のご健闘をお祈りする。

中津・内科医師

都築 大祐

われわれは地震から約十日後、中津病院からの診療救護班として神戸市東灘区の灘高校内に設置された済生会の救護所に向かった。済生会中津病院の救急車にて朝、病院を出発しその道すがら、多くのものに目をみはった。車は国道二号線を西へ向かい、渋滞の中をやがて武庫川へと至った。武庫川をこえるとそれまでの光景とちがい、いたるところで崩壊した家屋、傾いたビルがみられた。渋滞はひどいもので、他の救急車、自衛隊車両等の救

急車両のサイレンやマイクの声が聞こえているにもかかわらず、少しも脇に寄せて道をゆずろうとしない車が多いのに非常に腹立たしい思いをした。現地に着いたのち、われわれ第二次班のメンバーである医師二名・看護婦二名は、すでに前日より来ていた一次班から申し送りを受けた。灘高校は周辺地域の住民の方の避難所として約二百名の方が生活していた。食料および水補給については、自衛隊の方々がほとんど行い、われわれの食べる三食の食事を作るのも自衛隊の方々と、その日の夕食に出たカレーライスは非常においしかったのを覚えている。

診療所は学校の保健室に設置され、簡単な診察机および数台のベッドが置かれていた。学校で生活している被災者の方々は、主にかげ、頭痛、不眠等でわれわれのところへ来られた。周辺地域の方々もやはり来られたが、診療所の場所がわかりにくかったのか、数はそれほど多くなかった。

われわれは到着後しばらく四人態勢で診察所にて診察したが、後にドクター一人・ナース一人を一チームとし、二手にわかれ、一方は診療所にて待機、一方は周辺地域へ向かい、巡回することとなった。事前に、その当時の被災地の問題として、精神障害等が以前からあり家にとじこもっていた方々が、地震後も家から出ようとせず、倒壊の恐れのある家屋にいまだいる可能性あり、住民の呼びかけになかなか応じないが、医療関係者の方から呼

びかけると避難に同意されることがあるとのこと、もうしそういったケースがあれば協力してほしいと要請があったからだ。ただ巡回し、地域内での集会所等、地域を把握している方々に聞いても、そういったことはわからないとのことだった。

救護班の薬品としては、中津病院から、点滴・抗生剤・消毒薬・解熱鎮痛剤他、診療にあたって困ることなくそろっていた。患者さんの数自体はそれほど多くなかったが、被災によるストレス等により不眠等の訴えが多かった。多くの方々が、われわれの診察を受けることにより、かなり安心され避難所へもどられるのがわかった。地震からしばらくたっており、急性期の疾患をみることは少なかったが、避難所内に救護所があるといった安心感を住民に与えることができ、意義深かったと思った。

中津・内科医師

山尾 一磨

平成の大地震の救援活動に従事し気がついたことは、政府の救援活動の遅さが目立っていたことであり、私どもは当初兵庫東灘区の救護チームに参加し東灘区にある灘高校を拠点とした救護活動を開始した。私たちが救護活動に参加した時期が遅かったためか、現

地に向かう車窓から見える風景は震災後の倒壊した建物の撤去作業も始まっており、震災当初のテレビ放映のような状況はなくなっていた。しかし避難所に関しては衛生状態が非常に悪く、感冒（流行性感冒）が蔓延しておりそれが誘因になっていのか高齢者の肺炎患者の発症頻度の高いこと、またトイレや飲料水の衛生管理の難しさのためか急性胃腸炎が蔓延していた。

更に高度の医療を必要とする患者であつても基幹病院は満床状態が続いており、避難所内での応急処置しかできずの状態であつた。その状態に輪をかけて医薬品以外の食料物資の供給が乏しくなっており、更なる健康状態の悪化を招いているようであつた。私どもの拠点に関しては自衛隊の炊き出し部隊等が駐屯されており幸いにも食料にはこと欠かなかったが、周囲の状況はやはり食糧の配給が滞っていると思われた。

また、余震による精神的不安が私どもが訪れたときにはピークに達していたようで、若年者においても不眠による過労の状況がもし出されていた。われわれは精神的看護を中心に避難所を回診し、避難患者に対し積極的に治療を受けること、衛生面に留意することを啓蒙してまわった。

各救護所の連携に関しては保健所が統括、指揮を行っており、各救護所の状況把握に努めていても、医療チームの多さと新規チームの参加の多さにて十分な指揮ができない状況

があり各救護所の要望がすれ違いになって、一連の救護活動の難しさをかもし出していた。われわれに関しても当初各チームの責任下にて医療活動を行うことを命じられるも、近隣の救護所と連携がとれず単独行動に偏ってしまつた。

このかたよりによつて各地域に小規模ながら診療活動の行き届かなかつた地域が存在していたと考えられ、救護活動においては診療団という枠を越えて各個人の医師としての裁

富田林班

一、平成七年一月二十八日午前十時〇〇分

一月三十日午前十時三十分

二、診療班合計延十四人

施設名	職名	氏名
富田林	医師	中神 一雄
		森下 裕
		中野 隆仁
		上島 成也
		門脇 照雄
		宮崎 隆光
		山口 和美
		石原 富美
		中神 一雄
		原 弘道
		西川満次郎
		西本己保子
		中島貴美子

三、取扱い患者数合計 四四人
内訳 横田 愛子

定点での診療 二五人
巡回診療 一九人

四、巡回場所 一カ所

ポートアイランド港島中学校

五、活動概要

富田林・看護婦

横田 愛子

（機関誌「済生（平成七年三月）」より）

兵庫県南部地震が発生した一月十七日は日勤でした。仕事の合間に入ってくるニュースを聞くたびに何百人単位で増え続ける犠牲者

の数に驚き、被害の大きさに驚くばかりでした。

私が救護班として現地の灘高校の避難所に行ったのは震災より十二日目でした。

灘高に着くと急きょ一緒に来た同僚と別れ、中央区の区役所のほうに行くことになりました。灘高の避難所には医療を必要としている人が少なく、前日は十人位だったそうで他の地区で医療を必要としているところを捜しに行ったのです。

中央区の区役所の五階にある保健所が中心となり、避難所の医療チームが動いていました。院長が救護班として二十四時間体制で応援できますと保健所長に告げると、「今は震災発生直後より駆け付けて下さっている医療チームが続いていますのでとりあえずは足りています。待機していただいて、出動の要請があった時お願いしたい」とのことでした。

区役所の一階には救護班があり薬局室にはたくさん薬品、衛生材料が届けられていて避難所から薬の依頼があれば単車（ボランティアの人）ですぐ届けてくれる。外の道路は救援物資を運ぶ自動車が行き来し、駐車場？では物資の仕分けをしていて、皆忙しそうでした。一時間くらいして、「ポートアイランドの港島中学校に行っていたきたい」という自治体の要請で救護班を依頼されました。そこで、さっそく現地向かいました。

学校の保健室に着いたのは午後一時前でした。私たちが行くと聞いて、急いでそうじを

して下さったようでした。

自動車から荷物を降ろし診療の準備ができたところ自治体の呼びかけで夕方までに二十人くらいのかたが診療にみえました。感冒、熱発のかたがほとんどでした。中には開業医不在のため薬をもらうことができず、悪くなったときのために最後の一つを服用せずに大事に持っている人もいました。すぐ近くに神戸中央市民病院がありますが、風邪のような軽症の場合は行きにくく、また待ち時間が長いのでこちらへ来られたという人もいました。家屋の崩壊の少なかったこの地区では体育館に二十人くらい、武道場に十五人くらいが避難生活をしていました。学校では貯水タンクに水補給で水洗トイレが使用できました。飲料水は救援物資でたくさん届いていました。灘高とか区役所では炊き出しの光景が見られ、食糧もたくさん届いていましたがこちらでは食糧は届いている様子はなかったように思いました。

震災直後は避難所にいたが、解除となって帰った一人暮らしの老人が、何度もある余震で心臓麻痺で亡くなったと、そういうことが

あったので夜は皆集会所に避難してもらっているという。集会所に行ってみたいと思いい、どこにあるのかたずねると、集会所はいくつもあり、歩いて回るのは大変ですよといわれました。

保健室を訪れる人もいたので出かけられず集会所には行けませんでした。報道では医療者が不足しているといっているが、現地に行くと足りているという。下痢の人が多いと聞いて行くと反対に便秘の人が多かった（灘高ではトイレの不自由なため）被災現場での看護活動をしたと思うのに、いつもの外来業務と同じようでそれほど緊迫感はありませんでした。

震災の程度、交通事情、生活事情で援助方法も変えていく必要があると思いました。これから訪れるのを待つのではなく、避難所に出かけて看護活動ができたらいと思いましたが。

一月三十日昼過ぎ交代が来て引き継ぎの終わった後、液状化現象のあとの砂ぼりの中を歩いて船乗り場まで行き、天保山経由で大阪に帰りました。

吹田班

一、平成七年一月三十日十時三十分

二月一日十時三十分

二、診療班合計 延十二人
施設名 職名 氏名

吹田

医師	原 章倫
看護婦	有園あきえ
事務	宮部 剛実
医師	中西 源和

中央区ポートアイランド
五、活動概要

吹田・内科医長

板橋 司

三、取扱い患者数合計 七二人

内訳

定点での診療（灘高等） 七二人

看護婦	安長 政代
事務	村田 睦彦
医師	末廣 慎悟
事務	山野 正則
医師	北野 淳一
看護婦	中村 幸子
事務	樋口 幸二

吹田班

一、平成七年一月三十日十時三十分

～二月一日十時三十分

二、診療班合計 延十二人

施設名	職名	氏名
吹田	医師	板橋 司
	看護婦	辻野美代子
	事務	市来 敏昌
	医師	朴 孝憲
	看護婦	木下奈緒子
	医師	中條 忍
	事務	山下 教夫
	医師	森 久也
	看護婦	吉田 成子

三、取扱い患者数合計 二一人

内訳

定点での診療 二一人

四、巡回場所

午前十時に東灘区・灘高に到着。ここでスタッフ六人が二班にわかれ、うち三人がポートアイランドにある港島中学での診療にむかうこととなった。ここには前日より富田林病院のスタッフが当直しているとのことと、とりあえず必要な医薬品・物品を病院の救急車につめあわただしく出発した。通常ならば三十分位のコースであろうか、灘高から国道四三号線を通り三宮を経てポートアイランドへ至る道筋である。

震災後二週間を経過していたが、移動には二時間程要した。既報のごとく被害の甚大な地域であり、目につく民家は大半が全半壊し細い路地のなかには電柱や倒れた家屋でふさがれ奥の見渡せないものも多く、四三号線へ出るのも迂回したりガレキを避けコースを変えたりと大変であった。四三号線でも最外側の緊急車輛専用レーンを赤灯を回転させながら通行したものの、三宮周辺で大渋滞に巻き込まれた。救援車輛、トラック、バスなど他府県ナンバーの車やバイクでごったがえしノロノロ運転であった。倒壊した例の阪神高速



神戸市立港島中学校正門



灘高保健室内で（茨木班）

神戸線も大半の橋脚にはすでに二次倒壊防止用の補強パイプ、鉄柵が大量にまかれ、その下をこわごわ走ったが異様な雰囲気であった。ポートピア大橋も前後で段差がつき片側走行で徐行となりやつの思いでお昼頃に現地へ入った。ポートアイランドは外観上高層建築も道路も著変なく、港島中学も一部キレツや構内道路の段差をのぞけば無事であった。しかし、断水、物資の供給ストップと実際は陸の孤島であった。

医療機関は唯一中央市民病院が機能、島内より大勢の患者であふれかぜ程度では長時間待たされなかつたこと

である。この点仮設診療所の存在意義は大きかつたはずであるが、実際には宣伝不足のためか二十数名の受診しなかつたあまり有意義とはいえなかつたようである。

また、現地での診療の必要性からみると高血圧・糖尿病などの慢性疾患が圧倒的に多くその診療の継続が困難な患者さんが何人か受診された。ここで活躍したのがボランティアである。電話をする三宮の保健センターから必要物品をバイクにつみ二十〜三十分ではこんでくれ非常に助かつた。今回われわれは診療体制をとるにあたり医薬品・現地での食事等いろいろ用意してきたが、情報不足もありそのギャップの大きかつたことを痛感させられた。例えば、患者さん、中学校の職員の方などに聞くと必要なものは『水』とのことであつた。中学校のトイレは何かプールの水を通し水洗が可能であつたが、一般家庭では無理であつた。また、調整をしようと思つても電気のみ通っているものの材料・水がない。

この点でみそ汁やインスタントラーメン・ミネラルウォーターを持参したのが正解であ

茨木班

一、平成七年二月一日十時三十分

二月三日十時三十分

二、診療班合計 七人

施設名 職名 氏名

るとわかり、これらを中学校の職員室に寄付させていただき、たいそうよろこばれたのが印象的であつた。しかしポートアイランドは東灘・長田地区などと比し極めて恵まれた地区であつたのも事実である。住民は住居を失わず、中学の体育館にも避難している人はいたがわずかで、それも一人ぐらしの不安な老人が数名だけであつた。さらに校庭は神戸市内への自衛隊の前進基地、拠点となつており一面に黒い巨大なテントがはりめぐらされ給水車・トラック・隊員らがあわただしく動きまわつていた。

こういうような状況のためか住民は他地区の人々に比し平静を保つており受診された患者さんも元気な方々が多かつた。ちょうどわれわれの到着した日から中学校も授業を再開したとのことであつた。保健室には生徒達の元気に走りまわる声が聞こえわれわれも勇気づけられた。

たつた二日間で作務を終了したが、彼らのふだんと変わらぬ姿を見ながらわれわれは港島中学を後にしフェリーにて関西空港経由で大阪へ戻つた。

茨木 医師

布出 泰紀

看護婦

山田 裕久

田嶋 雅弥

土居富美子

薬剤師 湯浅 英治
事務員 土木 弘之
事務員 樋口 徳之
三、取扱い患者数合計 七九人
四、活動概要

茨木・内科部長

布出 泰紀

(1) 出発準備

一月二十七日済生会現地対策本部から、震災被災地への要員派遣の要請が本院にあり、医師二名、看護婦二名、薬剤師一名が必要とされ希望者を募った。その結果、内科医（私）、山田産婦人科医、土居看護婦（小児科）、田嶋看護婦（外科）、湯浅薬剤師計五名が現得要員として、また機材運搬および連絡要員として、土本事務員、樋口事務員、合計七名が派遣要員として決定し、一月三十日に第一回のミーティングを開いた。

院長から派遣に至る経緯と、不測の事態における補償の説明を聞いた後、活動方法や内容の各論について検討した。この後、問題点として、派遣職員の危険地域での特殊勤務手当について事前に設定しておく必要があると考えられたが、出発の時間が迫っていたため事後の課題として保留した。

危機管理が必要とされる現在では、済生会

本部が総括し詳細な危機管理のガイドラインを決めておく必要があるだろう。

一月三十日、各人は必要な生活用品、薬剤、衛生材料をリストアップした。一月三十一日、役割分担と携行物品確認のための最後のミーティングをした。どのような現地での状況なのか把握が困難であり、携帯品はあらゆる状況を考えるため、人間の心理として多種多量になる傾向がある。この点については基本的な物品を限定し、現場で工夫を凝らすようにすればよいと考える。いかにしても病院と同じ機能と治療は望べくもないのである。

(2) 移動

二月一日コーディネーター役の事務員二名は二台の病院車に必要な物品を搭載して早朝に病院を出発した。普段は一時間弱で到着できる距離であるが、四時間十分を要した。

診療要員五名は阪神電車で青木駅まで乗車した。青木駅より以西は路線が分断されているため不通であり以後は徒歩である。往来は地震前よりかなり混雑していた。おそらく被災者の安否を心配する肉親や、数々の援助グループなど外部からの流入人口で、かなり膨らんでいるようだ。歩道を歩くと倒壊した家屋や、傾いたビル真横を歩くことになり、危険であるため車道を歩いた。

(3) 活動現地での居住

灘高校の保健室を学校側の好意で使用させてもらっていた。済生会グループ五病院がわれわれに先行しており、病院が持参した飲食

品や薬剤が散乱していた。

この状況では薬剤を有効に活用できないため湯浅薬剤師にご苦勞願って丸一日かけて区分けして整理してもらった。加えて居住環境も整理することにした。

養護用のベッド二台と診療ベッドを並べて、間に衝立を間仕切りとして夜間のプライバシーを確保した。電気系統はすでに復旧しており、われわれの到着前日に水道も復旧したのは幸運であった。

電気もガスも水道も普段は空気のような存在であるが、なくなつて初めてその重要性に気づくものである。

(4) 活動内容

四十八時間の同一要員による駐在はわれわれが初めてであつたようだ。できることなら連続滞在が望ましいと思う。このことは現地の状況をより詳しく把握できるし、被災者と交流できるチャンスも多くなる。実際、夜に焚き火を囲みながら水割りをご馳走になり談話した。この縁で翌日からボランティアの人が診察室に毎食ルームサービスをしてくれることになった。

受診総数は二日間で七十九名、手持ちの薬剤で殆ど対応可能であつた。

(5) 総括

対象が不確かなことには不安が生ずる。被災者にも救護者にも通じることであるが、情報の不足は不安や憶測を生じさせる。この情報社会の現代であるにもかかわらず、危機に

際してはあまりにも脆かった。この点について今後ますます危機管理の必要性を痛感するのである。

今回の活動が無事に終わったことを喜び、今では懐かしくさえある。行動を共にした六人の仲間も、同様の感情を抱いていることで

奈良班

一、平成七年二月三十日十時三十分～

二月五日十時〇〇分

二、診療班合計 十二人

施設名	職名	氏名
奈良 院長		島田健太郎
内科医長		鴻池 義純
整形外科医員		山内 潤
看護婦		稲葉ひろみ
薬剤師		渋谷由紀子
医事課長		松井 孝安
外科医員		平井 康陽
小児科医員		長尾美津男
看護婦		曾我美純子
総務課長		藤井祐美子
		辻本 今子
		日高 聡

三、取扱い患者数合計 七十七人

内訳

定点での診療 七三人

巡回診療 四人

四、巡回場所 一カ所

あろう。

今回の参加を通じて、自分の経験値を少しでも高めることができたと思うし、曲がりなりにも被災地の人々に、少しでも貢献できたとしたら望外の幸せである。

甲南本通会館
五、活動概要

奈良・総務課長

日高 聡

連休明けの早朝、誰がこの大地震を予測し得たであろうか。

被災地へ同行し、実際に現場を見たこの経験は、一生忘れることができない程強く心に残るものであった。

震災のあった一月十七日、当院でもエレベーター二基が地震のため停止し、その復旧にメンテナンズ会社に連絡するが電話は通じず、自己復旧で何とか動かすことができた。

この週、院長よりこの震災のため、中津病院に済生会災害対策本部を設置し今後、救済活動に参加することがあると知らされていた。一月二十日、臨時会議を開き二月三日から五

日の二日間、奈良病院による神戸市東灘区東灘保健所管内の医療支援の日程などを知らされた。人員は医師二名、看護婦二名、事務員一名である。

当院は、二班に分けて行くことになり人選については、医師外科系二名、内科系二名、看護婦四名、事務員二名、また薬剤師が必要ということがわかり一名追加した。一月二十四日先の人選により決定した職員が集まり、場所の確認、現場の状況等を確認しあった。

被災地は、地震発生後かなり日数も経っている、最新の情報が必要であり、直前班である茨木病院からのファックスは大変有難かった。

二月三日午前五時、平井医事課長と松井薬剤師が灘高校に向け、救急車に医薬品・飲料水等を積んで出発。午前八時到着。院長を含む五名は、阪神梅田駅から青木駅まで行き、徒歩約十五分の灘高保健室を目指す。

テレビ、新聞等である程度被害は知っていたが、青木駅ホームに降り立ち、周りを見たときは啞然とした。まるで記録映画で観た空襲の跡ではないか。改札を出ると、いたる所で家は崩壊している。傾いている。横にずれている。マンションも、アパートも傾き垂直と水平が何か変だ。

診療所となっている灘高保健室は、アングル棚に薬品も整頓され、今まで来られた方々の思いが手に取るようにわかった。対策本部からも、電気ポット、電磁調理器、レトルト

食品が、つぎつぎ搬送され食住に関しては何も問題はなかった。

一班と引き継ぎ後、バラバラと患者さんが来られたが、以前かかり付けの医院の薬を出し同じ物があるかと、心細い視線でドクターを見ている。風邪をひいている方も多いが、この避難所の環境では、なかなか治らないと思われる。小児科ドクターも同行したが、乳児、幼児等は少なくやはり老人の方が多かった。

震災後、十八日目の現実、昼は倒壊、半壊した家の片付けに追われ、夜避難所に戻る繰り返しで、診療に行く時間もないのではな



保健室にてミーティング

いか。

この時期、精神的苦痛から、慢性病の悪化や偏った食事による不調、避難所での寒さによる風邪等、発生直後とは様子がかわっている。このことは、巡回した甲南本通会館でも感じた。

この震災後、ボランティア元年と言われている。事実、小学生や中高校生が水汲み、まき割り、炊き出しなど頑張っている姿を見ると、この国の若者も捨てたものではないと思

った。
今必要なのはこういった活動であり、それに医療が加わることにより少しでも被災者の精神的・肉体的苦痛を、取り除くことができればよいと思う。被災者にとって今何が求められるかという中では、医療はほんの一握りのことでしかないが、その中で積極的に行動しようものでなくてはならない。

「被災者の方々が、多少無理と考えるようなことを言った場合でも、言ってもらわないとその気持ちや欲求がわからないので、ほとんどん言ってほしいのです。」とはボランティア

隊長の言葉であった。

医療もこちらから積極的に声をかけていかないことには、疾患を持っている患者さんを見逃がしてしまうことになる。そこに診療班としての責務がある。

今回の支援活動で反省する点とすれば、引き続きに際し施設間の撤退と設営が重なり時間および準備に手間取った。

薬品、物品等がある程度揃う状況をいち早く設置できれば、診療班のスタッフのみ交替することが可能だったのではないかと。当院は、二班交替制で行ったが一班だけのほうが、引き続きのロス、現場の把握など効率がよいと思われた。

この大震災は、被災された方々には大変残念でお気の毒であり、今後この教訓が生かされ行政、医療、私的団体等が速やかに対処されることを願わずにはいられない。

最後に、被災されお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに今なお、避難所や仮設住宅にお住まいの方々のご健勝をお祈りいたします。

滋賀班

一、平成七年二月五日十時〇〇分

二月七日十時〇〇分

二、診療班合計 六人

施設名	職名	氏名
滋賀	内科医師	加藤 一晴

外科医師	東田 武
看護婦	沖田 文子
准看護婦	溝口 寿代
薬剤師	松尾 泰也
事務	日置 康志

三、取扱い患者数合計 八〇人

内訳

定点での診療

六八人

巡回診療

十二人

四、巡回場所 一カ所

甲南本通会館

五、活動概要

滋賀・医事課主事

日置 康志

派遣に際しての院内調整

スタッフとして医師二名（外科医・内科医）、看護婦二名（病棟婦長・救急センター看護婦）薬剤師と事務員一名ずつの計六名が選ばれた。事前の情報で食料・水とも豊富にあるとのことであったが、当院としても一応の準備をした。薬剤については薬剤師が直接連絡を取り、不足分・必要分を取り揃えた。

・到着までの交通事情

利用交通機関として、ワゴン車一台と鉄道（避難所近辺までは復旧済みであった）の二通りに分かれた。道路状況として、かなりの混雑が予測されたので、ワゴン車のほうは早朝に出発、当院から名神高速道路→中国自動車道を経て、神戸市北部から現地向かうルートを使った。結果、全く渋滞に巻き込まれることなく午前六時頃避難所に到着すること

ができた。鉄道利用のスタッフはほぼ定刻に現地に着き、スムーズに前担当班との引継ぎが行えた。

周辺被災地の状況

避難所内には依然一〇〇名程の方々が生活されていたが、人数的にはピーク時の半数程度となっており、診療所での実診療人数も一日に三十名前後で、当初の状況と比較すると、かなり落ち着いてきている印象があった。ライフラインも電気、水道が使える状況にあり、ガスのみが復旧していなかった。自衛隊の救護活動、ボランティア組織の活動等も行われており、当然のことながら倒壊家屋等も、依然手つかずのまま、凄惨とも言える雰囲気漂っていた。

現地での診療班の衣食住事情

食料・飲料水は豊富にあり、当院で準備していたものを使う必要がない程であった。暖房も入っており、不便はなかった。ただ睡眠をとる場所が少し足りず、多少の工夫が必要であったが、それほど問題にならなかった。トイレも水道が復旧していたので、避難所の水洗トイレの使用が可能であった。

巡回診療所、保健所のミーティング状況

当診療所の担当する日程の間には、保健所とのミーティングの機会もたれなかった。巡回診療所としては、滞在した避難所以外に近くの公民館に一カ所、心臓病のお年寄りの方ほか数名の診療を一日に二回内科医師が巡回していた。

引継ぎのエピソード・問題点

初日、最終日両日ともスムーズに行われ、問題点はなかった。

反省事項・教訓

診療所でのカルテが全く不備で、ノートに無造作に記載されているような状態であった。また、診療所自体にも衝立や間仕切り等がなされておらず、全くオープンなままであった。仮設の診療所とはいえ、医師による診療行為が行われる訳であるから、患者のプライバシーや診療内容の記載等にもっと早い段階から配慮がなされるべきではなかったか。

また、不眠を訴える患者に対し、眠剤等が準備されておらず、保健所のほうとしても、抗精神病薬やそれに類する薬品の供給はできないとのことであった。そうした状況への予測のなさ、連絡・引継ぎに粗さがあったように思う。

当院の担当していた時期は、震災より三週間が経過した頃であり、診療の内容等にもそろそろ評価と検討がなされてもよい時期にさしかかっていたような気がする。特に精神的なケアということについて、そろそろ問題になりだしていた頃であった。例えばそのような時期に診療所内における疾病状況等の全体的な調査が行えていれば、よりよい診療活動に結びついていたのではないかという気がする。

持参してよかったもの等

診療所内では、風邪がかなり蔓延している

との情報を聞いていたので、吸入器を持参、

これが結構役にたった。

御所班

一、平成七年二月七日十時三十分

二月九日十時三十分

二、診療班合計 十二人

施設名	職名	氏名
御所	診療部長（医師）	笠松 稔
	医師	藤本 政彦
	薬剤師	上田 俊明
	看護婦主任	津森 栄
	看護婦	山本美恵子
	総務課長	徳田 初夫
	医師	朴 秀一
		八畠 功
	薬剤師主任	森岡 康矩
	看護婦	川田 桂子
	看護婦	坂本 一子
	施設課長	奥 泰司

御所・総務課長

徳田 初夫

この度の阪神大震災は、未曾有の災害をも

たらした。道路の破壊をはじめ、鉄道、港と交通機関は全滅、水道、ガス、電気、通信といったライフラインははずた。木造家屋は叩きつけられたようになり、ビルやマンションにしても、倒壊寸前のひび割れ、その潰れた下敷きや、火災のために尊い命が五千五百余人も奪われてしまった。

私達病院に勤務する医療人として、「少しでも役に立たなくてはいけない」、そんな思いの折り、済生会の援助活動に参加することになった。季節が厳寒の時だけに診療班としても、準備しなければならない。まず、連絡用に携帯電話を用意、寝袋、リュック、カイロ、身の回りの必要な物を準備することにした。

しかし、リュックや寝袋は、この震災で売れてしまいお店にもない。次はいつ入荷するか解らないのである。二、三軒回ってやっと手に入れることができた。参加するメ

ンバーが決まり医師二名、薬剤師一名、看護婦二名、事務一名の計六名で一泊二日を二班編成する。

出発には、診療用具や薬剤、診療に関する必要な物等のリストを作成準備にかかったが、先の派遣病院や、対策本部からの連絡により、現地の患者等の様子がわかり、派遣の前日には持ち物を減らし、診療材料、薬剤、シーツ、タオル等にした。また、現地で行わなければならない業務内容は列記しチェックする方式を採る。

一班の出発日二月七日、朝六時のテレビニュースで阪神電車が尼崎駅構内で事故とのこと、これは大変なことになった。滋賀県病院からの引き継ぎを受けることになっているが、このままだと現地灘高校へ何時着くかわからない。

対策本部に連絡、高橋課長から中津病院の了解を取り付けて下さり、ご厚意により救急車にて九時二十分対策本部を出発する。サイレンを鳴らし赤色灯、灯火で進行する。国道二号線は数珠繋ぎで進行を妨げられ反対車線を逆行する。緊急用のマークを付けた車、救援物資の車、医療班の車も見受けられるが工事に關する車によって埋められると言う状態で一般の車などとても進行することができない。

尼崎を過ぎる頃から屋根の瓦が落ち倒壊家屋が見受けられる。西に行くにつれこの風景に目を覆い涙の出るのを堪える。救急車のお

三、取扱い患者数合計 六八人

内 訳

定点での診療 五二人

巡回診療 十六人

四、巡回場所 合計二カ所

甲南本通会館 魚崎町

学校内（柔道部室、剣道部室、講堂）

五、活動概要

陰で十時十分灘高校に着き、滋賀県病院に対してお疲れの労を言った後申し送りを受ける。

診療室は、ガスは使用不可、水道は使用可能、飲料水はペットボトルを使用、電気は使用可能、但し使用電力量に注意、エアコン二台使用により暖房は充分、電磁調理器ポットがありレトルト食品等在庫は充分あり食事の心配はない。この場においての診療所としては、環境は充分である。

避難者は、約一五〇人位で講堂、柔道室、剣道室を使用し、グラウンドには車で寝ている人もあり不祥である。避難者には日もたっているからか、明るさを取り戻しつつあるように見える。

巡回場所の甲南大通会館は灘高校より二キロ程離れた所、辺りの民家は生活ができるような家は皆無に等しい。まだそのままの状態の一部で整理している人も見受けられる。避難所は環境が悪く伝えられている通りであるが避難者の方から「有り難うございました」と言われると「元氣を出して頑張ってください」

和歌山班

一、平成七年二月九日十時三十分

二月十日十時三十分

二、診療班合計 六人

施設名 職名 氏名
和歌山 内科医長 坂東 憲生
整形外科医師 大浦 晴夫

い」の言葉しか出なかった。

午後六時から保健所のミーティングに医師と参加、東灘保健所管内に拠点を持つ医療班で部屋一杯になる。現状報告と今後の見通しについての連絡であるが、できる限り二十四時間診療に協力して、今の診療の現状を維持していただきたい意向である。

わが診療班は、震災後二十日程経過しているために避難者に幼い子供達は見受けられず、そのため受診者も二十歳以上の患者である。

当初の診療班に参加下さった病院は大変であったろうと思う。できる限りの確な情報を伝え、次の診療班の資料になるように、今後の災害に向けてマニュアルを作成しておく必要がある。

今回の震災を教訓にして、いち早く診療活動に協力し一人でも多くの被災者に接し尊い命を救うべく前向きに医療に取り組んでいきたい。

最後に被災のために、お亡くなりになったかたがたのご冥福をお祈りする。

薬剤師

澤本 成史

看護婦

松島みな子
河端久美子

事務次長

竹田 正

三、取扱い患者数合計 二七人

内訳

定点での診療 二三人

巡回診療 四人

四、巡回場所 合計四カ所

灘高校体育館等三カ所

甲南本通会館

五、活動概要

和歌山・事務次長

竹田 正

阪神大震災に対する救援活動については、円滑な救援活動を行うため平成七年一月二十五日兵庫県災害援助対策院内会議を開催したのとおり決定し職員の意味統一を図った。

一、救援活動は済生会の救援活動の中で行う。
二、援助については、地域住民に迷惑をかけず従来の医療と救援活動を両立させる。

三、患者受け入れ体制は被災地よりの搬送患者四名分のベッドを確保し、透析患者は通常時間帯以外で五名受け入れを可能とする。

四、救援診療班は、内科系医師・外科系医師各一名、看護婦二名、事務員、薬剤師を派遣することとする。

当院の診療班派遣先は二月二十九日東灘区灘高校であったが、現地への交通手段について確実な情報が得られず当日派遣班は和歌山七時四十三分発の電車でJR天王寺へ、その後環状線で大阪駅へ行き大阪駅から住吉駅ま

で乗り継ぐ、大阪から住吉までは一部徐行運転をしていたがほぼ予定どおり到着した。車窓からの眺めは想像以上の悲惨さであった。住吉駅から灘高校まで徒歩で約二十分位かったが、歩道には倒壊した家屋の残骸が散乱し、高層住宅が傾き被害の大きさに驚く。

歩道や道路では工事関係の人、工事用自動車、ボランティアの人々が行き来し復興に向けて活動していた。

灘高校では、校内の保健室が診療室になっており、われわれが担当した二月九日十日は、医薬品・診療材料・食料品・飲料水等完備されていたが、災害当日等に担当していただいた方々のご苦労が想像された。また前日担当していただいた御所病院の方より校内の状況・診療状況・連絡事項等の引継を受けた。この引継で全体の様子が把握でき直ちに診療にあたることができた。

診療は診療室での診療と、近くの甲南本通会館に避難している患者さんへの往診（昼、夜各一回）、校内三カ所に避難している方への訪問（一日数回）が主である。近隣の病医院が診療を再開したためか思ったより受診者が少なく思えた。

しかし、避難生活をおくっているかたがた

は、避難所での寒さ・被災によるショック・財産や家族を失った絶望感・プライバシーが保護できない集団生活等精神的ストレスは想像以上のものが感じられた。

診療の途中凍傷用医薬品がなく近くの保健所へ取りにいった。保健所には多数の避難者が避難しており大変混雑していたが、係の人は素早く薬を提供してくれた。

しかし、避難所間の救護体制に格差があるようであり、これからは正確な情報を収集し、避難場所間の救護格差をなくす努力も必要と考えられる。

今回われわれが診療した患者さんは、延べ二十七人であり、四十一歳以上の方が八一％であった。また傷病別では、感冒、腰痛、高血圧、擦過傷等が主であった。

今回の震災で病院自体の弱さが証明され、医療機関として機能できなかった施設も多く今後医療機関間の連係や情報伝達方法等が不可欠なものと考えられる。

またこのような震災がいつ襲ってくるかわからない状況で、今われわれのできることを早く整理し、素早い行動がとれる体制づくりが必要である。

有田班

一、平成七年二月十日十時三十分

二月十一日十時三十分

二、診療班合計 六人

施設名 職名

氏名

四、巡回場所 合計三カ所

灘高内の柔道場、剣道場、講堂

避難者合計

一五〇人

五、活動概要

三、取扱い患者数合計 二七人

内訳

定点での診療 二七人

有田

内科医長

川口 伸也

外科医師

玉置 卓也

主任看護婦

新界 紀子

看護婦

大崎 博子

薬局長

中谷 和史

課長補佐

奥 正巳



診療終了後のミーティング

有田・經理課長補佐

奥 正巳

対策本部より診療班派遣の要請があり、当病院内において診療班派遣会議を開き、診療班を選出した。医師二名（内科系、外科系各一名）。看護婦二名。薬剤師一名。事務一名。平成七年二月十日午前十時三十分より翌十一日午前十時三十分までの二十四時間診療である。

対策本部および茨木病院診療班の報告内容により事前に把握でき、それに基づいて持参するもの等検討した。

車での現地入りは勿論考えず列車での現地入りを考え、午前十時三十分までなので当日の出発は無理と思い、和歌山ターミナルホテルに宿泊をし前日に集合した。これで乗り遅れ者も防げた。

青木駅からの現地入りだったが、出発の前々日にJRが住吉駅まで開通し、また和歌山病院診療班の厚意により、当初予定の和歌山発六時五十四分の普通列車が八時二十七分発の特急くろしおでよくなり、朝食もゆつくりとすることができた。梅田〜住吉間の列車も六〜七分の間隔で出ており予定よりも早く乗れた。ただ住吉駅から現地までは、地図を持っては来ていたが少し迷ってしまった。

新聞、テレビで見えて思っていたものの、目のあたりに見てその地震の大きさ、凄さを一段と痛感した。木造の家は全壊でゴミの山と化し、ビルは二階部分が一階の位置にあり、一階部分がへしゃいでいた。中に人がいたと思うとぞっとした。

灘高保健室を仮設診療所としており広さは充分。電気、水道は使用可。暖房設備はあり。トイレは校舎内使用不可で、グラウンドの仮設トイレと校舎外の体育館の水洗トイレ。ガスは使用できず電熱コンロを使用。飲料水はペットボトル。

食事はレトルト食品。レストランは営業していないがローソンは営業。睡眠具は、折りたたみベッド、診察ベッド、布団、毛布があり深夜の来診者もなく仮眠できた。

灘高内の柔道場、剣道場、講堂の三カ所の避難者一五〇名の昼前と夕方の二回の巡回。患者は二十七名。うち内科は十三名で風邪がほとんど。外科は十二名で手の指、足の先のケガが多い。

家の後片付けでの負傷だとか。来診時間帯は、朝少々で夕方、夜間に集中した。患者数は日増しに減少している。他の仮設診療所でも同じようである。

東灘保健所での連絡会では、診療は現状維持の意向であるが撤退の意志があれば申し出て下さいとのことで、開業医とのソフトランディングを考えていき、今のところはこのままの状態で行きたいとのことであった。

診療にあたっての反省事項、問題点は次のとおりであった。

- 一、外科的処置が多かったのでクーパー、ムッシュが不足した。
- 二、滅菌パックよりもガーゼ缶のほうが経済的。
- 三、患者の症状内容から鎮咳剤、点眼剤が少なかった。
- 四、再来患者の前回診療カルテ詮索に手間取った。

松阪班

一、平成七年二月十一日十時三十分

二月十三日十時三十分

二、診療班合計 五人

施設名 職名 氏名

松阪 内科医長 森田 孝一

薬剤師 藤岡 博道

主任看護婦 中村 昭宣

看護婦 辻 恵子

看護婦 松井 美貴

三、取扱い患者数合計 九九人

内 訳

定点での診療 六九人

巡回診療 三十〇四十人

四、巡回場所 合計五カ所

近距離地域内避難場所

五、活動概要

松阪・内科医師

森田 孝一

済生会松阪病院診療班は平成七年二月十一日より二月十三日までの期間（二泊三日、診療活動時間は四十八時間）、東灘区の灘高校保健室を拠点に阪神大震災救護活動に参加し応急的、対症療法的診療を行なった。チーム

は私の他藤岡内科医師、中村薬剤師、辻外来主任看護婦、松井看護婦の四人で構成された。

(1) 派遣前および派遣中の院内の診療体制の調整等

院長裁量により派遣員は内科医師二名、薬剤師一名、看護婦二名と決まりそれぞれの役職において派遣員が出発の約十日ほど前に選出された。内科医師選出に際しては阪神地区で勤務歴があるものと居住歴があるのが半ば自主的希望により選ばれた。派遣中選出された医師二名は外来担当当日が出張期間と重ならなかったため入院受持ち患者のみそれぞれの交替医師が期間中担当することになった。二名の医師が出張期間中の検査は可能な限り控えられ院内内科診療に支障を来さないよう配慮された。派遣前日には院長室において院長、事務長、看護総婦長を交えミーティングが行なわれ最終的なスケジュール調整確認がなされた。

(2) 到着までの交通事情

当院の救急車で行くことも考えられたが交通事情を考慮し公共交通機関を利用することにした。松阪駅を午前六時四十五分に出発し鶴橋まで近鉄、鶴橋から大阪まではJR環状線、大阪から住吉までは開通して間もないJR神戸線を利用し松阪から三時間ほどで住吉駅に到着した。住吉駅から診療所である灘高

校までは徒歩で十分程であった。JR大阪駅では混雑することが懸念され少し早めに出発したがそれほどではなかった。

(3) 周辺被災地の状況

地震後約三週間を経過する被災地に踏み込むことになった。JR神戸線で芦屋付近になると損壊建造物が目だつようになり、住吉駅も被害を受けており補修中であった。駅周辺の建物も中途階が下の階を押しつぶしたりして無残に傾斜し、倒壊した建物が歩道を占拠しているところも見られた。所々で解体工事も施行されておりあちこちで瓦礫の山が見られた。知覚的ショックはマスコミ報道で知っていた以上で改めて今回の地震のすごさに戦



校門前の診療班メンバー

慄を覚えた。また遺体安置所であった体育館を目の当たりにし唇が寒くなり、亡くなられた方々の御冥福をお祈りするため診療所内で派遣員全員が黙禱を行なった。

(4) 現地での診療班の衣食住事情

灘高校の保健室が診療所となり同時にそこが宿直室ともなったが寝具、暖房設備が完備されており寒さは問題とならなかった。食事は診療所内にインスタント食品が充分備えられていた。またコンビニストアで買い出しをすることも可能であった。

(5) 巡回診療場所、保健所のミーティング状況

巡回診療場所は灘高校内の三施設と近辺の避難所であったが日中は壊れた家での後かたづけのため避難民の数は比較的少なかった。保健所とのミーティングは三日に一回ほどであったためわれわれの救援活動中はなかった。前班より鎮咳剤が不足しているとの情報を得、自分たちで一部薬品を持参したが、医薬品は比較的充分備えられておりほとんど不自由しなかった。

総診察患者数は六十九名でありその内感冒患者三十六名、外傷、打撲等の外科系患者十七名、高血圧患者五名であった。深夜帯での診察も四件ほどあった。診療所避難所においてはこちらから積極的に声をかけ医療サービスに務めた。重症患者に関しては然るべき施設に連絡し紹介した。地元眼科医師会より眼科患者の診療回診もあり一名が診察を受けた。

診療記録は簡易カルテが作成されており再診患者用に患者名簿一覧表を作成し役立てた。

(6) 引き継ぎのエピソード、問題点

引き継ぎは円滑に進められたが事務的な業務内容も多く事務職の方が同行していただけというと思う。二月十三日よりは灘高生が登校を開始しわれわれが使用している保健室の一部を養護の先生が学校用として使用されることになり、また入学試験も近づいており試験日には保健室を受験のために空けてほしいとの要望があり本部に連絡をした。

(7) 反省事項、教訓

二名の医師で行動を共にしたのはよかったが外科系患者が比較的多数来られ、できれば内科系医師と外科系医師がコンビを組んだ方がいいと思う。

中和班

一、平成七年二月十三日十時三十分

二月十五日十時三十分

二、診療班合計 八人

施設名 職名

中和 医師

氏名

恒川 山人

米田 岳史

前田 稔彦

今川 敦史

山下 晃司

志田 裕子

藤原美津子

吉村 秀一

事務員

三、取扱い患者数合計 六九人

内訳

定点での診療

六七人

巡回診療

二人

四、巡回場所 合計七カ所

灘高（柔道場（一F）、講堂（二F）、剣

道場（三F）、灘高グラウンド）

健康センター

甲南教会

甲南本通会館

五、活動概要

がいいと思われた。また小児科医も可能ならば参加された方が望ましいと思われた。診療所外避難所回診時などお互いの連絡を取るため携帯電話は大変重宝した。診療活動に際してはどこまで自分たちの活動範囲なのかを理解し、同時に避難所医療になが要求されているのかを把握し対応していくことの重要性を認識した。情報手段を確保した上で積極的に情報を入手し且つ適切に提供していくことが重要である。

(8) 持参してよかったもの、など

縫合セットを一式持参していき切創患者の治療に役立った。現地診療所内には煮沸消毒器具が装備されておらず外科用処置機器の消毒ができず困った。

中和・副院長

今川 敦史

派遣前および派遣中の院内の診療体制の調整等

震災後、病院を挙げて応援協力体制をとるべく院長を議長とする阪神大震災対策委員会を設置して、連日にわたり情報の収集と応援態勢の検討を行った。

①奈良県より依頼の被災者受け入れ医療機関



保健室内のメンバー

の登録を行った。

②それに伴い院内当直体制の増員を行った。

④済生会灘診療所のスタッフの派遣については全面的に協力するようにした。

以上のごとく決定した。

医療スタッフについては、院内で希望者を募り派遣した。また、スタッフの身分は出張扱いとした。スタッフの派遣はいずれも二泊三日体制であったので特に院内の診療体制を調整することなく対応できた。

到着までの交通事情（特に初期）

当初、病院救急車による派遣も検討したが、当院の当番は震災一カ月目で、JR住吉駅まで開通しており、またJR住吉駅から灘診療所までは徒歩で十分程度であったので交通事情に関しては問題はなかった。

周辺被災地の状況

交通状態も回復傾向にあり、大きな通りに面した建物、損傷を受けながらもどうか日常生活が再開され、復興の活気にあふれている面も見られた。

その反面、狭い商店街や民家の建て込んだところでは震災後のまま放置されており、復興活動もどこから手をつけてよいかわからず、犠牲となった家族の霊を慰めるのに精一杯という場所が沢山見られ、個人的レベルでの復興は未だ手つかずという状況にあり、心痛む思いが強かった。灘高校は二百人前後の避難民が生活しているが、巡回時は遠慮なく訴えの聞けるような優しさにあふれた対応が必要

であることが感じられた。

現地での診療班の衣食住事情

まず医薬品であるが、災害対策本部より十分準備されており、東灘保健所に補充を依頼する必要は全くなかったと言った。ただ患者数が多い場合、約束処方のようなもので投薬せざるを得ないのではないかと思われた。診療所での生活は十分用意された状況であった。すなわち、食料はレトルト食品がたくさん準備されており、食事に関しては全く問題ないと言った。また、灘高校内では電気、水道、水洗トイレも使用可能な状況であり、衛生状態は非常に良好であった。

仮設ベット、診療ベッドで休むのであるが、われわれのチームは深夜の患者が少ないのにも関わらず不眠であった。

なお、診療所は衛生面、ゴミの処理等すべて行える状況であったが、今後の問題として班毎のゴミの持ち帰り、特に感染性廃棄物の持ち帰り等の手順等を明確にしておく必要があった。

巡回診療所、保健所のミーティング状況

巡回診療所は当初三カ所の予定であったが、一カ所は巡回場所も不明で避難者の状態も把握できなかった。残りの二カ所は避難者の数が比較的少なく生活状況はほぼ良好に保たれていた。また他の医療救援チームと重複することがあった。

東灘保健所でのミーティングは三日から四日に一回定期的に開催されており避難所、診

療所における問題点が提起され、対応策が検討されていた。医療面における最大の問題点は、地元診療所とのソフトランディングの問題であった。

即ち、そろそろ地元診療所の診療活動も再開されつつあり、東灘保健所では無料で医薬品も十分準備されているのに対し、地元診療

静岡班

一、平成七年二月十五日九時三十分

～二月十七日十時〇〇分

二、診療班合計 六人

施設名 職名 氏名

静岡 神経内科医員 吉井 仁

外科医員 李 政秀

看護婦長 佐野 若代

看護婦 田村万寿美

看護士 杉山慎太郎

事務 杉原 孝幸

三、取扱い患者数合計 八六八

内 訳

定点での診療 六七人

巡回診療 十九人

四、巡回場所 合計五カ所

甲南本通会館

横屋会館

兵庫県健康センター

教会

民家

所では準備等のまだまだ不完全のままで再開しているという状況であった。

引き継ぎのエピソード、問題点

問題点としては、十分な検討を行う前に診療所を開設せざるを得なかったため無理のないことであるが、カルテの整備が不十分で患者の把握（特に再来患者）が難しかった。

五、活動概要

静岡・神経内科医員

吉井 仁

当院では小澤第一医療部長を中心とする先遣隊、県の要請で田島副院長・奥川救命救急部長を中心とする第一次救護班が既に派遣されており、われわれ第二班（医師・吉井、李、看護職員・佐野・田村・杉山、事務・杉原の計六名）は神戸出発前に二回のミーティングをし、その際、先遣隊の小澤先生、第一班で行かれた田島先生、奥川先生から現地状況を説明され、ある程度の予備知識を持って出発することができた。

前夜は大阪新阪急ホテルに一泊、快適なホテル住まいでバイキング形式の朝食をとり、派遣先である灘高校保健室に向け二月十五日

朝ホテルを出発。当日よりJR線は住吉駅まで快速が通じることになり、運よく二十分で住吉駅まで到着することができた。途中の沿線では、住吉駅に向かうにつれ建物の崩壊が激しく、前夜の大阪の状況とはあまりにも様相が異なり今さらながら身の引き締まる思いがした。住吉駅を降りると国道二号線を東に向かい地図を頼りに目的地である灘高校を目指し、引き継ぎ時間の一時前午前九時三十分には灘高校保健室に到着した。到着後、灘高校長また保健室の本来の主である養護の先生に挨拶したあと、前班である奈良の中和病院スタッフから手際よい申し送りを受けいよいよ現地での診療がスタートすることになった。しかし、灘高校側は中学・高校入試が近いこともあって済生会診療班には早く出ていってほしいという意向を持っており、あまり歓迎されないムードであった。

灘高保健室内はまさに野戦病院の様相を呈していたが、本部や前班の病院から持ち込まれた薬品や衛生材料は十分にあり、不足した薬品は徒歩で五分の保健所で入手できた。また室内は暖房が効いており、室内で水道水が使える、食料も十分確保されており被災者の方々には申しわけない環境であった。

現地での診療は灘高保健室診療と巡回診療であった。灘高校内にある講堂・柔道場・剣道場にはまだ約百五十人程の被災者の方が避難しており、この巡回診療をするともに、他に近くの診療所のない中規模・小規模の避



診療班のメンバー

難所五カ所も同時に巡回診療を担当した。各避難所とも共通して暖房がないためには非常に寒く、また被災者は日中は崩壊した自宅の後片付けに忙しく、残っている被災者は風邪を引いて寝込んでいるか慢性疾患があるかあるいは高齢者が多く、われわれは二日間の巡回診療であつたがすぐ顔なじみになった。中には氷雨の中を働いて高熱を発し寝込んであるボランティアの方も少なくなかつた。

巡回診療では努めて周りの景色を見て歩いたが、少し古い木造建築は言葉では言い表せないほどの壊滅的打撃を受けていた。既に震災から一カ月が経過していたが、建物の復旧は始まつたばかりでいたるところでブルドー

ザやシヨベルカーが唸りをあげて土煙をあげており、あたりの空気は非常に埃っぽく、また少し広い道路では渋滞した車から排気ガスと土煙がもうもうと巻き上がりマスクなしではすぐに喉をやられそうな気がした。この寒さと、埃っぽい空気、避難所で余儀なくされている集団生活が重なつては風邪を引いて当然と痛感した。インフルエンザは下火になつていると出発前に聞かされてはいたが恐らくまだまだ続くであろうし、連日この大気にさらされては将来呼吸器系疾患の続発が懸念される。

結局二日間の全診療患者数は八十六名(うち巡回診療十九名)、疾患別では感冒が約五割、小創傷処置、包交、打撲等の外傷(新規受傷はほとんど自宅の後片付けの際の受傷)が二割、高血圧や糖尿病等の慢性疾患で通院していた病院の倒壊で継続して治療できない

方や悪化した方が約二割であつた。

最後に、われわれ一人一人のできることは微々たるものであるが、ともかく災害時には皆で助けあうということの重要性を現地で肌身に感じた。また医療というものは個人の能力発揮ももちろん大事ではあるが、チームワークがなにより大切であることを改めて痛感させてくれた。同時に今回のような阪神大震災級の地震が静岡に生じたならばわが済生会病院周囲は確実に壊滅し、また当院も老朽化した南館を始め大被害を受けるのではないかと予想される。

来るべき東海大地震は今回の三十倍ともいわれており、圧倒的な自然災害の前には人間はあまりに無力であることもまた思い知らされ、本当にこれに備える術はあるのかという思いを新たにしつつ、二日間の短い被災地での診療を終え神戸をあとにした。

福井班

一、平成七年二月十七日十時三十分

二月十九日十時三十分

二、診療班合計 五人

施設名 職名

福井 整形外科医長

内科医長

看護婦

庶務課

氏名

青竹 康雄

橘 良哉

山下 文子

谷田 清美

梶山 浩之

三、取扱い患者数合計 七六人

内 訳

定点での診療

巡回診療

四八人
二八人

四、巡回場所 合計七カ所

灘高校内柔道場

同校剣道場

同校講堂

健康センター

甲南教会

甲南本通会館

横屋会館

五、活動概要

福井・整形外科医長

青竹 康雄

当院では、福井県からの依頼もあり、診療班としては第三班目の派遣であった。各班とも、医師は内科系（内科）、外科系（外科、脳外科、整形外科）より各一名（複数医師科より選抜）、ナースは病棟より二名とし、派遣中の業務への影響を最小限とした。

平成七年二月十六日（木）午後出発。福井から大阪まではJRの在来線特急にて直通（約二時間）。大阪で本部指定のホテルに宿泊。翌日は、大阪より住吉駅まではJR快速にて約三十分。全く支障はなかった。

住吉駅前のビルは、ほぼ倒壊状態。震災の被害を直に肌で感じた瞬間である。これより以西は、JRが不通にてバス代行のため、乗換えの人々でかなり混んでいた。道路は瓦礫にてかなり狭く、強い余震がくれば再び倒壊の恐れがありそうだった。

灘高周辺は、通行の人々はかなり落ちついた雰囲気、通学の学生さんも見られた。行方不明の方を探す姿もなかったが、ほぼ全壊

状態である木造住宅の後始末の始まった様子もなかった。一部高層のアパートのみを取り壊しを始めており、ほこりっぽい感じであった。

灘高校庭では、自衛隊の駐屯が続き、「千歳湯」と銘うち入浴サービスを行っていた。コンビニも品数は少ないものの再開されており、道路沿いではボランティアの方々による市も開かれていた。

灘高保健室は広く、特に壊れたところもなく、十分な施設であった。エアコンもあり、水洗トイレも回復。食事がすべてインスタント類であったが、本部からの配給も十分すぎるくらいだったので、コンビニに買い出しにいく必要もなく、毎食別々のメニューにて食事ができた。

ただ、ベッドは二つしかなく、男性軍は床に布団を敷いて休んだ。滞在中一度、震度三程度の余震があったが特に被害はなかった。巡回は灘高内の柔道場、講堂の三カ所、校外では、健康センター、甲南教会、甲南本通会館、横屋会館の四カ所、さらに、腰を痛めた方のいる民家一カ所であった。昼は避難所に残っている方は少なかったが、風邪、筋肉痛、下痢の方が目だった。また、ボランティアの方で重症の風邪が多かった。

保健所のミーティングでは、地域医師会の診療所が管内でも百三十七施設が診療再開しており、各救護所は徐々に縮小していく予定となった。

引継では、薬、備品など十分にあり、補充は不要と思われたが、心配らしく重い荷物を抱えていらつしやったのは、われわれも同じだっただけに、ご苦労がうかがわれた。灘高側は、入試も近く、診療班の滞在を歓迎していないとのことであったが、保健の先生とも楽しく会話し、特にトラブルはなかった。

震災後一カ月ともなると、病人、怪我人もほとんど緊急性を要する人はいない。かなり手持ち無沙汰な感じであった。出勤が遅すぎたのであろう。上からの指示を待つのではなく、独自の救護班を独自の判断で、直ちに送り出す必要があったと思われる。特に持参し



巡回中に撮影（東灘区内）

た訳ではないが、携帯電話、自転車、ラジオ、カセットコンロが普段の生活で使う以上に便利と感じた。

ナースは訪問看護婦用の制服を着用したが、

新潟第二班

一、平成七年二月十九日十時三十分

二月二十一日十時三十分

二、診療班合計 一〇人

施設名 職名 氏名

新潟第二 消化器科部長 本間 明

小児科医長 佐藤 勇

看護婦 石井 和代

梶村千恵子

総務課主任 伊藤 孝憲

循環器科医長 船崎 俊一

内科医長 鈴木 靖

副看護婦長 早川 節子

看護婦 坂本 照美

医療ソーシャルワーカー

北村 純夫

三、取扱い患者数合計 七七人

内 訳

定点での診療 五七人

巡回診療 二〇人

四、巡回場所 合計六カ所

健康センター

甲南教会

甲南会館

医師も救護班らしい統一したものがあれば、町内を歩いても声をかけてもらいやすかったと思う。

横屋会館

柔道場

体育館

五、活動概要

新潟第二・総務課主任

伊藤 孝憲

当院は、阪神大震災現地対策本部の救援活動計画に従い、平成七年二月十九日午前十時半から二十一日午前十時半までの期間、東灘区灘高校保健室において救援診療活動を行った。

診療班の編成は、対策本部のアドバイスを受け医師二名、看護婦二名、事務調整員一名の計五名を一チームとし、先発班、後発班の二チームを編成し中日で交替することとした。編成メンバーについては、震災発生直後から本会で行っていた援助活動の情報を逐次院内関係者に発信して気運が高まっていたためか、診療班参加希望者を募ると各職種ともかなり

の数にのぼり調整を余儀なくされた。結果、先発班を本間医師、佐藤医師、石井看護婦、梶村看護婦、伊藤事務員で構成。後発班を船崎医師、鈴木医師、早川看護婦、坂本看護婦、北村MSWで構成し、合同で準備に取りかかった。

派遣前の準備としては、「まず現地の状況はどうなのか？」という情報収集であるとした。幸い、きめ細かい配慮で対策本部から送られてくる手引き等の情報および各診療班からの報告書を頼りに、大体のことは予想、把握できた。それらの情報を参考に派遣メンバーを中心に関係者による事前準備打ち合わせを行い、出発から現地での診療計画、携行装備の調達チェックを行った。

当院診療班は、先発、後発班とも診療日の前日に大阪入りし、大阪市内のホテルで宿泊して当日の診療に備えた。後発班においては、中津病院の現地対策本部を訪問、慎重に現地情報を収集し、診療に臨んだ。大阪市内から現地までの交通については、地震発生から一カ月余経っているので、JR線住吉駅までを利用したが、復旧済であった。しかしながら乗車し、住吉駅まで向かうにつれて車窓に写し出される風景は、言葉では言い表せないような光景で、それは異次元空間を走る列車からのものなのか。

先発班が平成七年二月十九日、午前十時前に本会常駐診療所である東灘区灘高等学校に到着。JR下車の住吉駅から徒歩で現地灘高

等学校まで向かう途中にも、筆舌に尽くし難い光景が広がっていた。十七日、十八日と診療活動をしてきた福井県済生会病院から一通りの申し送りを受け、午前の巡回診療は同行して引継を受けた。福井の診療班は一チームで二日間の診療に従事したということであったが、疲れの色もなくわれわれに細かくアドバイスをしてくれた。

当班の診療活動が開始された。この場所での診療活動は震災発生から一カ月経過しているので、重篤、悲惨な患者は見受けられず、この時季、全国的に猛威を奮っていた感冒が圧倒的に多かった。また高齢者層では高血圧、近隣の倒壊の状態が酷いためか、打撲・外傷治療の患者も多かった。

診療所に訪れる避難住民の表情も大分落ち着いて来たように感じられるが、災害発生間もないころの診療のカルテ（カルテと言ってもその時、ノートに殴り書きであっただけの記録だった。）を見るとその場に凄まじい状況があったのではないかと察することができた。

現地での診療活動に際して、対策本部は、十分な診療活動ができるよう環境整備に配慮していた。「災害医療」の始動においてまず考えなければならぬことは、診療現場の環境整備と聞いている。この点、本部によるバックアップがまめに行われ、衣食住並びに診療関連備品や連絡報告の設備はある程度整っていたので、われわれの段階では十分に診療

に専念できた。前述のとおり、診療活動の環境整備がなされていたため、持参したもののなかに不必要なものがあつたり、要らぬ取り越し苦労もあつた。あくまで事前情報の確実な収集が原則と痛感。

済生会新潟第二病院の先発・後発班の診療報告を僭越ながらほんとうに概略に止めてまとめさせていただいた。最後にほんの一言個人的な感想を述べるなら、私は事務方（連絡調整員）として参加させて頂いた。正直いつて、「災害医療」という現場で事務職員の私になにができるのかと不安だった。実際現場

宇都宮班

一、平成七年二月二十一日十時三十分

二月二十三日十時三十分

二、診療班合計 五人

施設名 職名 氏名

宇都宮 外科医長 植松 繁人

内科医員 久保田英司

看護部主任 柴田 浩子

看護部副主任 小山 由佳

事務部係長 亀山 良弘

三、取扱い患者数合計 七三人

内 訳

定点での診療 五六人

巡回診療 十七人

四、巡回場所 合計四力所

健康センター

ではまったくの非力だったと思う。ただしかし、医師や看護婦、医療に携わるその職種に関係なく、あの現場、被災地をみて感じたこと、思ったことは同じだと思う。それは、この経験をなにか生かしたいという前向きな思いだと思う。診療班に何らかの形で参加した皆さんはかならずこの思いを成就することと思う。

以上最後に、現在も避難所生活を強いられている被災地の皆さんに応援を送ると共に、素晴らしい未来へ向けての復興を祈念して報告を終わります。

避難所二カ所

灘高剣道場・講堂

五、活動概要

宇都宮・事務部総務課係長

亀山 良弘

平成七年二月二十日（月）、午後三時過ぎに新幹線にて宇都宮駅出発、同八時ごろ大阪中津の東洋ホテルに到着し宿泊した。翌二十一日（火）中津を出発、JR線にて午前十時に住吉駅に着き、徒歩で灘高校保健室に向かった。新潟第二病院より引き継ぎをうけて診療を開始

した。

- メンバーは、植松医長（外科）久保田医師（内科）、柴田看護婦、小山看護婦、亀山事務員の五名である。出発前に対策本部あてにFAXで次の問い合わせを行った。内容は
- 一、 難高避難所に収容している概算の人数
 - 二、 収容者年齢構成
 - 三、 老人が多い・小児が多い・その他の三者択一
 - 四、 風邪などの流行の状況
 - 五、 内科の医師だけでよいのか



診療班のメンバー

六、 老人などの慢性疾患の薬の常用者が多

いか

七、 その他

などである。この回答に基づき、風邪が流行しており、老人が多く、被災した家屋の片づけが始まったことによる切り傷や腰痛が増えたことから、派遣メンバーを内科と外科の医師として、手術室および外科病棟経験看護婦により構成した。現地の状況は毎日変わるので情報を収集することが重要である。また持針器や薬袋がないという連絡を受けていたので持参した。

また、東灘診療所の周辺の道路は、地震による破損が激しく、夜間の東灘保健所でのミーティングでの往復など、懐中電灯は必需品である。

また使い慣れた電卓を持参したので本部に提出する統計報告に役立った。

来院患者は、風邪、高血圧、切傷などがほとんどであった。総患者数七十三名、うち巡回診療は灘高校講堂の避難所その他三カ所で十

中津班

一、平成七年二月二十三日午前十時〇〇分

～二月二十四日午前十二時〇〇分

二、診療班合計 八人

他に救急車運転手、延四名派遣。阪神電車脱線で御所病院スタッフ送り。資材搬送。灘高校撤収物資回収。（二月七日、十日、二十

七名であった。

診療は、内科医師と外科医師が患者の症状により看護婦の介助をうけてあたり、事務員は対策本部に提出する各種報告資料の作成と連絡の他、総合調整業務を行った。対策本部より、診療所を撤退するので医薬品の在庫数調査を依頼されたので、全員で医薬品の在庫調べを行った。

診療の合間に行ったので、一日近くかかってしまった。薬剤師がいれば、調査するスピードが違っていたと思われ、薬剤師の必要性を感じた。

また、灘高校が受験願書の受付期間中であり、忙しく働いている学校事務室に患者さんからの受診の問い合わせの電話がはいり保健室の先生にお手数をおかけしました。

二月二十三日(木)中津病院に引き継ぎを終了し、東灘保健所に挨拶をして帰路につきました。

神戸が一日も早く復興することをお祈りいたします。

三日、二十四日

施設名 職名
中津 医師

看護婦

氏名	宮脇 尚志
	寺岡 朋子
	土屋 順子
	丸山 里美

薬剤師

青山 隆子

事務

高柳 和代

鈴木 辰美

小倉 正行

三、取扱い患者数合計 三四人
四、巡回場所 合計五カ所

柔剣道場

講堂（灘高校内）

近隣の学校

公民館

一般会社の避難所

五、活動概要

中津・副院長

小林 克也

東灘区の灘高校を拠点として一月二十六日に中津病院の救護チームが参加して以来、約一カ月間 各地の済生会病院が交代で診療にあたってきた。地域の病院や開業医家の医療活動がぼつぼつと復旧する頃合いをみて、二月二十四日の午前中に上記の救護チームを撤回することになった。

前日より最後の医療活動を中津病院が行っていたこと、撤収に際しての保健所、灘高校そして避難所の方々との折衝などの必要性に備えて、二月二十四日早朝、一旦中津病院に出勤し、関係者と協議後、徒歩で阪神梅田駅

に向かい、既に御影まで開通していた同線を利用し、魚崎駅で下車、住吉川に沿って徒歩約十五分で灘高校に到着した。

この時期には、主として体育館などで二百名を超える地域の方々が不自由な生活を続けられていた。幸い、灘高校診療所の閉鎖はあらかじめ伝わっていたためか、表面だった撤収に際してのトラブルはみられなかった。撤収作業を進める中、若干の受診患者が来られたが、殆どは投薬のみを希望されていた。一カ月間二十四時間体制の診療所で、冬期にいつも数名滞在できるだけの生活用品が準備されていたので、持ち帰る品はかなりの物量になっていた。

前日の診療班と当日に病院より撤収の応援にかけつけたメンバーが加わり、手際よく作業が進められていた。同校保健室の整理整頓後、本部の方々と共に中津病院が交代で診療を行ってきた医療チームを代表する形で、灘高校校長にお目にかかり、保健室を診療チームに提供して頂いたお礼の言葉を述べた。次に東灘区保健所に向き、所長および関係の方々に、本日をもって灘高校の診療所を閉鎖する由報告し、残った医薬品の管理など業務の引き継ぎを行った。

撤収作業はおおむね昼頃で終わったので、レトルトのカレーライス、自衛隊の炊き出しによる差入れのうどんなどで、撤収にあたったメンバー全員で、片づけられた保健室の中で、昼食をとった。帰路は午後の中津病院で

の業務の関係から、最もスムーズに短時間で帰れるルート、すなわち徒歩でJR住吉駅に出て、普通電車で大阪駅に向かい、徒歩で中津病院に帰った。

被災者の思い、医療を含めたトータルの援助へのニード、震度七の直撃による物資的損壊や心の痛み、そして援助の手をさしのべてくれた人達への感謝の気持、これらは被災した人達にしか判らないかも知れない。私自身、口では体験を語ったこともあるが、被災後、震災に関する文書を書いたのは、思い出したくもない気持ちもあり唯一この報告書のみである。

これを書いている日に、西宮市により自宅の解体が行われ、その周辺は全壊、倒壊が数十件、この率は八〇%を超えている。死者も間近に発生し、最初に行った医療行為は、三〇m離れた倒壊現場で、近所で動ける限りの男手を動員し、救出し顔面が腫れ、左眼がふさがった小学生の女の子の診療であった。こんな光景がおそらく阪神間では無数にあったろう。

未曾有の出来事が、神戸を主とした阪神間、それもわが町、西宮市を直撃するとは…。政府、各自自治体の初動体制、おそらくしつかりと情報を把握し、コーディネーターが各医療チームの活動をもっと有効的に行えば…など、震災後の医療活動に関してはいろいろと意見があるだろう。

しかし、病弱、高齢で全てを失った避難所

の方々、さらに避難所の診療所に来ることさえできなかった要介護病人さんにとっては、医療機関が多数、その機能を失うか停止してしまった時期、たとえ完全な形、通常の業務ほどではなくとも、できる限りの医療に関する援助の手をさしのべたことは、それ自体で充分に評価されうると思われる。

済生会本部、中津病院にあった災害対策本部、灘高校と長田区の真野小学校に置かれた二つの救護チーム、活動に参加されたおびただしい数の職員や関係者の方々、その誠意と労苦に対し、被災者の立場からも、深甚の敬意を表したい。



2/23～24のメンバー